

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第89集

# 江の河原遺跡

2015

公益財団法人山口県ひとづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第89集

え が わら い せき  
江 の 河 原 遺 跡

2015

公益財団法人山口県ひとつづくり財団

山口県埋蔵文化財センター

## 序

本書は、美祢市東厚保町川東地内での農地整備事業の実施に先立ち、山口県美祢農林事務所及び山口県教育委員会から委託を受けて、同地内に所在する江の河原遺跡において、公益財団法人山口県ひとづくり財団山口県埋蔵文化財センターが実施した発掘調査の記録をまとめたものです。

歴史的財産である遺跡の保護については、基本的には現状保存が望ましいところですが、開発事業等に伴い、やむを得ず消失することになる部分については、事前に発掘調査を実施し、関係機関と調整を図りながら記録保存をすることとしております。

このたびの発掘調査は、平成25年度から平成26年度にかけて実施しましたが、この調査で、現在の江の河原の集落は、13世紀後半（鎌倉時代）に開拓された農村が元になってかたちづくりられ、集落の立地する場所や耕作地は今も昔もほぼ同じ場所であることが地形や遺構、そして生活用具である土器などの出土状況からも確認されました。また、鎌倉時代から江戸時代にかけての土師器、瓦質土器、輸入磁器（青磁・白磁）、国産陶磁器など幅広い時代の遺物を発見し、当時の人々の生活文化や社会の状況等を知る上で、数多くの貴重な手がかりを得ることができました。

この発掘調査をまとめた本書が、文化財愛護への理解を深めるとともに、教育及び文化の振興並びに学術研究の資料として広く活用されることはもとより、本書を通し、ふるさとの歴史や文化を改めて知っていただくことで、郷土に愛着をもつ契機となり、活力とうるおいに満ちた郷土の創造と発展に寄与することを心から祈念する次第です。

最後になりましたが、発掘調査の実施及び報告書の作成に当たり、御指導及び御協力をいただきました関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成27年3月

公益財団法人 山口県ひとづくり財団  
理事長 松 永 貞 昭

## 例 言

- 1 本書は、平成25年度および26年度に実施した江の河原遺跡（山口県美祢市川東<sup>えがわらいせき</sup>地内<sup>かわひがし</sup>）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は公益財団法人山口県ひとつくり財団が山口県美祢農林事務所の委託〔平成25年度江の河原遺跡調査契約名：農地整備事業（経営体育成型）川東西地区埋蔵文化財発掘調査業務1号（変更1回）および平成26年度江の河原遺跡調査契約名：農地整備事業（経営体育成型）川東西地区埋蔵文化財発掘調査業務2号、農業競争力強化基盤整備事業川東西地区平成26年度埋蔵文化財発掘調査業務3号〕ならびに山口県教育委員会の委託〔平成25年度江の河原遺跡調査契約名：平成25年度農地整備事業（経営体育成型）川東西地区に伴う江の河原遺跡発掘調査業務および平成26年度江の河原遺跡調査契約名：平成26年度農地整備事業（経営体育成型）川東西地区に伴う江の河原遺跡発掘調査業務〕を受けて実施した。
- 3 調査組織は、次のとおりである。

調査主体	公益財団法人山口県ひとつくり財団	山口県埋蔵文化財センター
調査担当	主 査	石 井 龍 彦（平成25年度）
	文化財専門員	上 田 克 也（平成26年度）
	文化財専門員	中 里 伸 明（平成25・26年度）
	調 査 員	荒 蒔 周 平（平成25・26年度）
- 4 本書の第2図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「伊佐」「於福」を複製使用した。第1図、第3図、第48図は、山口県美祢農林事務所提供の地図を複製使用（一部修正）した。
- 5 本書で使用した方位は、国土座標（世界測地系）の北を示し、標高は海拔高度（m）である。
- 6 本書で使用した土色の色調の表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式による。
- 7 図版中の遺構・遺物番号は、実測図の遺構・遺物番号と対応する。
- 8 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

S B	：掘立柱建物	S K	：土坑	S P	：柱穴	S D	：溝
-----	--------	-----	-----	-----	-----	-----	----
- 9 本文中で用いる遺物の分類は、以下の文献による。

瓦質土器：岩崎仁志1999「足鍋再考」『陶埴』第12号 財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター 岩崎仁志2003「中華鍋と西日本の把手付鍋－筒状の把手を有する鍋の動向－」『山口大学考古学論集 近藤喬一先生退官記念論文集』近藤喬一先生退官記念事業会 岩崎仁志2007「山陽西部における中世の土製煮炊具」『中近世土器の基礎研究』21 日本中世土器研究会

陶磁器：太宰府市教育委員会2000『大宰府条坊跡XV - 陶磁器分類編』小野正敏1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会 九州近世陶磁学会2000『九州陶磁の編年』
- 10 報告書作成の過程で、陶磁器については、丸尾弘介氏（山口市教育委員会）、徳留大輔氏・市来真澄氏（山口県立萩美術館・浦上記念館）に御教示をいただいた。
- 11 資料の鑑定・分析に関して、金属学的分析、放射性炭素年代測定（AMS測定）、貝類遺体鑑定を業者に委託し、その成果を第IV章に掲載した。
- 12 本書の作成・執筆は、上田・中里・荒蒔が共同で行い、編集は上田が行った。なお、執筆分担は、次のとおりである。

I 中里 II 中里 III 荒蒔（遺構）・中里（遺物） IV 業者 V 中里



# 本文目次

I	調査の経緯と概要	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査経過の概要	1
II	遺跡の位置と環境	4
1	地理的環境	4
2	歴史的環境	4
III	調査の成果	9
1	1 地区	9
2	2 地区	14
3	3 地区	18
4	4 地区	24
5	5 地区	28
6	6 地区	42
IV	自然科学分析	56
1	江の河原遺跡出土炉壁 鉄滓の分析調査	56
2	放射性炭素年代測定	63
3	江の河原遺跡から出土した貝類遺体	65
V	総括	67
1	調査の意義	67
2	調査結果の概略	67
3	遺物に関する所見	67
4	遺構に関する所見	68
5	まとめ	69

## 表目次

第1表	江の河原遺跡周辺に関わる史実等抜粋	8
第2表	遺物観察表	50
第3表	供試材の履歴と調査項目	59
第4表	供試材の化学組成	59
第5表	出土遺物の調査結果のまとめ	59
第6表	測定試料および処理	63
第7表	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	64
第8表	1地区SD1の貝類遺体	66

## 挿図目次

第1図	調査区位置図	2
第2図	江の河原遺跡 周辺遺跡図	5
第3図	江の河原遺跡の立地	6
第4図	江の河原の石造板碑	7
第5図	1地区 遺構配置図	10
第6図	1地区 壁面土層断面図	11
第7図	1地区 溝実測図	12
第8図	1地区 出土遺物実測図	13
第9図	2地区 遺構配置図	15
第10図	2地区 壁面土層断面図	16
第11図	2地区 土坑実測図	17
第12図	2地区 出土遺物実測図	17
第13図	3地区 遺構配置図	19・20
第14図	3地区 壁面土層断面図	21
第15図	3地区 掘立柱建物実測図	22
第16図	3地区 出土遺物実測図(1)	22
第17図	3地区 出土遺物実測図(2)	23
第18図	4地区 遺構配置図	25
第19図	4地区 壁面土層断面図	26
第20図	4地区 土坑実測図	26
第21図	4地区 土坑・柱穴・溝実測図	27
第22図	4地区 出土遺物実測図	27
第23図	5地区 遺構配置図	29・30
第24図	5地区 壁面土層断面図	31

第25図	5地区	掘立柱建物実測図	32
第26図	5地区	土坑・柱穴・溝実測図	33
第27図	5地区	出土遺物実測図(1)	34
第28図	5地区	出土遺物実測図(2)	35
第29図	5地区	出土遺物実測図(3)	36
第30図	5地区	出土遺物実測図(4)	37
第31図	5地区	出土遺物実測図(5)	38
第32図	5地区	出土遺物実測図(6)	39
第33図	5地区	出土遺物実測図(7)	40
第34図	5地区	出土遺物実測図(8)	41
第35図	5地区	出土遺物実測図(9)	41
第36図	6地区	遺構配置図	43
第37図	6地区	壁面土層断面図	44
第38図	6地区	掘立柱建物実測図	45
第39図	6地区	土坑・溝実測図	46
第40図	6地区	出土遺物実測図(1)	47
第41図	6地区	出土遺物実測図(2)	48
第42図	6地区	出土遺物実測図(3)	49
第43図		炉壁の顕微鏡組織	60
第44図		鍛冶滓の顕微鏡組織	61
第45図		炉壁(KOK-2)・椀形鍛冶滓(KOK-3)のEPMA調査結果	62
第46図		暦年較正結果	65
第47図	1地区SD1出土のイシガイ科殻皮		66
第48図		微地形復原図・主要遺物変遷図	70

## 図版目次

- |      |     |                  |      |       |                         |                     |
|------|-----|------------------|------|-------|-------------------------|---------------------|
| 図版1  | 調査区 | 全景(南東から)         | 図版12 | 5地区   | 全景(北から)                 |                     |
| 図版2  | 調査区 | 全景(南西から)         |      | 5地区北端 | 完掘状況(西から)               |                     |
| 図版3  | 調査区 | 遠景(北西から)         | 図版13 | 5地区   | 西壁土層(北東から)              |                     |
| 図版4  | 1地区 | 全景(北から)          |      | 5地区   | 掘立柱建物(SB1~SB4)<br>(南から) |                     |
|      | 1地区 | 西壁南側土層(南東から)     | 図版14 | 5地区   | SK1土層(東から)              |                     |
|      | 1地区 | 東壁北側土層(南西から)     |      | 5地区   | SK3土層(南から)              |                     |
|      | 1地区 | 北壁東側土層(南東から)     |      | 5地区   | SK3完掘状況(北から)            |                     |
|      | 1地区 | 北壁中央土層(南東から)     |      | 5地区   | SP42土層(北から)             |                     |
| 図版5  | 1地区 | 北壁西側土層(南から)      |      | 5地区   | SP43出土状況(南から)           |                     |
|      | 1地区 | SD1完掘状況(北西から)    | 図版15 | 5地区   | 谷状落ち込み完掘状況<br>(北西から)    |                     |
|      | 1地区 | SD1南東壁土層(西から)    |      | 5地区   | 北壁(谷状落ち込み)土層<br>(南西から)  |                     |
|      | 1地区 | SD1礫出土状況(南東から)   | 図版16 | 6地区   | 全景(北から)                 |                     |
|      | 1地区 | SD1土層(南東から)      |      | 6地区   | 西壁土層(南東から)              |                     |
|      | 1地区 | SD2土層(南西から)      |      | 6地区   | 北壁西側土層(南東から)            |                     |
|      | 1地区 | SD2完掘状況(南西から)    |      | 6地区   | 北壁中央土層(南東から)            |                     |
| 図版6  | 2地区 | 全景(西から)          |      | 図版17  | 6地区                     | 掘立柱建物(SB1・SB2)(北から) |
|      | 2地区 | 東壁土層(南西から)       |      | 6地区   | SK1出土状況(西から)            |                     |
| 図版7  | 2地区 | 西壁土層(東から)        | 図版18 | 6地区   | SK5土層(東から)              |                     |
|      | 2地区 | SK19土層(南から)      |      | 6地区   | SK5完掘状況(東から)            |                     |
|      | 2地区 | SK1土層(北から)       |      | 6地区   | SD1完掘状況(東から)            |                     |
|      | 2地区 | SK1完掘状況(北から)     |      | 6地区   | SD2完掘状況(北から)            |                     |
|      | 2地区 | SK13土層(西から)      |      | 6地区   | SD1土層(東から)              |                     |
|      | 2地区 | SK13完掘状況(西から)    |      | 6地区   | 包含層遺物出土状況(西から)          |                     |
| 図版8  | 3地区 | 全景(北から)          | 図版19 | 1・2地区 | 出土遺物                    |                     |
|      | 3地区 | 北壁東側土層(南から)      | 図版20 | 3・4地区 | 出土遺物                    |                     |
|      | 3地区 | 北壁西側土層(南から)      | 図版21 | 5地区   | 出土遺物(1)                 |                     |
| 図版9  | 3地区 | 北壁中央土層(南西から)     | 図版22 | 5地区   | 出土遺物(2)                 |                     |
|      | 3地区 | 西壁南側土層(南東から)     | 図版23 | 5地区   | 出土遺物(3)                 |                     |
|      | 3地区 | 西壁土層(北から)        | 図版24 | 5地区   | 出土遺物(4)                 |                     |
|      | 3地区 | SP1土器出土状況(北から)   | 図版25 | 5地区   | 出土遺物(5)                 |                     |
| 図版10 | 4地区 | 全景(北から)          | 図版26 | 5地区   | 出土遺物(6)                 |                     |
|      | 4地区 | 西壁土層(南から)        | 図版27 | 6地区   | 出土遺物(1)                 |                     |
|      | 4地区 | 北壁土層(南から)        | 図版28 | 6地区   | 出土遺物(2)                 |                     |
| 図版11 | 4地区 | SK1土層(南西から)      | 図版29 | 6地区   | 出土遺物(3)                 |                     |
|      | 4地区 | SK4土層(南西から)      | 図版30 | 6地区   | 出土遺物(4)                 |                     |
|      | 4地区 | SD1・SD2南側土層(北から) |      |       |                         |                     |
|      | 4地区 | SD1中央土層(南から)     |      |       |                         |                     |
|      | 4地区 | SK3・SP4土層(西から)   |      |       |                         |                     |

# I 調査の経緯と概要

## 1 調査に至る経緯

美祢市東厚保町川東地内での農地整備事業（経営体育成型 川東西地区）の実施に先立ち、山口県美祢農林事務所から山口県教育委員会社会教育・文化財課に対して事業予定地内における埋蔵文化財の有無についての照会がなされた。これを受けて山口県教育委員会社会教育・文化財課は、平成21年1月11日から27日にかけて埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、柱穴・土坑・溝等の遺構が検出されるとともに、中世の遺物が出土しており、埋蔵文化財が存在することを確認した。山口県教育委員会社会教育・文化財課は、これを江の河原遺跡と命名し、周知の埋蔵文化財包蔵地に認定した。

この試掘調査結果と工事計画を照合したところ、工事によって埋蔵文化財が消失する部分があることが確認され、保護措置（記録保存のための発掘調査）が必要であることが判断された。これを受けて山口県美祢農林事務所と山口県教育委員会社会教育・文化財課の協議を経たうえで、平成25年度から平成26年度にかけて、公益財団法人山口県ひとつづくり財団山口県埋蔵文化財センターが両機関より発掘調査の委託を受けるに至った。調査面積は1地区2454㎡、2地区696㎡、3地区1359㎡、4地区383㎡、5地区567㎡、6地区221㎡、計5,680㎡である。

## 2 調査経過の概要

現地調査を始めるにあたっては、山口県美祢農林事務所及び美祢市教育委員会との打ち合わせや調査区の現状確認・環境整備等を行い、近隣の小・中学校、警察署、消防署、自治会等に安全確保のための理解と協力を要請した。

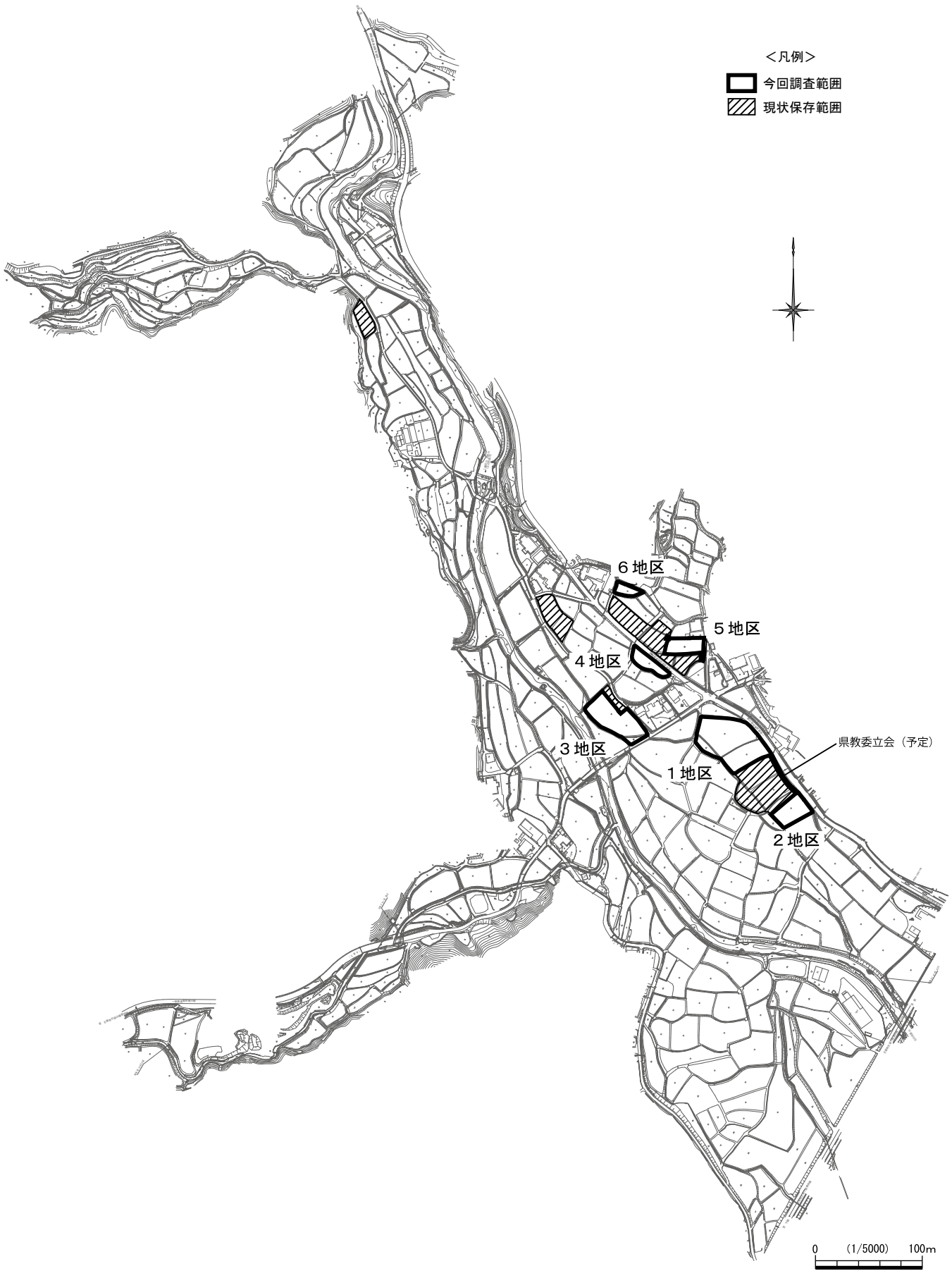
平成25年度の現地調査は、平成25年10月17日に仮設調査事務所を設置するとともに、重機によって1地区・2地区の表土除去を開始した。10月21日には発掘調査器材の搬入を行って、11月5日から人力による遺構検出を開始した。また、11月12・13日には、測量の基準となる国土座標杭を設置した。

遺構等の掘り込みを順次進めるとともに、調査員が埋土の堆積状況や遺物の出土状況等を写真や図面で記録化した。平成26年2月1日にはラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い、2月5日には実機ヘリコプターによる空中写真測量を実施した。また、2月3日までは調査区壁面の土層断面を撮影・作図しており、2月10日には1地区・2地区の現地調査を終了し、山口県美祢農林事務所による完了確認を経て、現地の引き渡しを行った。

3地区から6地区にかけては、平成26年1月28日から重機による表土除去を開始し、2月10日から人力による遺構検出を実施、2月20日には国土座標杭を設置した。2月24日か



重機による表土除去作業



第1図 調査区位置図

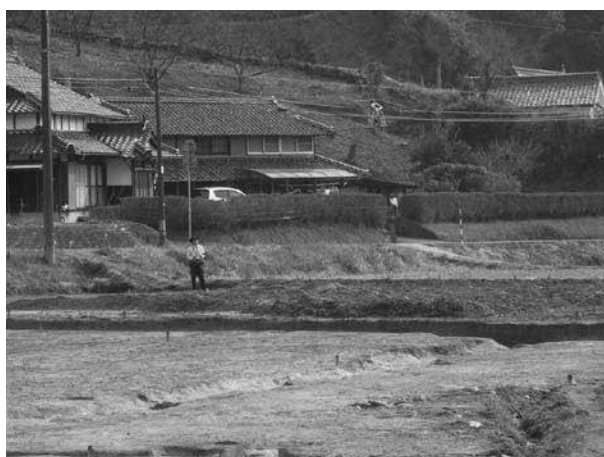
ら遺構の掘り込みを進めるとともに、調査員が埋土の堆積状況や遺物の出土状況等を写真や図面で記録化した。3月18日にはラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施し、3月19日までは調査員による調査区壁面の土層断面の撮影・作図を終えた。なお、出土遺物は、現地調査中に随時山口県埋蔵文化財センターに持ち帰り、洗浄・接合等の整理作業を実施し、3月31日に平成25年度の調査を終了した。

平成26年度の現地調査は、調査計画および準備を経たうえで、4月8日に遺構配置図およびコンターラインの図化作業から開始した。4月14日に仮設トイレを設置したうえで、4月15日から人力による遺構の掘り込みおよび遺構の図化作業を行った。4月26日には現地説明会を実施し、地元の方をはじめとする約30人の見学があった。5月8日までに発掘器材等を撤収し、5月9日に現地調査を終了、山口県美祢農林事務所による完了確認を経て、現地の引き渡しを行った。

現地調査終了後は、かねてより進めていた記録類の整理を本格的に着手するとともに、出土遺物の実測図作成および写真撮影による記録化を行った。また、業者委託により年代測定や金属学的分析などの理化学的分析を行い、遺跡の総合的理解に対する助けとした。そして、これらの記録資料をもとに挿図および写真図版を作成しながら、原稿を執筆し、本報告書を刊行した。



作業風景



空中写真撮影



現地説明会

## Ⅱ 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

美祢市域の地形・地質を大別すると、以下のようになる。

I：石灰岩台地。秋吉海山と呼ばれる海底火山に、サンゴ礁などの海洋生物の遺骸からなる石灰岩が堆積したもの。古生代末（約2億5千万年前）の形成と推定される。

II：山地・丘陵地。活発な火山活動によって形成された火成岩類で構成され、中国山地の基盤をなす。美祢市域では主に白亜紀後期（約9千万年前）に噴出された花崗岩類・火山岩類で構成されている。また、この頃の火山噴出による熱水活動によって、石灰岩と花崗斑岩の接触部に銅鉱床が生成されている。

III：砂礫台地（洪積台地）。美祢市域では丘陵に付随して小規模な分布をなす。更新世（約200万年～1万年前）に形成されたものであろう。

IV：自然堤防・扇状地・谷底平野・旧河道。断層などによって派生した地質の弱い部分が浸食され河川となり、下刻作用および洪水・氾濫堆積などによって形成される一連の地形。美祢市域では谷底平野が大半を占め、自然堤防・扇状地の分布は限定的である。

V：人工改変地であり、旧地形をとどめていない。現代。

以上は、概ねIからVの順に形成され、現在に至っている。

美祢市域の集落遺跡は、砂礫台地（洪積台地）での立地を基本とし、丘陵上や自然堤防上での立地がこれに準ずる。一方、扇状地は狭小なため、雨水が伏流水として地下に浸透しきれず、飽和状態に近い状況を呈している。このため、土地条件が不安定であり、集落の立地に不適なようである。

江の河原遺跡の近辺では、平原川（江の河原川）が丘陵を開析して氾濫平野を形成している。また、この平原川（江の河原川）に流れ込むような谷地形が、丘陵および砂礫台地を分断するように形成されている。そして、この谷地形に埋積する扇状地上に江の河原遺跡のほとんどが立地しており、これまでの美祢市域の集落遺跡の立地と異なる点に、大きな特徴が見出せる。

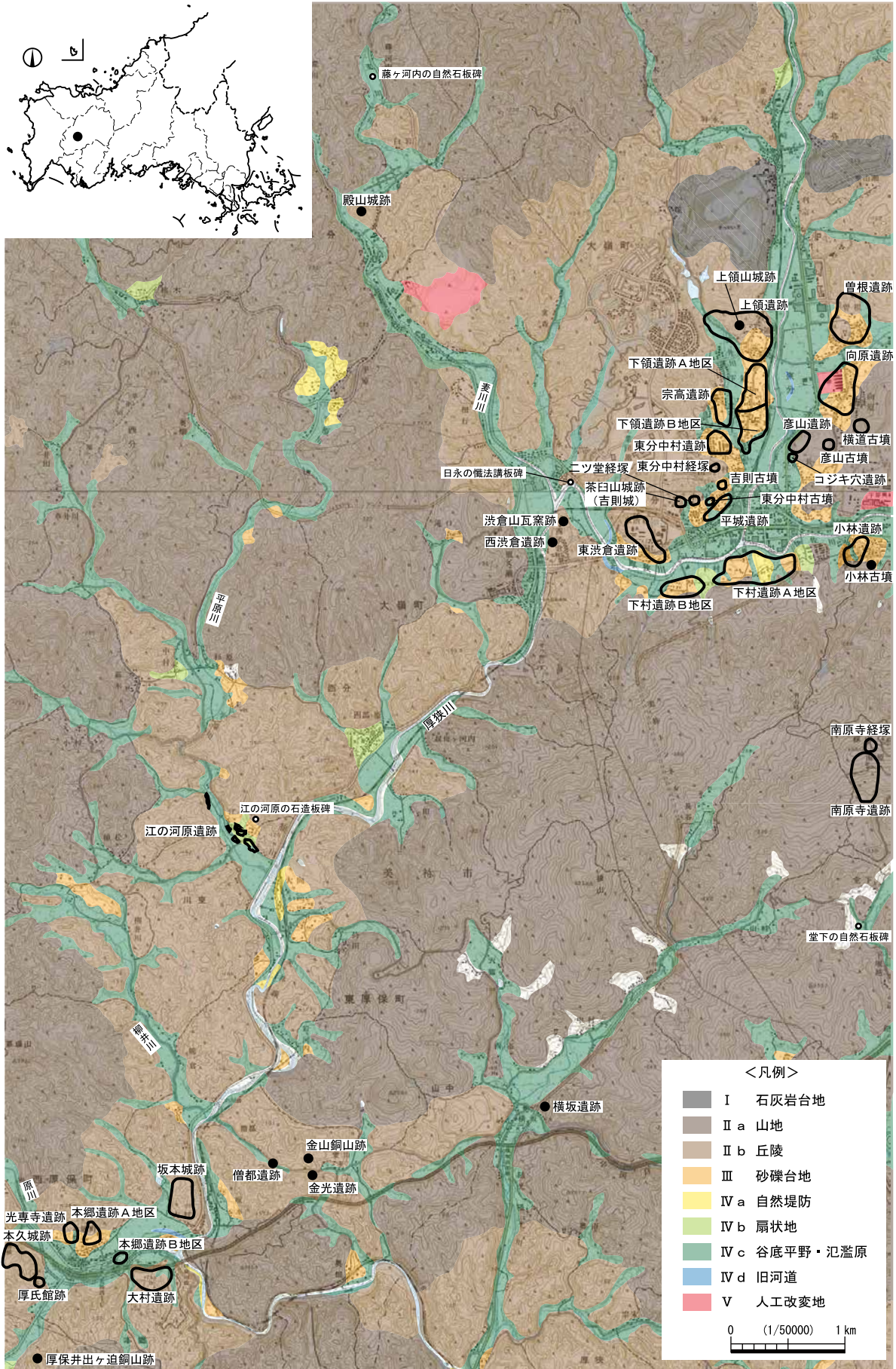
### 2 歴史的環境

江の河原遺跡の周辺では、大嶺盆地や西厚保地域において縄文・弥生時代以降の遺跡が確認されている。一方、江の河原遺跡では古代以前の資料が皆無に等しく、中世に開発された地域といえそうである。以下、中世について概略する。

中世に入ると、山口県内で以前には困難だった土地条件にも開発の手が及ぶようになってきている。このことを端的に示すのが、海浜部における干潟の耕地化と、山間部における谷間の開発である（田中2012）。江の河原遺跡の周辺では、南原寺が麓にある永谷を1335（建武2）年までに新たに開発している。また、正法寺領沓野では、1306（嘉元4）～1334（建武元）年までの記録に「開発田并荒野」「田地荒野」などと記されており（高橋1982）、まだ開発途中段階であることを如実に示している。いずれも山間部の谷間もしくは狭小な谷底平野であり、中世における耕作地拡大のあり方を示す典型例といえる。

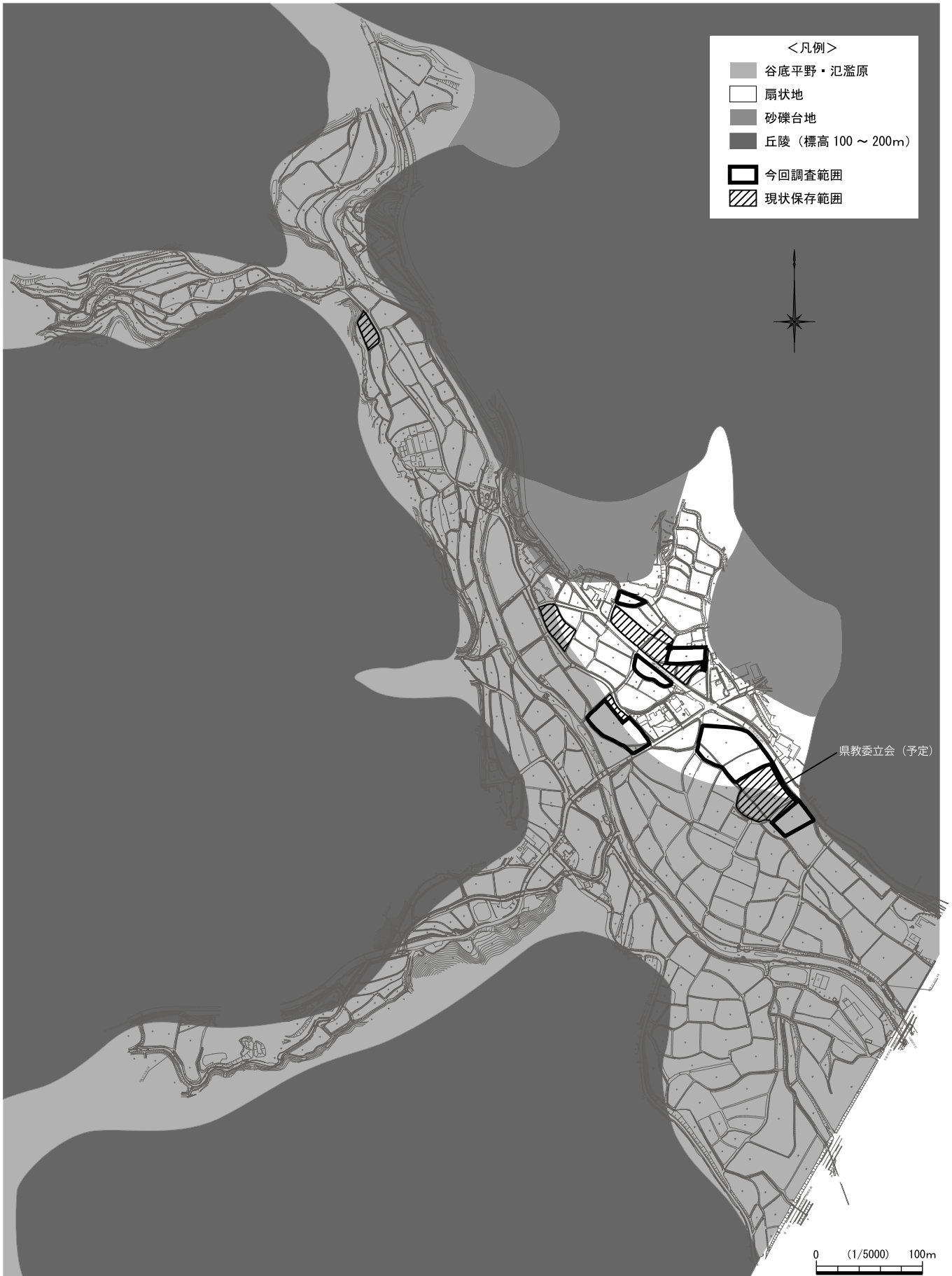
江の河原遺跡も同様の位置づけが可能であり、狭小な谷底平野に展開する耕作地に伴う用水路（13





※国土地理院発行地形図「於福」「伊佐」に、山口県発行「地形分類図」および山口県遺跡地図（地図情報システム）を合成して作成

第2図 江の河原遺跡 周辺遺跡図



第3図 江の河原遺跡の立地

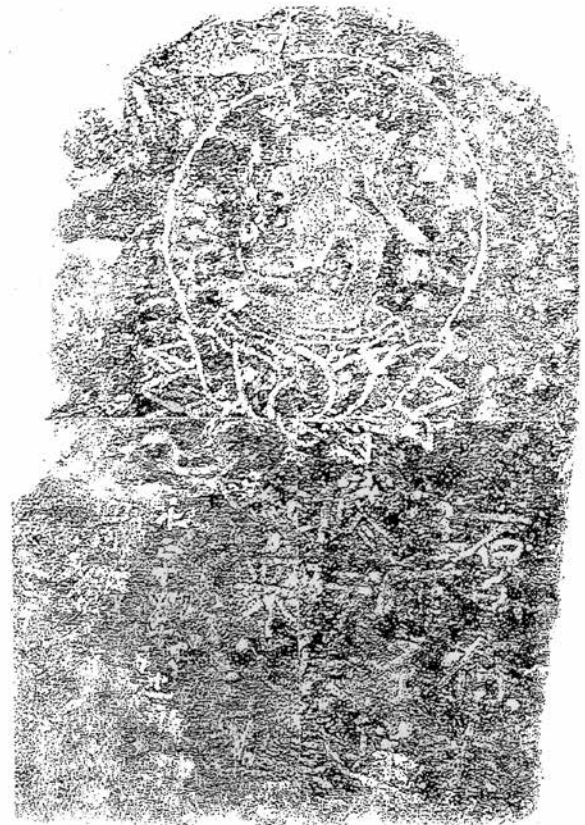


世紀後半～末)が今回の調査で検出された。

一方、中世は、耕作地の支配権を巡ってさまざまな軋轢が表面化している時代でもある。江の河原遺跡周辺においては、厚保の地頭である厚氏が正法寺領を濫妨し、1334(建武元)年に正法寺に訴えられたり、大嶺の地頭由利氏が沓野村の正法寺領を侵略し、1408(応永15)年に正法寺が大内盛見に訴状を提出している記録が残っている。

15世紀後半以降はそうした記事が稀となるが、大内氏による支配が安定したためかもしれない。15世紀後半～16世紀頃に江の河原遺跡のピークが一つあり、その象徴として、江の河原の石造板碑があげられる。美祢市域ではこの頃に板碑建立がよくなされており、それが可能な財力と信仰が存在していたことが示される。

近世に入ると赤間関街道筋に位置するため、一定の役割を担っていたものと推定されるが、調査では遺物の出土が少量認められるものの、詳細を明らかにすることはできなかった。



第4図 江の河原の石造板碑  
(美祢市教育委員会提供)

#### 参考文献

- 小野実・中野達之 1996『本郷遺跡』山口県教育委員会  
河村芳久 2000『東分中村経塚』美祢市教育委員会  
國森進 2012「第二編第一章第三節 耕地の拡大」『山口県史 通史編 中世』山口県  
高橋正清 1982「第五編 中世」『美祢市史』美祢市  
田中倫子 2012「第五編第一章第一節 諸産業の発達」『山口県史 通史編 中世』山口県  
辻誠一郎 2008「第一編第二章第二節 山口県の基盤形成」『山口県史 通史編 原始・古代』山口県  
内藤源太郎 1982「第一編 一 地質概略」『美祢市史』美祢市  
内藤源太郎 1982「第二編 一 地形」『美祢市史』美祢市  
美祢市長登銅山文化交流館 2000『長登銅山文化交流館展示図録』  
山口県 2012「第二編第四章第三節 美祢郡」『山口県史 通史編 中世』山口県

第1表 江の河原遺跡周辺に関わる史実等抜粋

	年代	大嶺盆地	厚保地域	南原寺・板碑・経塚など
12世紀後半	1076 (承保3) 以前	大峯庄が石清水八幡宮領となる		
	1108 (天仁元)	大峯庄の文献初見		
				南原寺経塚・東分中村経塚
	1185 (文治元)	石清水八幡宮領として大美祢庄あり		
				四条天皇が南原寺に里を多く寄進
	13世紀後半	1256 (建長6)	地頭が大峯庄に課役することに対し、幕府がこれを停止する	
1274 (文永11)				
14世紀前半	1281 (弘安4)			
		この頃、由利氏が地頭職に就き、来住したものと考えられる		
	1306 (徳治元)		厚保の地頭厚氏が、沓野にある正法寺領を濫妨する (厚氏の文献初見)	
	1333 (元弘3)	大嶺合戦に、大嶺の地頭由利氏が参戦	大嶺合戦に、厚保の地頭厚氏が参戦	
	1334 (建武元)		厚氏が正法寺領を濫妨し、正法寺に訴えられる	
	1335 (建武2)			南原寺が開発した田地を、寄進という形で承認される
			南原寺の供料田に大嶺下領あり	
			堂下の自然石板碑建立	
15世紀前半	1375 (永和元)	石清水八幡宮社家の造営期間中、大峯庄と於福村に軍役を課することを固く停止するよう、大内弘世に沙汰する		
		この頃、厚東氏滅亡。その後、由利氏は大内氏に仕えるようになる。		
	1402 (応永9)			南原寺住僧真海が、大内義弘の菩提寺である香積寺に洪鐘を寄進
	1408 (応永15)		大嶺の地頭由利氏が、沓野村の正法寺領を侵略し、正法寺が大内盛見に訴状を提出する。	
	1425 (応永32)		神功皇后社建立	
	1454 (享徳3)			南原寺炎上し、証書類消失
	1479 (文明11)	この頃には、大内氏の重臣である杉氏が大嶺を支配	厚氏が大内氏の郡代か郡奉行として厚保地方を管する	
	1499 (明応8)	大峯庄の八幡宮が、上領八幡宮と下領八幡宮に分かれる		
	1510 (永正7)			二ツ堂経塚
	1516 (永正13)			日永の懺法講板碑建立
15世紀後半	1517 (永正14)			江の河原の石造板碑建立。願主は徳椿。
	1518 (永正15) ~			藤ヶ河内の自然石板碑5基建立。徳椿が本願。
	1534 (天文3) 以前	大内氏の重臣である内藤氏が大嶺下領を拝領。大嶺庄八幡宮(下領八幡宮)に毎年御祈念米を奉納。		
	1557 (弘治3)			
	1560 (永禄3) 以前	大峯庄と石清水八幡宮との関係がなくなる		
	1596 (文禄5)	このころ、大嶺に市が開く		
17世紀前半	1625 (寛永2)			南原寺の浮米10石に定められ、藩政時代の寺領高となる

※高橋政清 1982・河本芳久 2000・山口県 2012 を元に作成

### Ⅲ 調査の成果

#### 1 地区

##### (1) 遺構

1 地区は、標高約 67.5m に位置し、北西は県道 233 号線（推定赤間関街道）、北東は県道 235 号線が走行する。平原川（江の河原川）に向かい標高が低くなる。

1 地区の基本土層は、表土以下、旧耕作土、盤土、地山で構成されている。また、水捌けの悪い地質のため北西側の一部でグライ化している。遺構は、柱穴 250 個（杭穴を含む）、溝 2 条を検出した。以下、主な遺構について述べる。

##### 溝

**SD 1（第 7 図）** 調査区南側に位置する。北西から南東に流下し、南東は調査区外に延びる。SD 2 と重複しており、新旧関係は SD1 が新しい。規模は長さ 37m 以上、幅 0.3～1.9m、検出面からの深さ 25～40cm である。埋土は灰白色～黄褐色で砂礫混じりを基調とする。遺物は土師器、瓦質土器、磁器が出土している。遺構の時期は中世前半である。

**SD 2（第 7 図）** 北西から南東に流下し、南は調査区外へ延びる。規模は長さ 10.6m 以上、幅 0.4～1.5m、検出面からの深さ 9～19cm である。埋土は灰褐色～灰白色で砂質粘土を基調とする。形状などから自然流路と考えられる。遺物の出土はなく、遺構の時期も不明である。

##### (2) 遺物

1 地区から出土した遺物は少量で、かつ、ローリングによる劣化が著しいものが多い。1 地区自体で使用されたのではなく、3 地区や 5 地区などの居住域に本来帰属していたことを想定している。

時期は中世を主体とし、近世が少量含まれており、江の河原遺跡における居住域・耕作地の存続時期を大まかに示している。このほか、縄文時代かと思われる安山岩剥片が 1 点出土している。

##### 柱穴出土遺物（第 8 図）

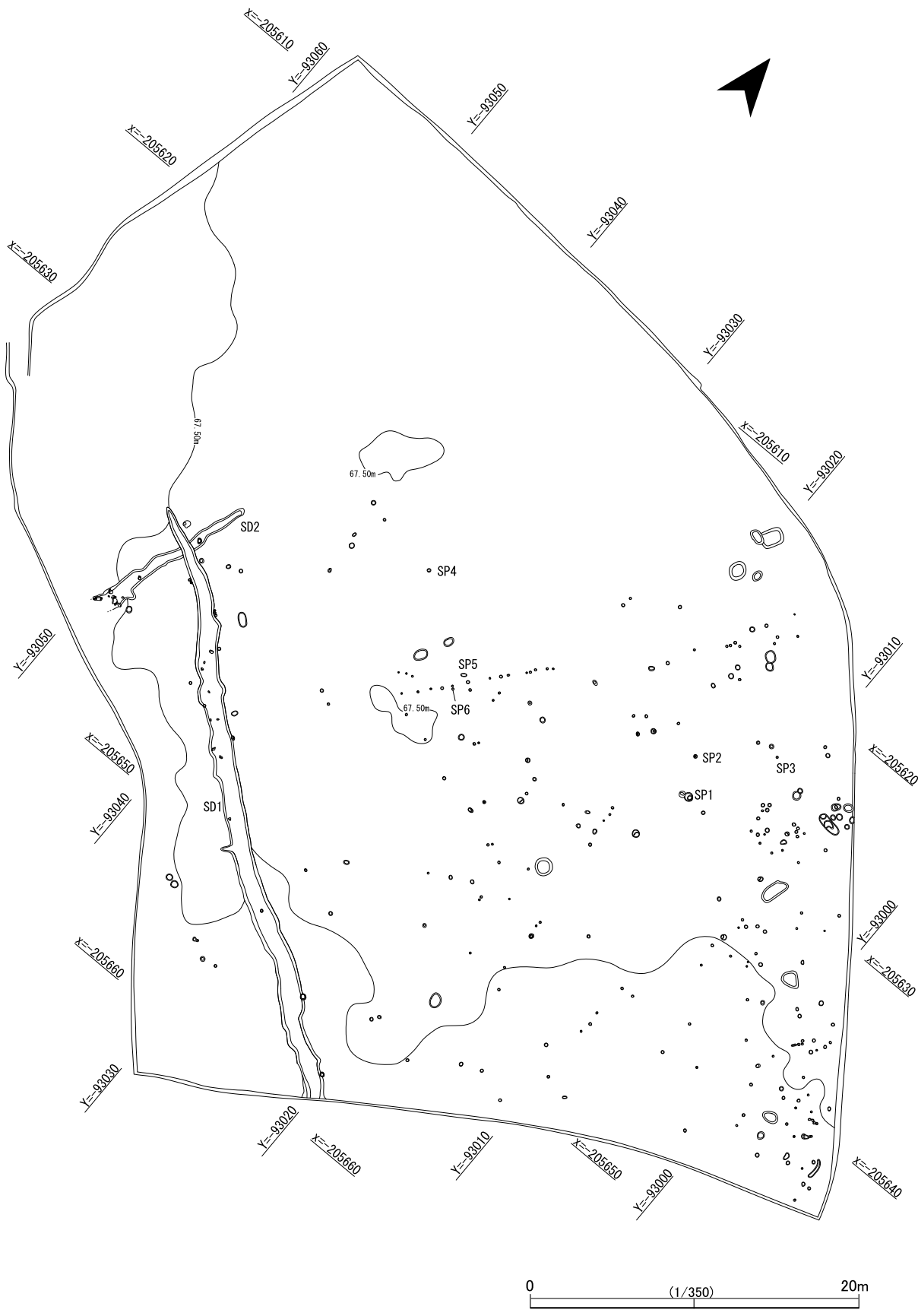
1 は SP1 より出土した瓦質土器播鉢である。内面にハケ目が明瞭に残ることから、15 世紀の所産と考えられ、SP1 の埋没時期の上限を示す。

##### 溝出土遺物（第 8 図）

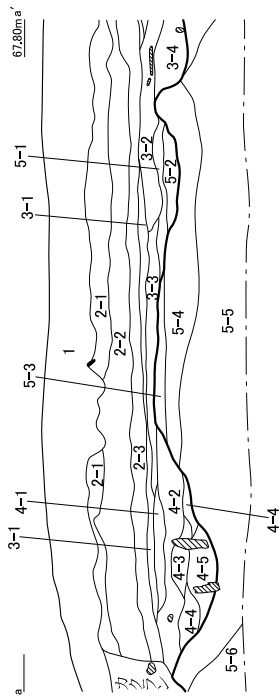
2～9 は SD1 より出土。土師器杯は 2 が直線的な体部であり、14 世紀以降と考えられるが、3 は比較的外に開く形状をなしており、13 世紀的な特徴を残す。土師器皿は 4・5 ともに口径約 7 cm、器高 1 cm 以下で、かつ、器壁が厚く、14 世紀前半～中頃の所産である。6 は龍泉窯青磁椀で大宰府分類Ⅱ（13 世紀前半～中頃）、7 は白磁小皿で大宰府分類ⅦもしくはⅧ類と考えられる。8・9 は瓦質土器鍋で西長門型 a 類であり、口縁部の形状から 14 世紀の所産と考えられる。このほか、炉壁の破片が出土しており（第 43 図）、5 地区からの流れ込みを想定できる。

これらの出土遺物は、本来居住域に帰属するものと考えられ、その存続時期をおおまかに示すものと考えられる。また、出土遺物から、SD1 の埋没時期の上限は 14 世紀と判断できる。

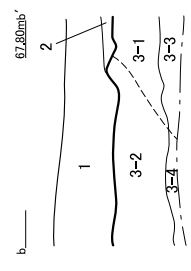
また、イシガイ科の貝類が 5 点出土しており（第 47 図）、SD1 が水路として機能していたとする推定



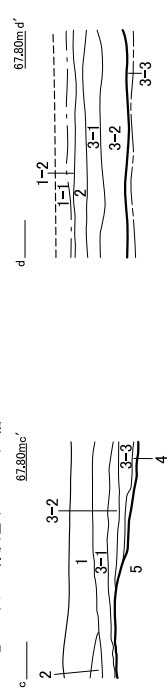
第5図 1地区 遺構配置図



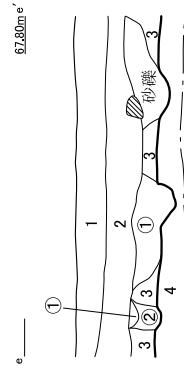
- 壁面土層①
- 1 表土
  - 2-1 旧耕作土 砂礫混じり 砂質土 しまり良い
  - 2-2 旧耕作土 灰色(5Y4/1) 砂礫混じり 砂質土 しまり良い Fe 斑点状に含む
  - 2-3 旧耕作土 灰色(5Y4/1) 砂礫混じり 砂質土 しまり良い Fe 斑点状にまばらに含む
  - 3-1 盤土? 緑灰色(10GY6/1) 砂質土 やや粘性 ややグライ化
  - 3-2 盤土? 灰色(7.5Y5/1) 細礫まじり砂質土 Fe 棒状に含む
  - 3-3 盤土? 灰色(7.5Y5/1) 細礫まじり砂質土 Fe 棒状に多く含む
  - 3-4 盤土? 灰色(5Y5/1) 礫混じり砂質土 やや粘性
  - 4-1 溝埋土 灰褐色(2.5Y4/1) 粘質土
  - 4-2 溝埋土 オリーブ灰色(2.5GY6/1) 細礫
  - 4-3 溝埋土 灰色(7.5Y5/1) 細砂混じり土 やや粘性
  - 4-4 溝埋土 灰色(7.5Y5/1) 砂礫層 しまり悪い
  - 4-5 溝埋土 灰色(7.5Y5/1)
  - 5-1 地山? 明緑灰色(10GY2/1) シルト 灰褐色土少し混じる グライ化
  - 5-2 地山? 灰色(5Y6/1) シルト やや粘性 部分にグライ化する
  - 5-3 地山 明緑灰色(10GY2/1) シルト しまりや良い
  - 5-4 地山 灰色(5Y5/1) 砂礫層
  - 5-5 地山 緑灰色(10GY4/1) 礫混じり シルト
  - 5-6 地山 緑灰色(10GY4/1) 粘土



- 壁面土層②
- 1 表土
  - 2 密土
  - 3-1 地山 灰白色(5Y6/1 ~ 7/1) 礫混じりシルト わずかにグライ化
  - 3-2 地山 緑灰色(10GY4/1) 礫混じりシルト グライ化
  - 3-3 地山 明黄褐色(10YR7/6 ~ 2.5Y7/6) シルト
  - 3-4 地山 緑灰色(10GY4/1) シルト グライ化



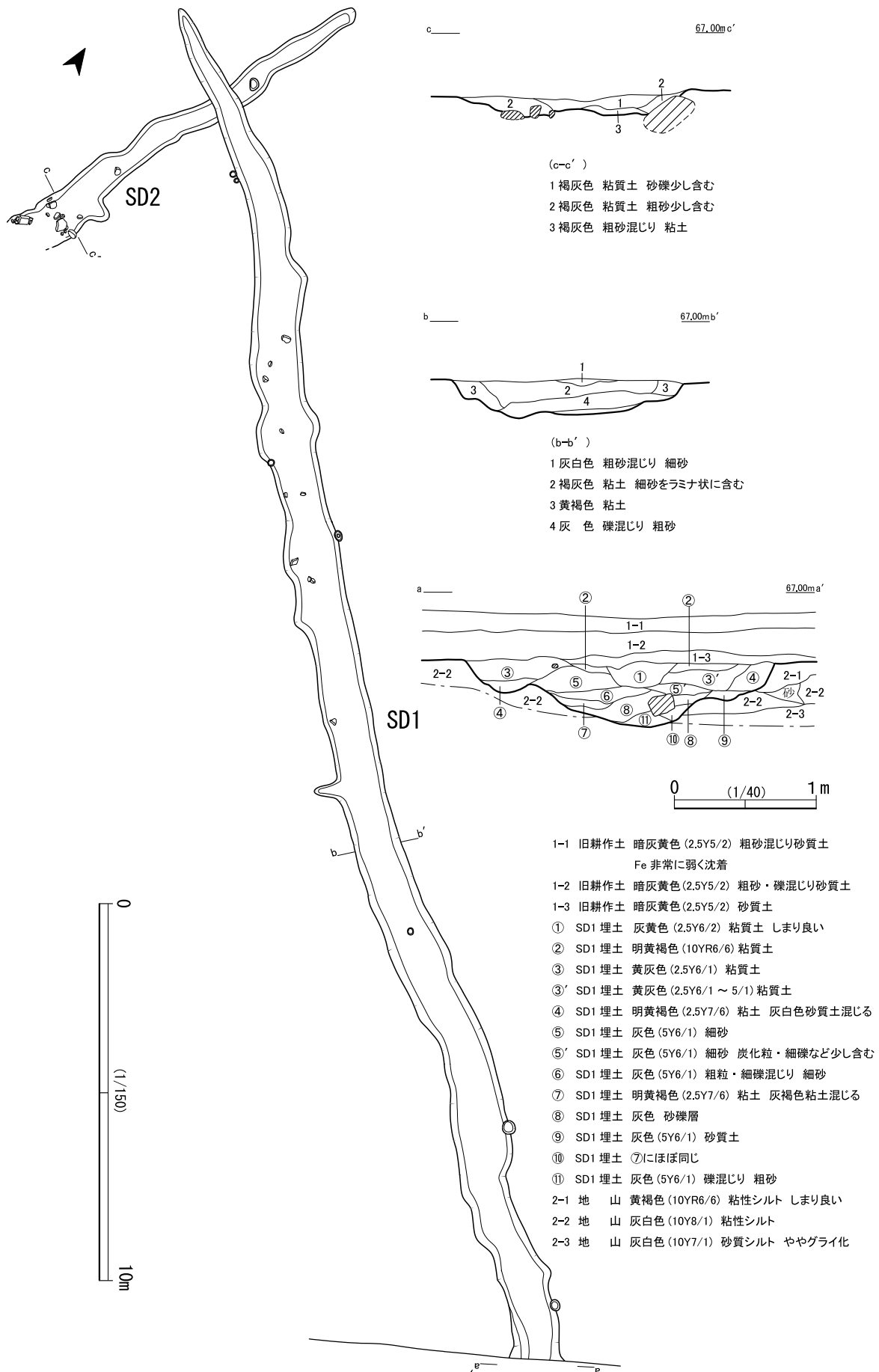
- 壁面土層③
- 1 表土
  - 2 現耕作土 1と3-1の混成
  - 3-1 旧耕作土 黒色(N2/0) 砂質土 礫多く含む
  - 3-2 旧耕作土 灰色(5Y5/1) 砂質土 黄褐色粒 (Fe?) 多く含む ※土層断面④3-1と同一層
  - 3-3 旧耕作土 灰オリーブ色(5Y5/2) 砂質土 細礫含む
  - 4 盤土
  - 5 地山 黄褐色(2.5Y6/6) 砂質土 しまり良い
- 壁面土層④
- 1-1 表土
  - 1-2 表土
  - 2 盤土
  - 3-1 旧耕作土 灰色(5Y5/1) 砂質土 黄褐色粒 (Fe?) 多く含む
  - 3-2 旧耕作土 黒褐色(10YR3/1 ~ 4/1) 砂礫混じり土 ※土層断面⑤2に同じ
  - 3-3 地山 にぶい黄色褐色(10YR5/ 3) 粘土



- 壁面土層⑤
- 1 表土
  - 2 黒褐色(10YR3/1 ~ 4/1) 砂礫混じり土
  - 3 漸移層 にぶい黄褐色(2.5YR5/3 ~ 5/2) 粘性シルト
  - 4 地山 にぶい黄褐色(2.5YR5/3) 粘土
  - ① 遺構埋土 灰黄褐色(10YR5/2) 砂質土 小礫少し含む
  - ② 遺構埋土 褐色(2.5YR4/1) 粘質土

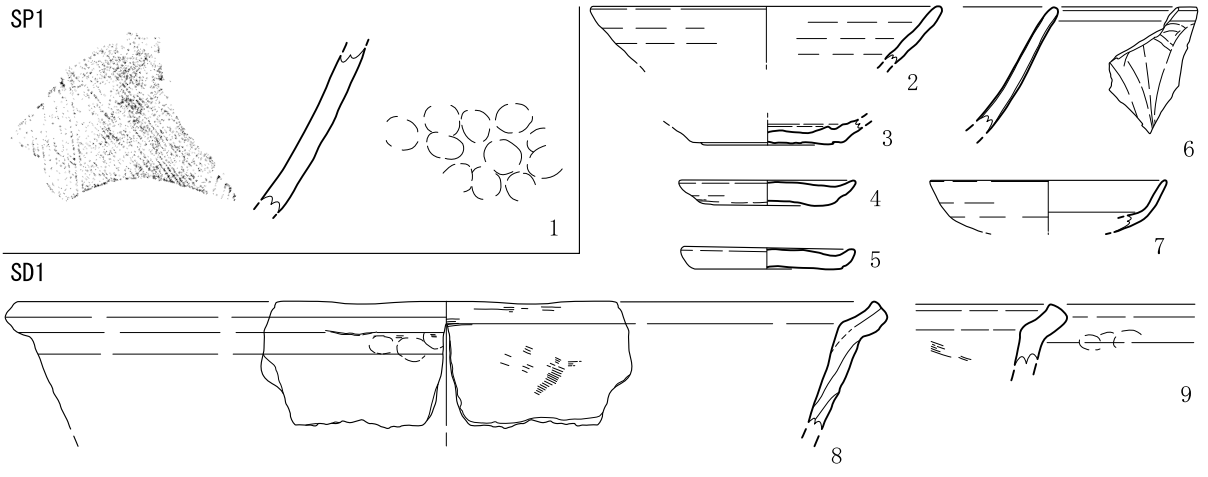


第6図 1地区 壁面土層断面図



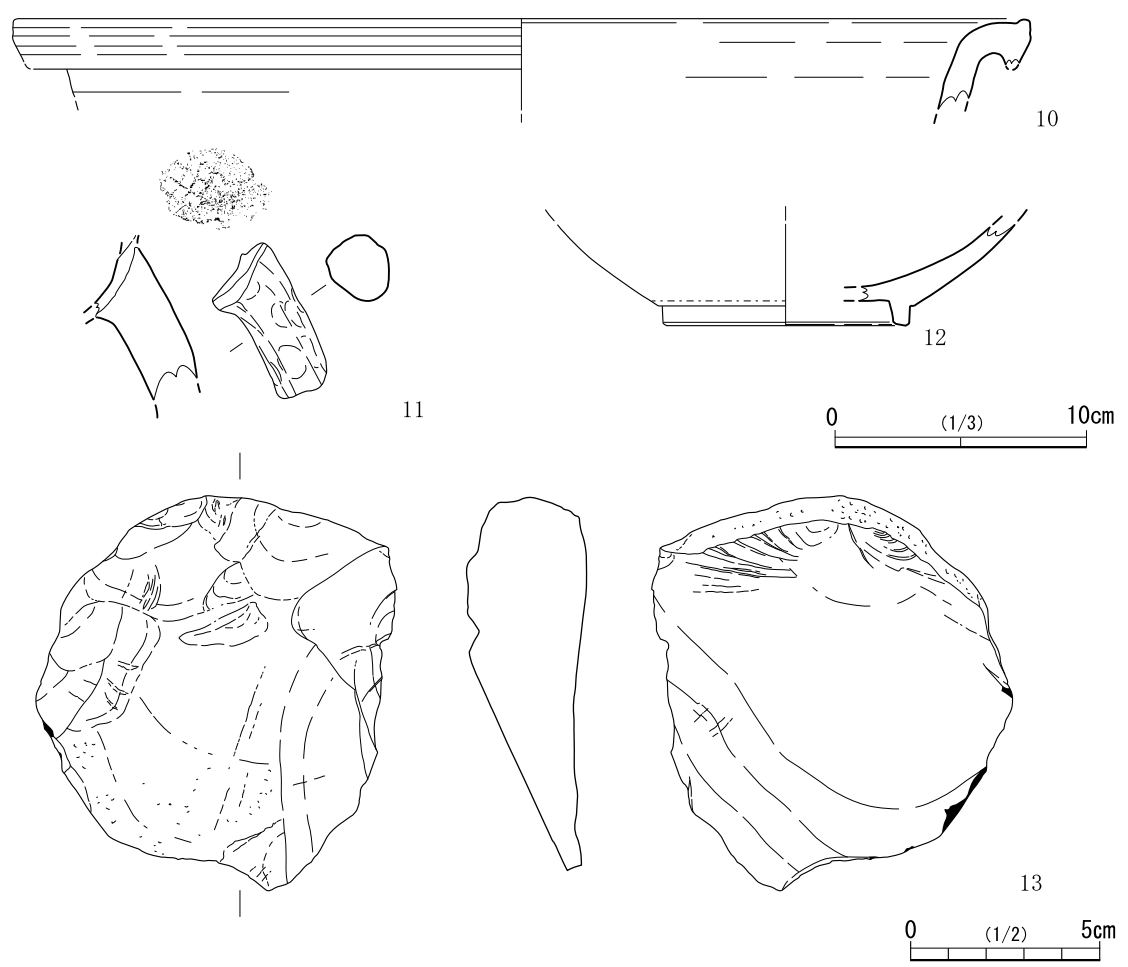
第7図 1地区 溝実測図





遺構外

11・12：遺構検出、10・13：表面採集



第8図 1地区 出土遺物実測図

と矛盾しない。

遺構外出土遺物（第8図）

10は常滑焼甕であり、口縁部の形状から13世紀後半の所産と考えられる。11は瓦質土器足鍋である。体部との接合面で剥離しており、剥離面に格子タタキ痕が確認される。12は深川産陶器鉢である。13は比較的大形の安山岩剥片である。このほか、炉壁の破片が出土している（第43図）。

## 2 2地区

### (1) 遺構

2地区は1地区の南約50m、標高約66mに位置する。

2地区の基本土層は1地区と同じで、黄褐色～赤褐色の地山である。ただし、北西隅付近は黄褐色の礫混じり粘土、南東隅付近は灰褐色の強粘質土の地山となり均質でない。

遺構は柱穴197個（杭穴を含む）、土坑19基、溝3条を検出した。

#### 土坑

SK1（第11図） 調査区西側に位置する。平面形は円形である。規模は径34cm、検出面からの深さ12cmである。遺物は瓦質土器鍋の口縁部片1点出土したのみである。遺構の時期、性格は不明である。

SK13（第11図） 調査区南に位置する。平面形は楕円形である。規模は長径1.1m、短径52cm、検出面からの深さは浅い部分で4cm、深い部分で28cmになる。遺物は土師器小片が出土している。遺構の時期、性格は不明である。

SK19（図版7） 調査区北東壁に位置する。平面形は円形、もしくは楕円形と思われるが、東側が調査区外に延びるため不明である。残存規模は長径約70cm、短径30cm以上、検出面からの深さは約40cmになる。遺物は土師器椀の底部片が出土している。遺構の時期は中世以降と考えられる。

### (2) 遺物

2地区から出土した遺物は極めて少量で、かつ、ローリングによる劣化が著しいものが多い。これらは3地区や5地区などの居住域に本来帰属するものと想定している。時期は中世を主体とし、江の河原遺跡における居住域・耕作地の存続時期を大まかに示している。

#### 土坑出土遺物（第12図）

14はSK11、15はSK19より出土した土師器杯である。両者とも13世紀後半～14世紀の所産と考えられ、土坑の埋没時期の上限を示す。

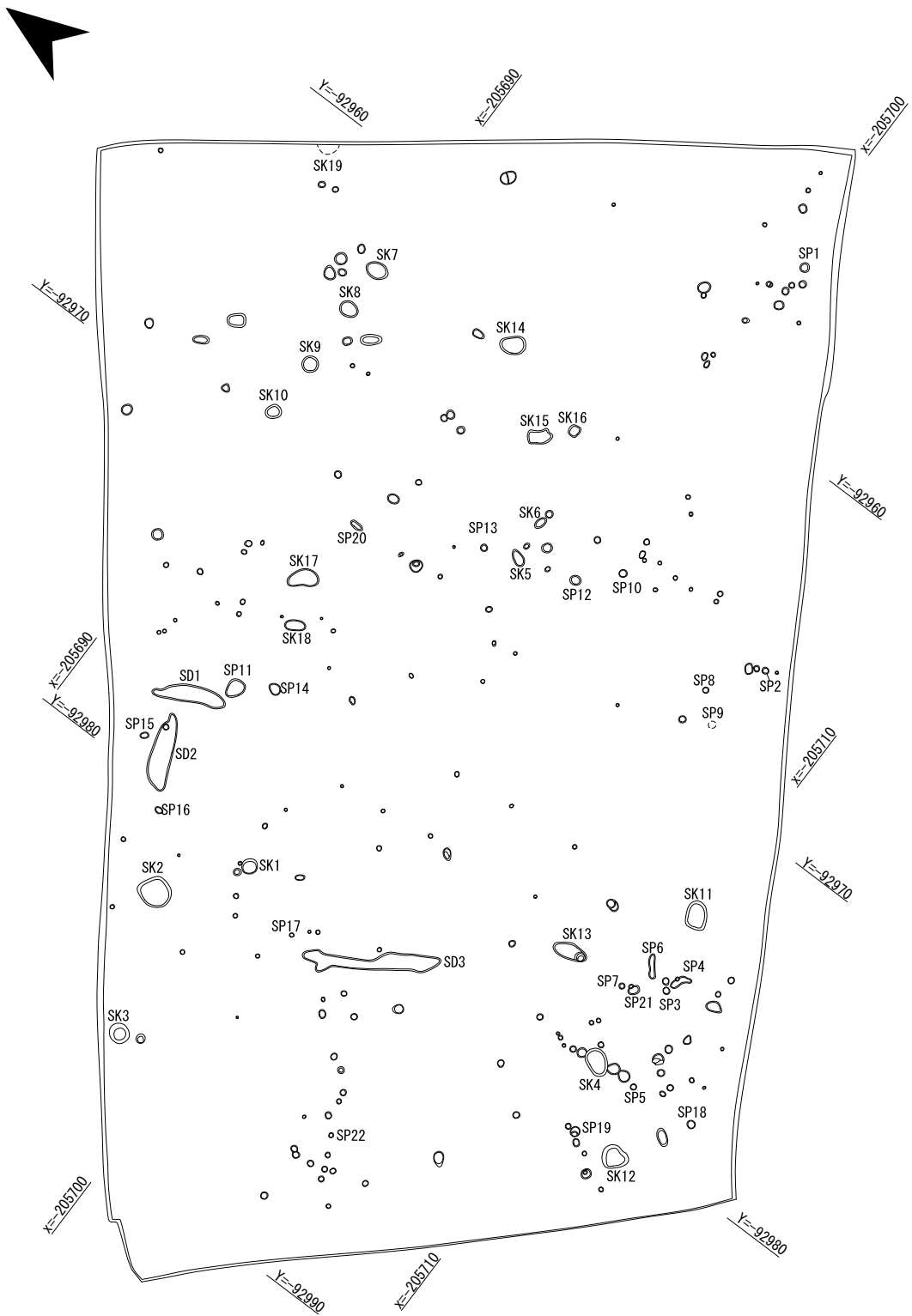
#### 柱穴出土遺物（第12図）

16はSP21より出土した土師器皿である。復元された法量から14世紀以降の所産と考えられ、柱穴の埋没時期の上限を示す。

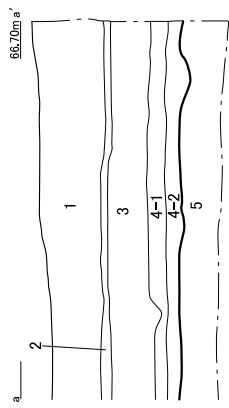
#### 遺構外出土遺物（第12図）

17～19は青磁椀である。17は内面に圈線を2条巡らし、外面には蓮弁文らしき表現がかすかにみられる。18は13世紀代、19は角高台であり12世紀末～13世紀初頭のもものと推定される。20は瓦質土器足鍋であり、口縁部の形状から15世紀後半（岩崎編年Ⅲ新形式）の所産である。21は瓦質土器挿鉢であり、口縁部の形状および、内面ハケ目の残存状況から、15世紀後半以降の所産である。

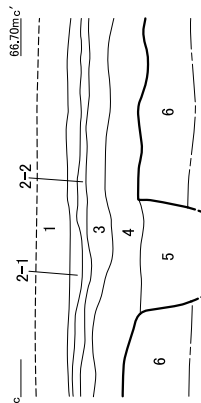
これらは本来、3地区や5地区近辺の居住域に所属していた可能性が考えられる。



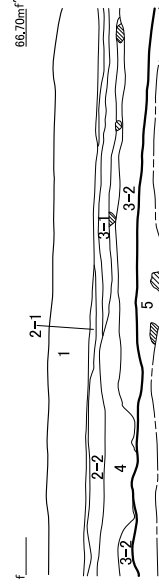
第9図 2地区 遺構配置図



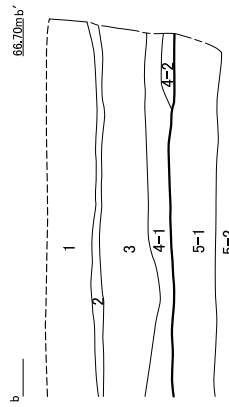
- 壁面土層①
- 1 表土
  - 2 盤土
  - 3 客土
  - 4-1 旧耕作土 灰色(5Y6/1) 粗砂・礫混じり粘土
  - 4-2 旧耕作土 灰色(10YR6/1) 粘土
  - 5 地山 浅黄褐色(10YR8/3) 粘土



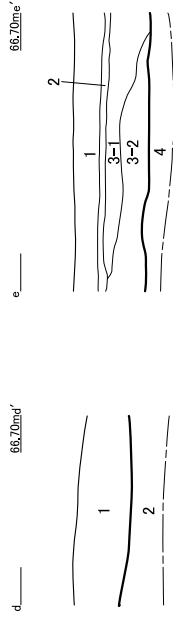
- 壁面土層③
- 1 表土
  - 2-1 盤土
  - 2-2 盤土
  - 3 灰色(5Y6/1) 粗砂・礫混じり砂質土
  - 4 灰色(5Y6/1) 砂礫層
  - 5 SK19 褐灰色(10YR5/1) 粘質土 礫含む
  - 6 地山 黄褐色(10YR8/8) 粘土



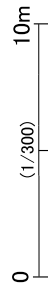
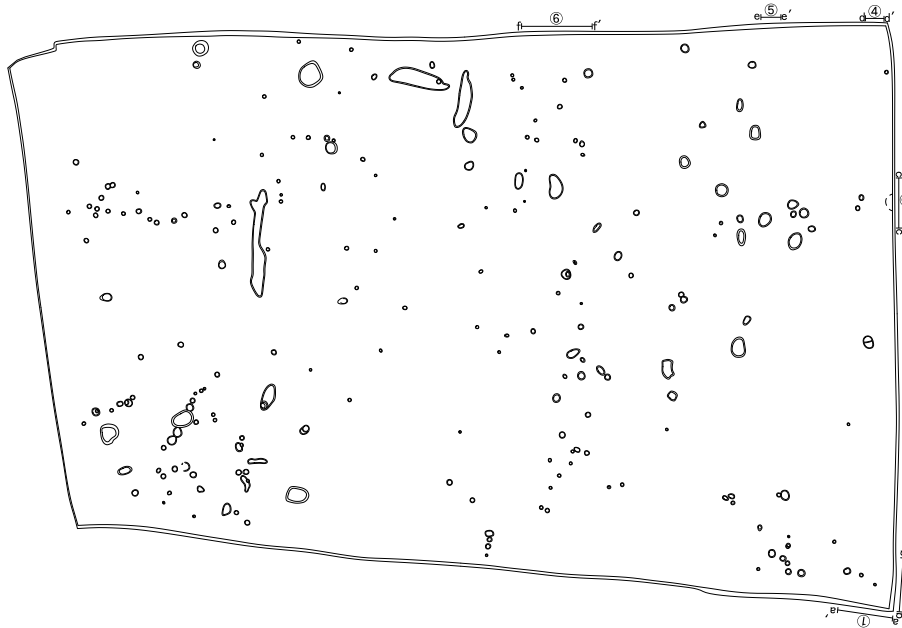
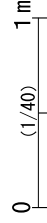
- 壁面土層⑥
- 1 表土
  - 2-1 盤土
  - 2-2 盤土
  - 3-1 褐色(10YR6/1) 砂質土 2-2よりやや淡い
  - 3-2 褐色(10YR6/1) 砂質土
  - 4 砂礫層
  - 5 地山
  - 6 浅黄褐色(2.5Y6/3) 礫混じり粘土



- 壁面土層②
- 1 表土
  - 2 盤土
  - 3 客土
  - 4-1 旧耕作土 灰色(5Y6/1) 粗砂・礫混じり砂質土
  - 4-2 旧耕作土 灰色(10YR6/1) 粘土
  - 5-1 地山 黄灰色(2.5Y6/1) 灰白粘土
  - 5-2 地山 浅黄褐色(10YR8/3) 粘土

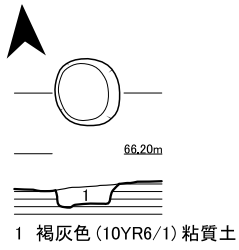


- 壁面土層⑤
- 1 表土
  - 2 盤土
  - 3-1 洪水堆積 浅黄褐色(10YR6/3) 礫混じり粘土
  - 3-2 旧耕作土 褐色(10YR6/1) 砂質土 小礫少し含む
  - 4 地山 浅黄褐色(2.5Y6/3) 礫混じり粘土

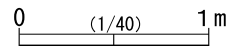
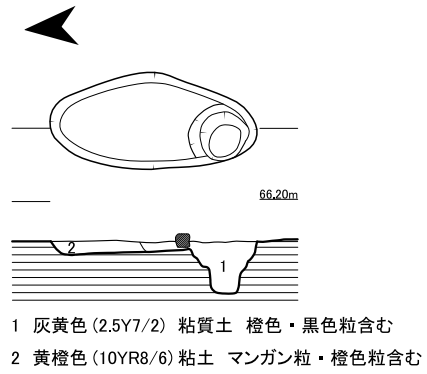


第10図 2地区 壁面土層断面図

SK1

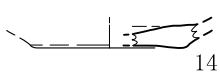


SK13



第 11 図 2 地区 土坑実測図

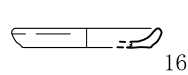
SK11



SK19

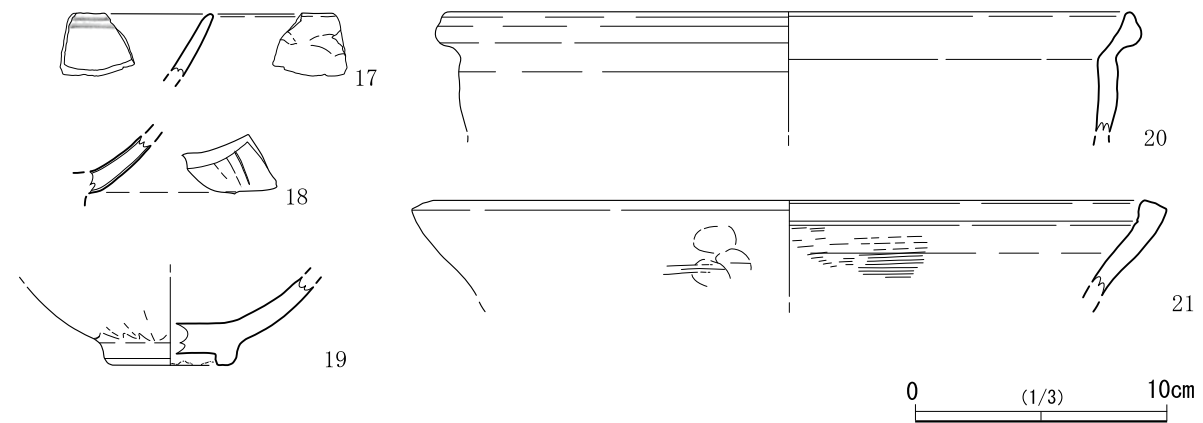


SP21



遺構外

17・18・20・21:遺構検出、19:客土



第 12 図 2 地区 出土遺物実測図

### 3 3地区

#### (1) 遺構

3地区は、1地区から県道233号線を挟んだ北西約50mに位置する。標高は約67.8mである。南は田を挟み平原川（江の河原川）が流れる。

表土以下から客土までは他地区と同様であるが、河川の氾濫堆積と推測される礫層が北東から南西へと扇状に広がり調査区の基盤を形成する。また、調査区東側において、明黄褐色の地山に多量のマンガンを含む層も確認した。

遺構は主に調査区中央付近から東側にかけて多く検出した。遺構は掘立柱建物1棟、柱穴158個、土坑3基、溝1条を検出した。

#### 掘立柱建物

多くの柱穴が検出されたが、復元できたものは1棟のみである。

**SB1（第15図）** 調査区中央付近に位置する。規模は2間×1間で、桁行2.7m、梁行1.6mである。棟方向はN2°Eである。構成柱穴SP12から土師器杯片が出土した。遺構の時期は不明である。

#### 柱穴

**SP1（図版9）** 調査区中央付近に位置する。長径35cm、短径27cm、深さ8cmの柱穴である。SP1に対応する構成柱穴は確認できない。遺物は、柱穴上面から瓦質土器播鉢が出土した。遺構の時期は中世と考えられる。

**SP39** 調査区東に位置する。長径40cm、短径34.5cm、深さ43.5cmの柱穴である。SP39に対応する構成柱穴は確認できない。遺物は、土師器杯・皿が出土した。遺構の時期は14世紀前半～中頃と考えられる。

#### (2) 遺物

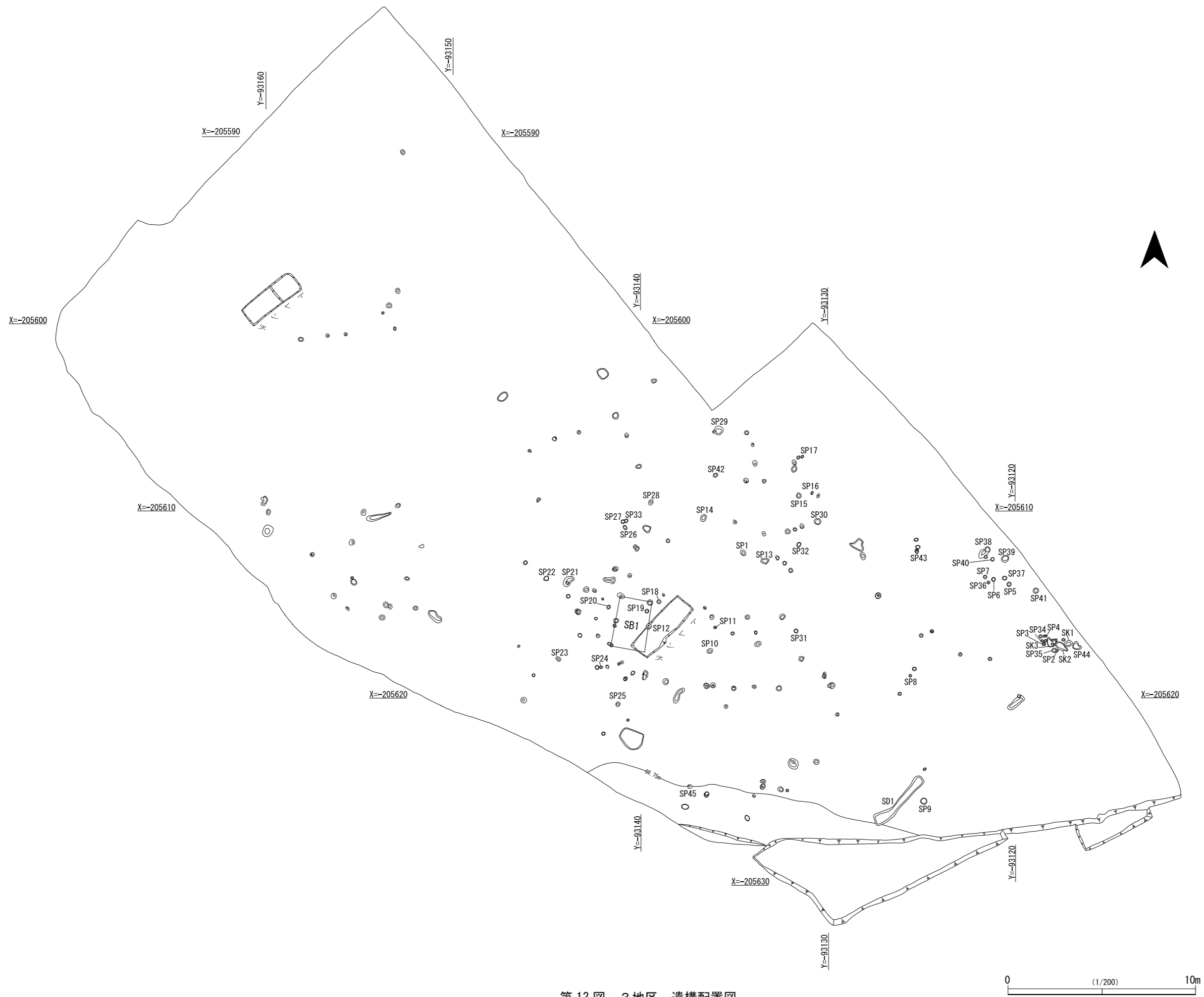
3地区から出土した遺物は少量であるが、柱穴・土坑から土師器杯・皿類を主体に中世の遺物が出土している。これらは3地区および近辺の居住域の存続時期を大まかに示すものと考えられる。

#### 土坑出土遺物（第16図）

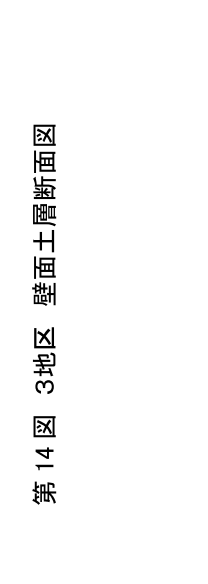
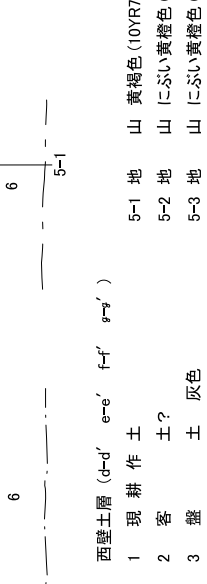
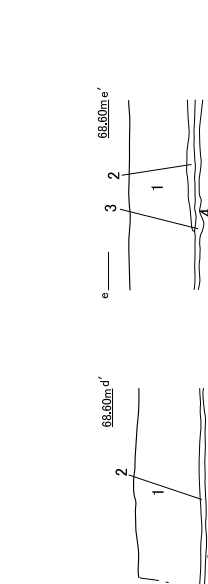
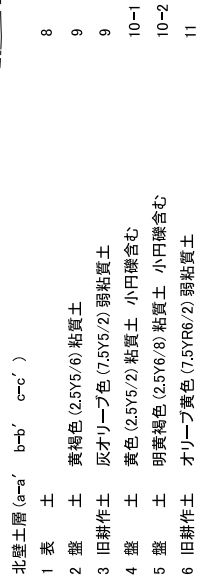
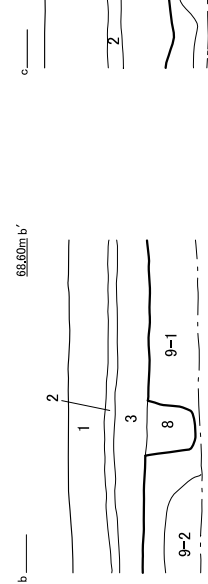
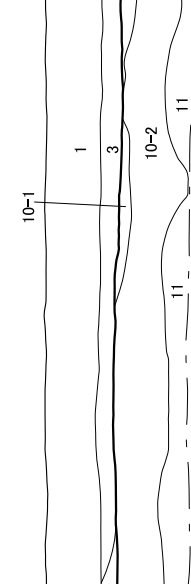
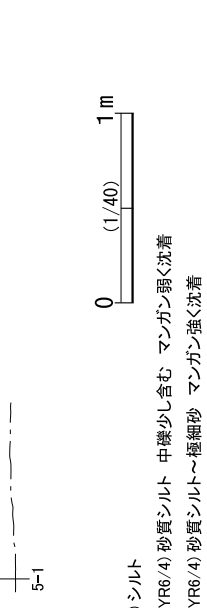
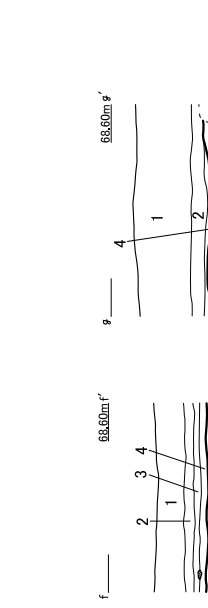
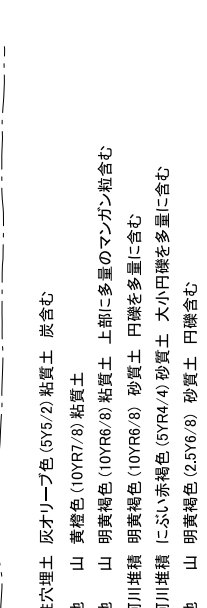
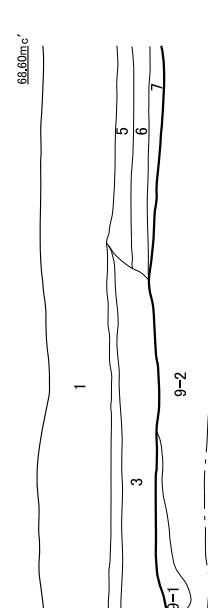
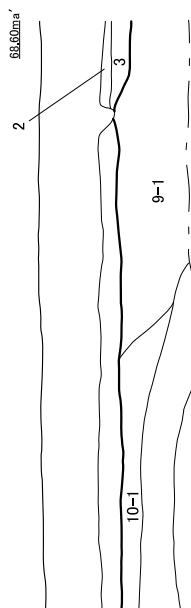
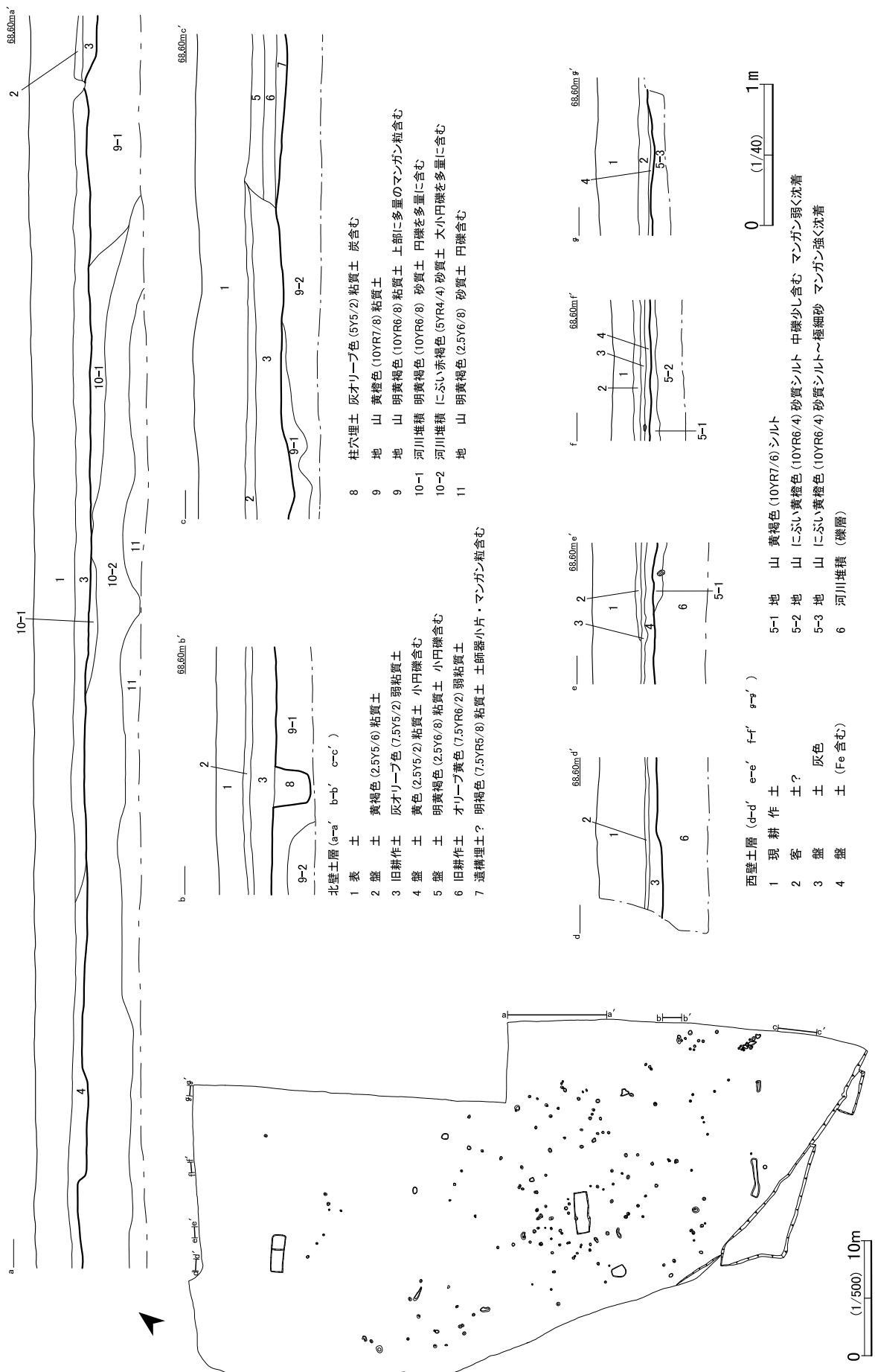
22はSK1より出土した土師器杯であり、底部内面はロクロ目が明瞭に残る。23はSK2より出土した土師器皿である。いずれも13世紀後半～14世紀前半の所産と考えられ、各土坑の埋没時期の上限を示す。

#### 柱穴出土遺物（第16図）

24はSP1より出土した瓦質土器播鉢である。硬く焼き締まった須恵質に近い焼成であり、かつ、外面は指オサエ痕が密に残るなど、通有の瓦質土器とは異なる特徴を示す。内面にハケ目が残る点、卸目が5条確認できることから15～16世紀の所産と考えるが、今後の追検証は必要である。25～40は土師器杯・皿であり、このうち、26～37はSP39よりまとめて出土している。また、図示していないが、炭化材が出土している。杯は底部と体部の境が湾曲するタイプ（26～28）、屈曲するタイプ（29・33）、両者の中間的タイプ（30・31）が確認でき、かつ、これらが共存することが確認できる。皿（35～37）は器高が低く、14世紀前半～中頃の所産と考えられる。これらは柱穴の埋没時期の上限を示している。



第13図 3地区 遺構配置図

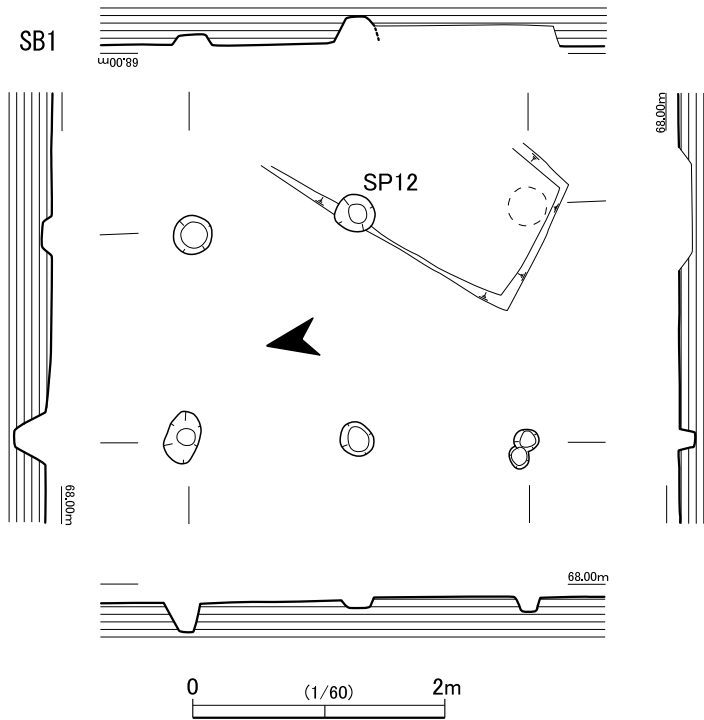


- 1 表土
- 2 盤土 黄褐色(2.5Y5/6)粘質土
- 3 旧耕作土 灰オリーブ色(7.5Y5/2)弱粘質土
- 4 盤土 黄色(2.5Y5/2)粘質土 小円礫含む
- 5 盤土 明黄褐色(2.5Y6/8)粘質土 小円礫含む
- 6 旧耕作土 オリーブ黄色(7.5YR6/2)弱粘質土
- 7 遺構埋土? 明褐色(7.5YR5/8)粘質土 土師器小片・マンガン粒含む
- 8 柱穴埋土 灰オリーブ色(5Y5/2)粘質土 炭含む
- 9 地 山 黄褐色(10YR7/8)粘質土
- 9 地 山 明黄褐色(10YR6/8)粘質土 上部に多量のマンガン粒含む
- 10-1 河川堆積 明黄褐色(10YR6/8)砂質土 円礫を多量に含む
- 10-2 河川堆積 にぶい赤褐色(5YR4/4)砂質土 大小円礫を多量に含む
- 11 地 山 明黄褐色(2.5Y6/8)砂質土 円礫含む

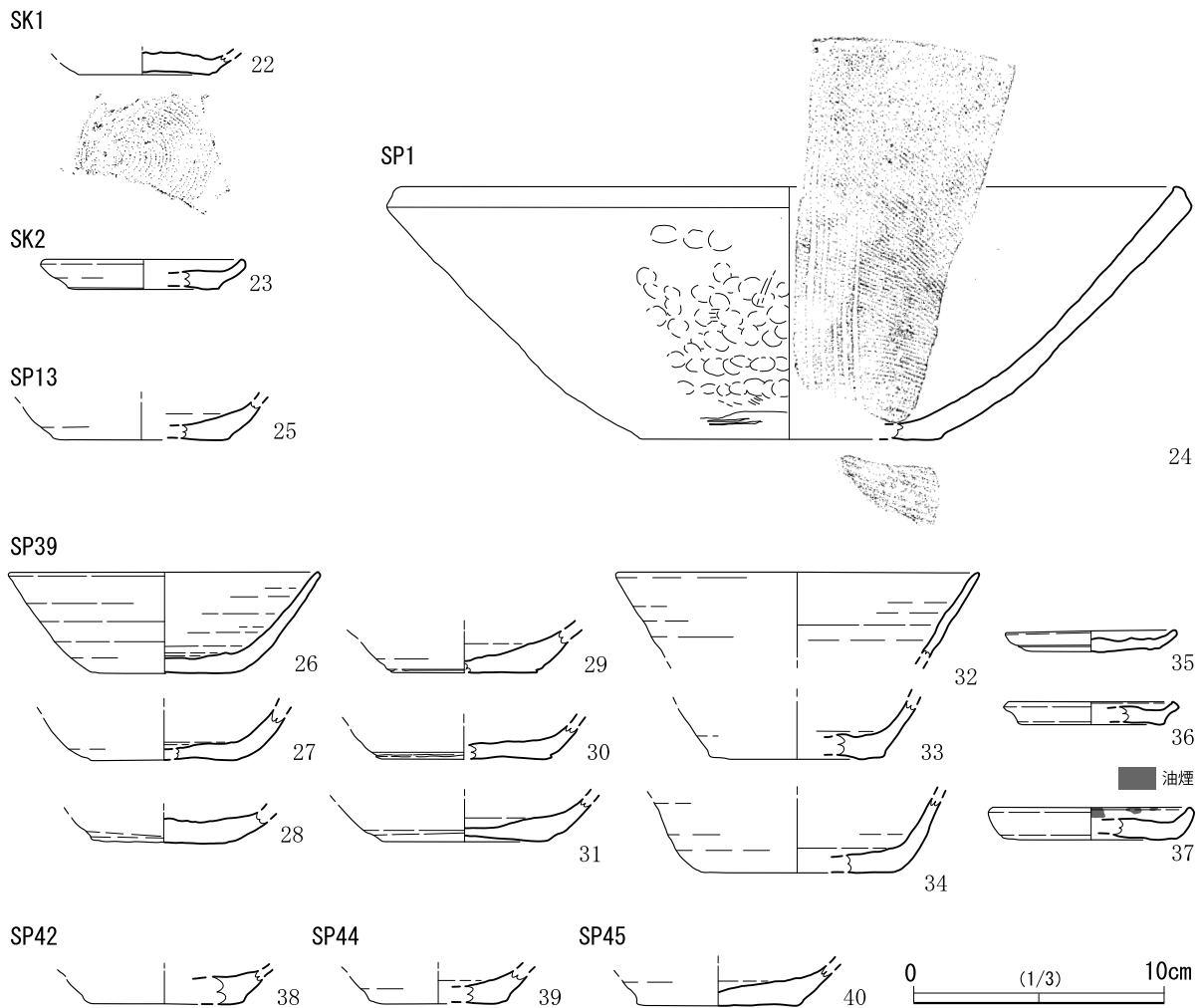
- 西壁土層 (d-d' e-e' f-f' g-g')
- 1 現耕作土
- 2 客土?
- 3 盤土 灰色
- 4 盤土 (Fe含む)
- 5-1 地 山 黄褐色(10YR7/6)シルト
- 5-2 地 山 にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質シルト 中礫少し含む マンガン弱く沈着
- 5-3 地 山 にぶい黄褐色(10YR6/4)砂質シルト~極細砂 マンガン強く沈着
- 6 河川堆積 (礫層)

第14図 3地区 壁面土層断面図



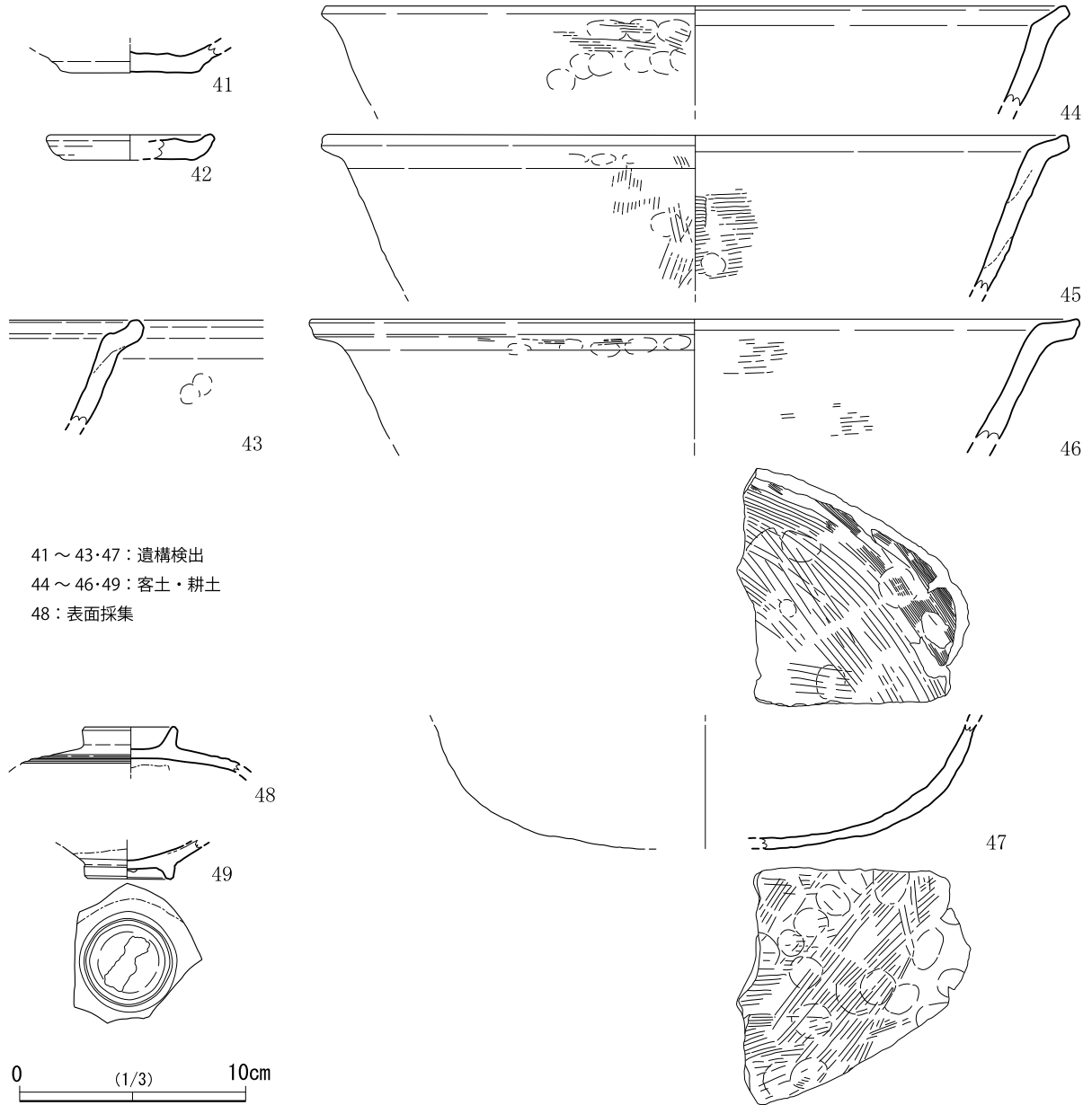


第 15 图 3 地区 掘立柱建物実測図



第 16 图 3 地区 出土遺物実測図 (1)

遺構外



41～43・47：遺構検出  
44～46・49：客土・耕土  
48：表面採集

第17図 3地区 出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物(第17図)

41は土師器杯であり、底部内面はロクロ目が残る。42は土師器小皿であり、SP39出土のものと同様に浅い器形であり、14世紀前半～中頃の所産と考えられる。43～47は土師質土器の鍋である。口縁部の形状から、46は13世紀に遡る可能性があるが、概ね14世紀代の所産と考えられる。48は瀬戸・美濃系陶器の行平鍋の蓋、49は肥前系陶器椀である。

## 4 4地区

### (1) 遺構

調査区は3地区より北東へ約50m、標高約70mの位置にある。

基本土層は表土以下、他地区と同様であり、水捌けが悪く1地区同様、一部地山がグライ化している。

検出した遺構は柱穴18個（杭穴を含む）、土坑6基、溝2条を検出した。以下、主な遺構を取り上げる。

#### 土坑

**SK1 (第20図)** 調査区東に位置する。平面形は不整円形と考えられる。南は攪乱により切られる。検出規模は長径86cm、短径60cm以上、検出面からの深さ10cmである。また、一部に深さ30cmの柱穴状に深くなる部分がある。土師器小片が出土した。遺構の時期、性格は不明である。

**SK2 (第20図)** 調査区東端に位置する。平面形は楕円形である。規模は長径63cm、短径40cm、検出面からの深さ15cmである。土師器小片、陶器小片が出土した。遺構の時期、性格は不明である。

**SK3 (第21図)** 調査区東端に位置する。遺構の北はSP4を切り、南は攪乱により切られる。遺構の平面形は南へ扇状に広がる。検出規模は長径80cm以上、短径約70cm、検出面からの深さ5～12cmである。北西から南東に向い深さ5cm程度の小規模な溝状の落ち込みをみる。遺物は、土師器小片が出土した。遺構の時期、性格は不明である。

**SK6 (第21図)** 調査区中央付近に位置する。平面形は不整円形である。規模は、径48cm、深さ17cmである。遺物は土師器小片が出土した。遺構の時期、性格は不明である。

#### 溝

**SD1 (第21図)** 調査区中央東寄りに位置する。北東～南西方向へ流下し、南西側でSD2と重複し調査区外へ延びる。新旧関係は本遺構が新しい。検出規模は、長さ3.0m以上、幅20～75cm、深さ3～43cmである。遺物は、土師器片、瓦質土器片、陶器片が出土した。遺構の時期、性格は不明である。

**SD2 (第21図)** 調査区中央東寄りに位置する。北～南方向へ流下し、途中南西へ屈曲する。一部がSD1と重複し調査区外へ延びる。新旧関係は本遺構が古い。検出規模は、長さ1.2m以上、幅18～60cm以上、深さ13～24cmである。遺物は土師器片が出土した。遺構の時期、性格は不明である。

### (2) 遺物

4地区から出土した遺物は極めて少量であり、図示できたのは5点に留まる。

#### 土坑出土遺物 (第22図)

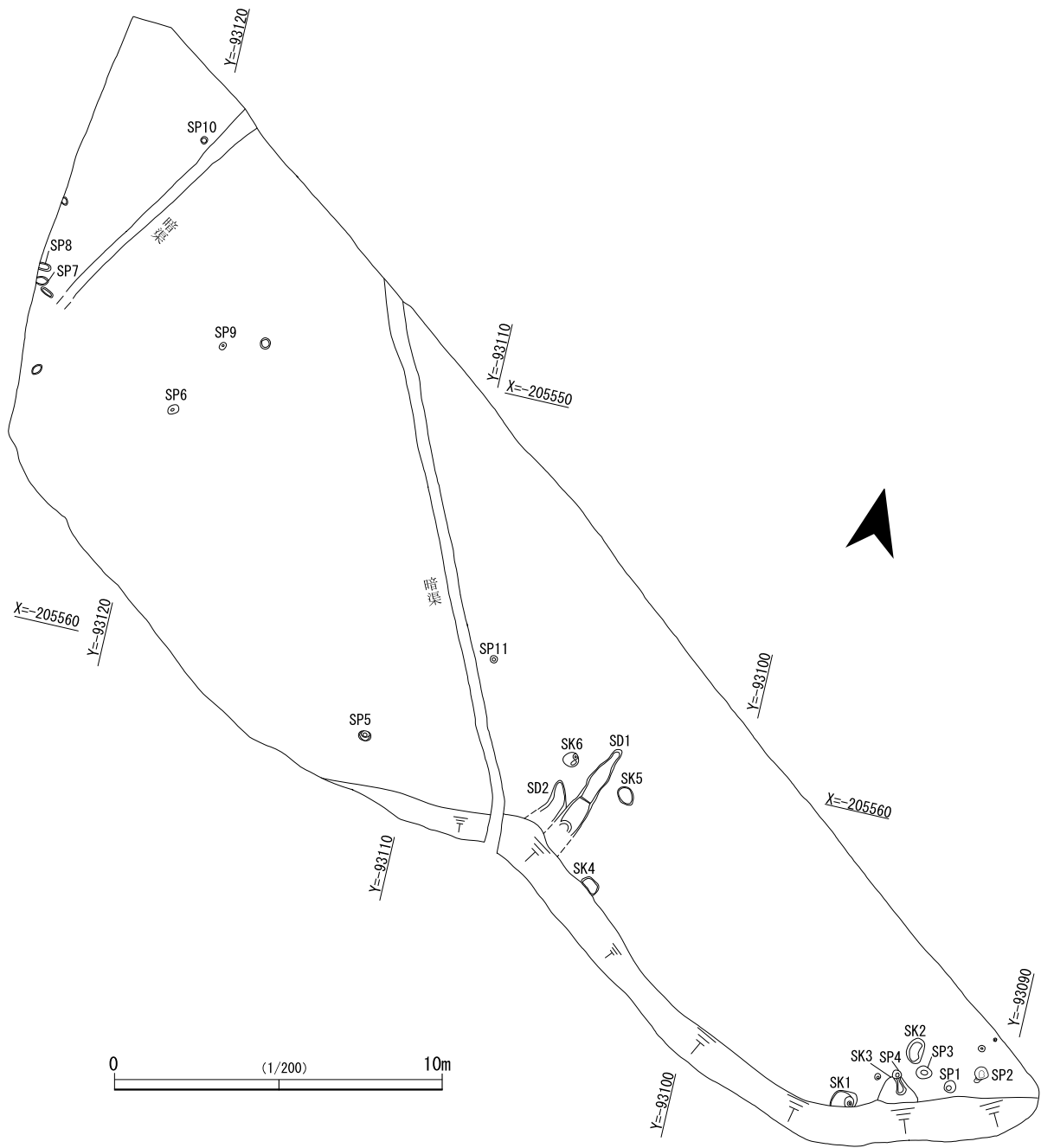
50はSK3出土の土師器杯である。13世紀後半～14世紀の所産と考えられ、埋没時期の上限を示す。また、椀形鍛冶滓が出土している (第44図)。

#### 柱穴出土遺物 (第22図)

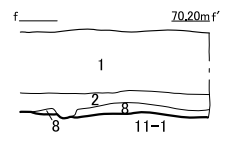
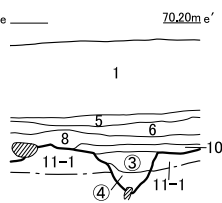
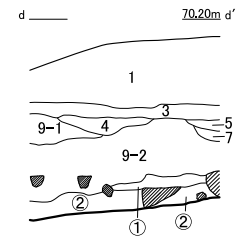
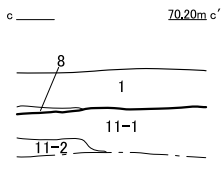
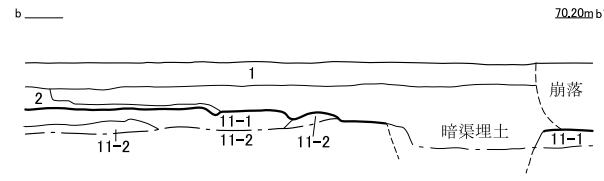
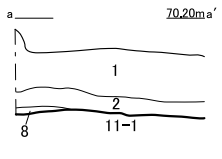
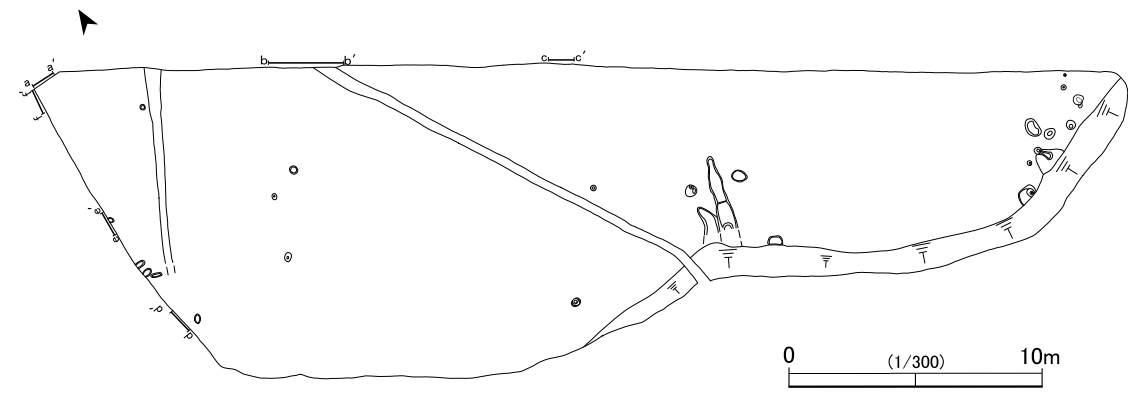
51はSP1出土で、鉄釘と判断している。

#### 溝出土遺物 (第22図)

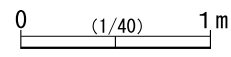
52～54はSD1より出土している。52は土師器杯で、ハケ目らしき痕跡がかすかに認められ、底部と体部は別作りの可能性がある。53は土師器皿で、14世紀以降のものと考えられる。54は瓦質土器であるが、硬く焼き締まった須恵質に近い焼成である。頸部に突線が1条巡る。



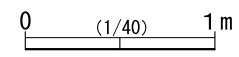
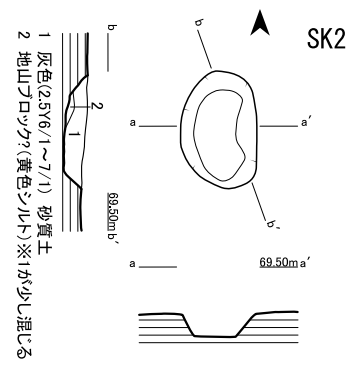
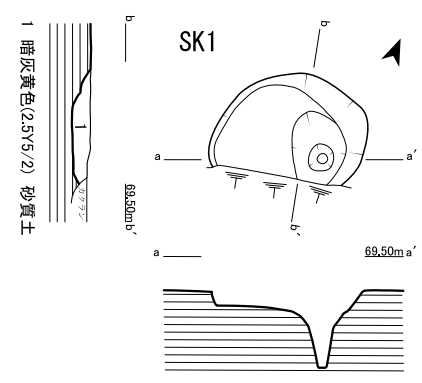
第 18 図 4 地区 遺構配置図



- 北～西壁面土層
- 1 現耕作土
  - 2 耕作土 (主に現代)
  - 3 旧耕作土 灰色 (2.5Y6/1 ~ 7/1) 細礫まじり砂質土
  - 4 Fe・マンガン沈着
  - 5 旧耕作土 灰色 (2.5Y6/1 ~ 7/1) 砂質土
  - 6 旧耕作土 灰色 (2.5Y6/1) 細礫・中礫まじり 砂質土
  - 7 Fe 沈着
  - 8 旧耕作土 灰色 (2.5Y5/1) 細礫・中礫まじり 砂質土
  - 9-1 客土
  - 9-2 客土
  - 10 水成堆積 灰色 (2.5Y6/1) 中礫～細礫
  - 11-1 地山 オリーブ色 (7.5Y7/2) 礫混じりシルト しまり悪い グライ化
  - 11-2 地山 オリーブ色 (7.5Y7/2) 粘性シルト しまり非常に良い グライ化
  - ① 水路埋土 灰色 (N5/0) 極細砂
  - ② 水路埋土 灰色 (5Y4/2) 粗砂 大礫含む
  - ③ 遺構埋土 灰色 (N5/0) 極細砂
  - ④ 遺構埋土 灰色 (5Y4/2) 粗砂 大礫含む

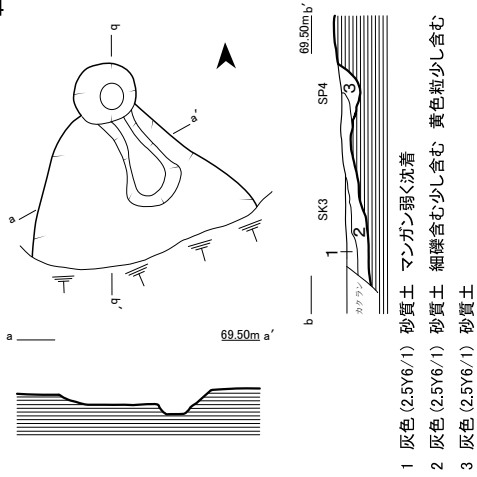


第19図 4地区 壁面土層断面図

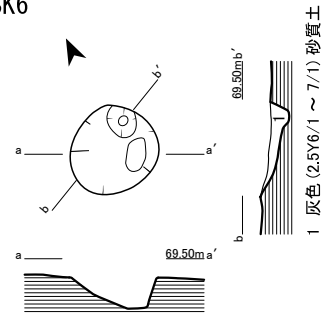


第20図 4地区 土坑実測図

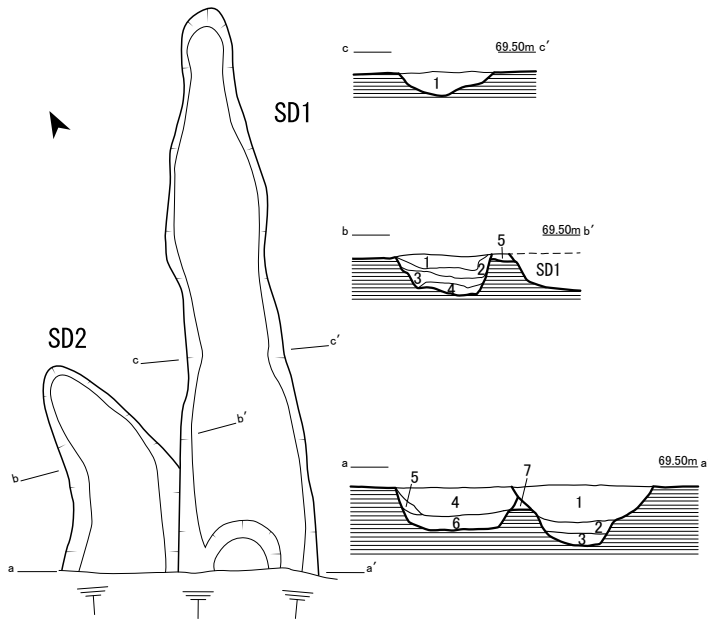
SK3・SP4



SK6



0 (1/40) 1 m



SD1 ベルト土層 (c-c')

1 灰色 (2.5Y5/1 ~ 6/1) 砂質土 中礫含む マンガン斑弱く沈着

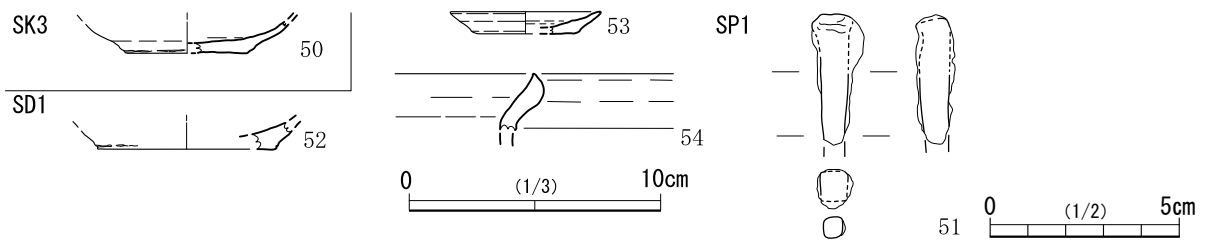
SD2 ベルト土層 (b-b')

1 灰色 (2.5Y6/1) 砂質土 マンガン斑強く沈着  
 2 灰色 (2.5Y6/1) 砂質土 マンガン斑沈着  
 地山ブロック (黄色シルト) 含む  
 3 灰色 (2.5Y6/1) 砂質土 マンガン斑弱く沈着  
 4 灰色 (2.5Y6/1 ~ 7/1) 砂質土 マンガン斑沈着  
 地山ブロック (黄色シルト) 多く含む  
 5 灰色 (2.5Y6/1 ~ 7/1) 砂質土 (別遺構)

SD1・2 ベルト土層 (a-a')

1 灰色 (2.5Y5/1 ~ 6/1) 砂質土 中礫含む マンガン沈着  
 2 灰色 (2.5Y5/1 ~ 6/1) 砂質土 やや粘性 砂礫少し含む  
 マンガン沈着  
 3 灰色 (N6/0 ~ 5/0) 粘土  
 4 灰色 (2.5Y6/1) 砂質土 細礫含む マンガン弱く沈着  
 5 灰色 (2.5Y6/1) 砂質土 地山ブロック (黄色シルト) 含む  
 6 灰色 (2.5Y6/1 ~ 7/1) 砂質土  
 7 灰色 (2.5Y6/1 ~ 7/1) 砂質土

第21図 4地区 土坑・柱穴・溝実測図



第22図 4地区 出土遺物実測図

## 5 5地区

### (1) 遺構

調査区は4地区から北東へ約20mにあり、標高約70.5mの扇状地上に立地する。基本土層は表土以下、耕作土、盤土、旧耕作土、地山となる。また、ほぼ全層から細～大礫が混じる。

遺構は調査区西から中央付近に集中してみられる。中央から東は土坑1基と谷状の落ち込みを検出するのみである。検出した遺構は、掘立柱建物4棟、柱穴148個、土坑5基、溝2条を検出した。以下、主な遺構を述べる。

#### 掘立柱建物

調査区のはほぼ西側に4棟が集中して確認できた。

**S B 1 (第25図)** 調査区西側に位置する。規模は2間×1間で桁行3.0m、梁行1.6mである。棟方向はN49°Wである。構成柱穴であるSP47、SP59、SP61から土師器杯片が出土した。遺構の時期は中世以降である。

**S B 2 (第25図)** 調査区西側に位置する。南西側の柱穴は調査区外と推定される。規模は2間×1間で桁行3.4m、梁行2.0mである。棟方向はN54°Wである。構成柱穴であるSP25、SP28、SP44からは土師器小片が出土している。遺構の時期は中世以降である。

**S B 3 (第25図)** 調査区西側に位置し、SB2、SD1と重複する。構成柱穴のうちSP57はSD1直下から検出した。規模は2間×1間で桁行3.5m、梁行2.0mである。棟方向はN43°Eである。構成柱穴であるSP37、SP39、SP57から土師器小片が出土した。遺構の時期は中世以降である。

**S B 4 (第25図)** 調査区中央東寄りに位置する。規模は2間×1間で、桁行2.9m、梁行2.0mである。棟方向はN9°Wである。構成柱穴であるSP15から瓦質土器片、土師器片が、SP34、SP68からは土師器小片が出土した。遺構の時期は中世以降である。

#### 土坑

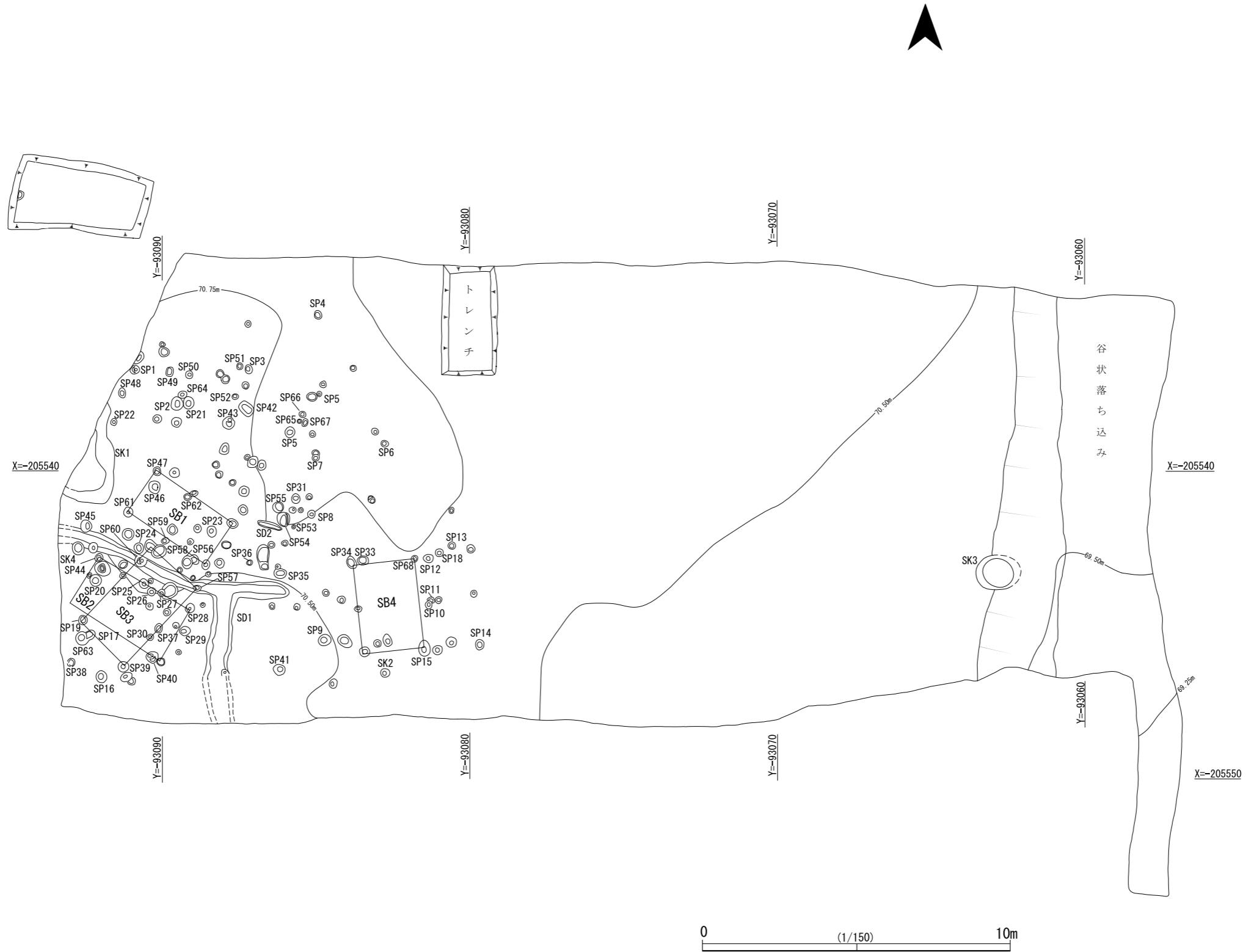
**S K 1 (第26図)** 調査区西端に位置する。遺構の西側は調査区外である。検出規模は長軸3.28m、短軸1.45m、検出面からの深さ10～25cmである。北へ向かうにつれ、徐々に高くなる。埋土は、灰色、灰褐色土層を中心に構成され、ほぼ全層で焼土・炭化ブロックを含んでいる。遺物は土師器杯、瓦質土器播鉢、焼土塊、炭化材が出土した。遺構の時期は中世以降である。

**S K 3 (第26図)** 調査区東に位置する。一部は谷状の落ち込みによって消失している。遺構の平面形は円形である。規模は残存部径1.2m、検出面からの深さ20cmである。遺物は土師器小片が出土した。遺構の時期、性格は不明である。

**S P 4 2 (第26図)** 調査区北西に位置する。平面形は楕円形である。規模は長径54cm、短径39cm、検出面からの深さ40cmである。土層の観察などから柱抜き取り痕を確認した。遺物は土師器杯片が出土した。遺構の時期、性格は不明である。

#### 溝

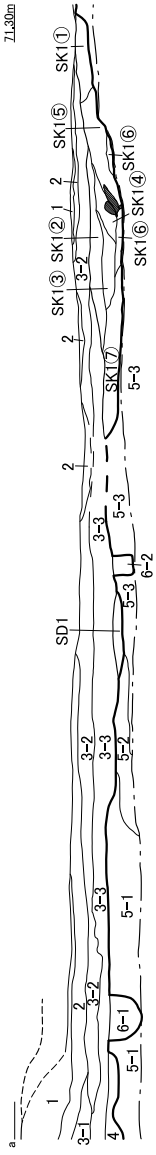
**S D 1 (第26図)** 調査区西側に位置する。ほぼ東西方向に流下し、南へ流れる部分と合流する。検出規模は東西7.3m以上、合流地点から南へ2.8m以上、深さ7～9cmである。遺物は瓦質土器播鉢、瓦質土器足鍋片、白磁片、不明鉄製品、被熱石、焼土塊などが出土した。遺構の時期は中世以降である。



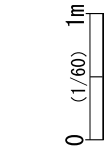
第 23 図 5 地区 遺構配置図



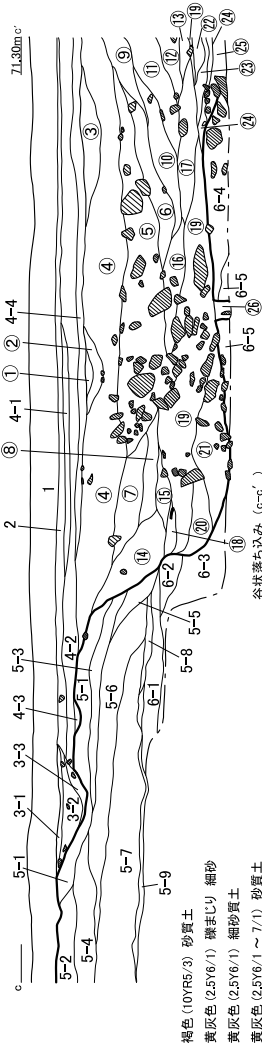
7L30m a'



- 西壁 (a-a')
- 1 現耕作土
  - 2 盛土
  - 3-1 旧耕作土 灰黄褐色 (10YR6/2) 砂質土
  - 3-2 旧耕作土 灰色 (2.5Y6/1) 細礫・中礫混じり砂質土
  - 3-3 旧耕作土 灰色 (2.5Y6/1 ~ 5/1) 中礫混じり砂質土
  - 4 包含層 灰色 (2.5Y5/1) 細礫混じり砂質土
- SK(1)~(7) 別途記載
- SD1 別途記載
- 7L30m b' 北壁 (b-b')
- 1 現耕作土
  - 2 地山 谷埋土の地山と同じ 乾痕あり
  - 3-1 地山 灰白色 (7.5Y7/1) 中礫・粗砂まじりシルト
  - 3-2 地山 灰白色 (7.5Y7/1) 粗砂まじりシルト しまり良い
  - 3-3 地山 灰白色 (7.5Y7/1) 大礫・中礫まじりシルト
  - 3-4 地山 明黄褐色 (10YR6/6 ~ 6/4) 細礫・粗砂まじりシルト しまり悪い
  - 3-5 地山 灰色 (7.5Y7/1 ~ 6/1) 中礫まじり粗砂

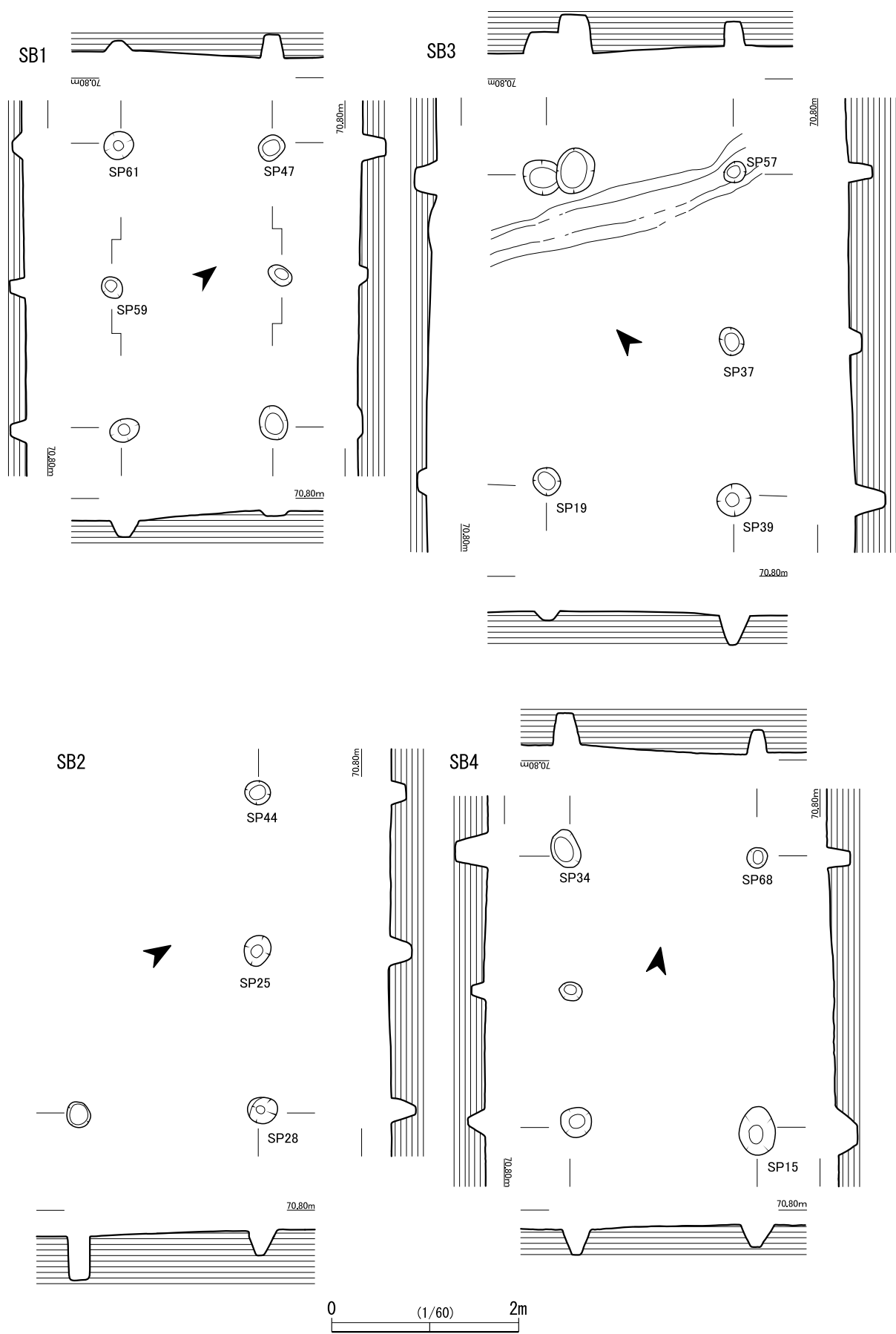


7L30m c'



- 北壁 (c-c')
- 1 現耕作土
  - 2 盛土
  - 3-1 近現代溝
  - 3-2 近現代溝
  - 3-3 近現代溝
  - 4-1 旧耕作土
  - 4-2 旧耕作土
  - 4-3 旧耕作土
  - 4-4 旧耕作土
  - 5-1 地山
  - 5-2 地山
  - 5-3 地山
  - 5-4 地山
  - 5-5 地山
  - 5-6 地山
  - 5-7 地山
  - 5-8 地山
  - 5-9 地山
  - 6-1 地山
  - 6-2 地山
  - 6-3 地山
  - 6-4 地山
  - 6-5 地山
- 褐色 (10YR5/3) 砂質土  
 黄灰色 (2.5Y6/1) 礫まじり 細砂  
 黄灰色 (2.5Y6/1) 細砂質土  
 黄灰色 (2.5Y6/1 ~ 7/1) 砂質土  
 黄灰色 (2.5Y6/1 ~ 7/1) 礫混じり砂質土  
 灰白色 (2.5Y7/1) 砂質土  
 黄灰色 (2.5Y6/1) 砂質土 マンガン沈着 中礫含む  
 灰白色 (5Y7/1) ~ 5/1 黄褐色 (10YR6/4) 砂質シルト  
 明黄褐色 (10YR7/4 ~ 2.5Y7/2) 粗砂混じりシルト  
 浅黄褐色 (2.5Y7/3) ~ 灰白色 (2.5Y7/2) 粗砂混じりシルト しまりやや悪い  
 褐色 (7.5Y5/1) 粘性シルト しまり良い 乾痕状に5-1が入り込む  
 灰白色 (2.5Y7/2) 粗砂混じりシルト  
 灰白〜青色 (5Y6/2) 礫・粗砂混じりシルト しまりやや悪い  
 灰白〜青色 (5Y6/2) 砂礫層 しまり悪い  
 灰白色 (7.5Y7/1 ~ 16/1) 細砂〜シルト  
 に少し黄褐色 (10YR7/4) 細砂〜シルト 全体にFe沈着  
 灰白色 (7.5YR4/1) 粘土 しまり非常に良い  
 灰白色 (5Y6/1 ~ 7/1) 細砂混じりシルト しまりやや悪い  
 明黄褐色 (2.5Y7/6) 礫混じり 粘性シルト しまり良い  
 明緑灰色 (7.5GY8/1) 粘土  
 明緑灰色 (7.5GY8/1) 礫混じり粘土
- 谷状落ち込み (c-c')
- 1 褐灰色 (10YR5/1) 砂質土 しまり悪い
  - 2 褐灰色 (10YR5/1) 礫混じり砂質土 黄褐色ブロック少し含む
  - 3 褐灰色 (10YR5/1 ~ 4/1) 細礫混じり 砂質土
  - 4 褐灰色 (10YR5/1) 細礫混じり 砂質土 炭化粒わずかに含む
  - 5 褐灰色 (10YR5/1 ~ 4/1) 礫混じり 砂質土 しまり悪い
  - 6 褐灰色 (10YR5/1 ~ 4/1) 礫混じり 砂質土 細礫少し含む
  - 7 褐灰色 (10YR5/1) 砂質土 細礫少し含む
  - 8 黄灰色 (2.5Y5/1 ~ 5/2) 砂質土 細・中礫少し含む
  - 9 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 中礫混じり 砂質土 黄白色軟質砂土? (地山ブロック) 少し含む
  - 10 黄灰色 (2.5Y5/1 ~ 5/2) 中礫混じり 砂質土
  - 11 黄白色軟質砂土? (地山ブロック) 少し含む しまりやや悪い
  - 12 明緑灰色 (2.5Y7/6) 礫混じり 砂質土 黄白色軟質砂土? (地山ブロック) 多く含む
  - 13 黄灰色 (2.5Y6/2 ~ 5/2) 砂質土 わずかに粘性
  - 14 中礫混じり 砂質土
  - 15 黄白色軟質砂土? (地山ブロック) 多く含む
  - 16 黄灰色 (2.5Y6/1 ~ 6/2) 砂質シルト
  - 17 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂質土 わずかに粘性
  - 18 黄灰色 (2.5Y5/1 ~ 6/1) 粘質土
  - 19 灰色 (5Y5/1 ~ 6/1) 中礫混じり 粘質土
  - 20 灰色 (5Y6/1 ~ 6/2) 細砂混じり 粘質土
  - 21 灰色 (5Y6/1 ~ 6/2) 細砂混じり 粘質土
  - 22 灰色 (5Y6/1 ~ 6/2) 細砂混じり 粘質土
  - 23 明緑灰色 (7.5GY7/1) 細砂混じり 粘質土
  - 24 灰色 (N5/0 ~ 6/0) 粘質土 炭化粒少し含む
  - 25 灰色 (10Y6/1) 礫混じり粗砂
  - 26 柱穴 灰色 (N5/0) 粘質土

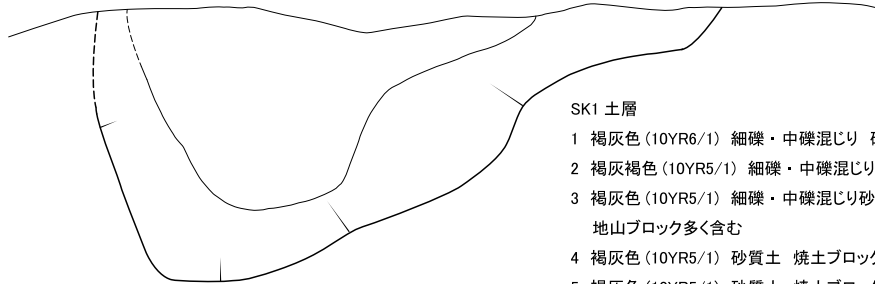
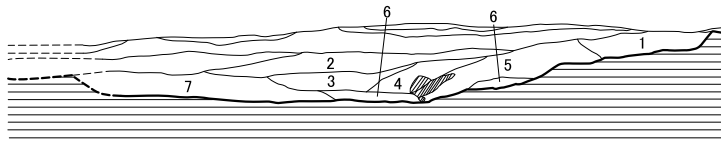
第24図 5地区 壁面土層断面図



第 25 图 5 地区 掘立柱建物实测图

71.30m

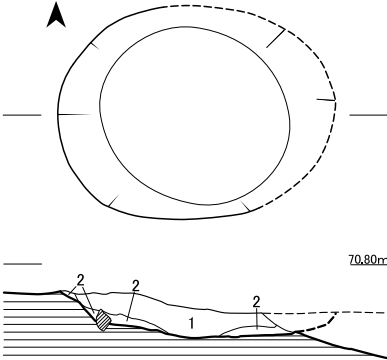
SK1



SK1 土層

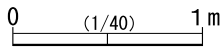
- 1 褐灰色 (10YR6/1) 細礫・中礫混じり 砂質土 焼土・炭化ブロックわずかに含む
- 2 褐灰褐色 (10YR5/1) 細礫・中礫混じり砂質土 焼土・炭化ブロック含む
- 3 褐灰色 (10YR5/1) 細礫・中礫混じり砂質土 焼土・炭化ブロック少し含む  
地山ブロック多く含む
- 4 褐灰色 (10YR5/1) 砂質土 焼土ブロック多く含む
- 5 褐灰色 (10YR5/1) 砂質土 焼土ブロック非常に多く含む
- 6 黄灰色 (2.5Y6/1 ~ 5/1) 砂質土 わずかに粘性
- 7 褐灰色 (10YR5/1) 細礫・粗砂混じり砂質土 焼土・炭化ブロック少し含む  
地山ブロック少し含む

SK3

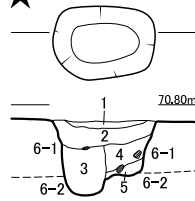


SK4 土層

- 1 黄灰色 (2.5Y5/1 ~ 6/1) 砂質土 細礫含む マンガン弱く沈着
- 2 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘質土

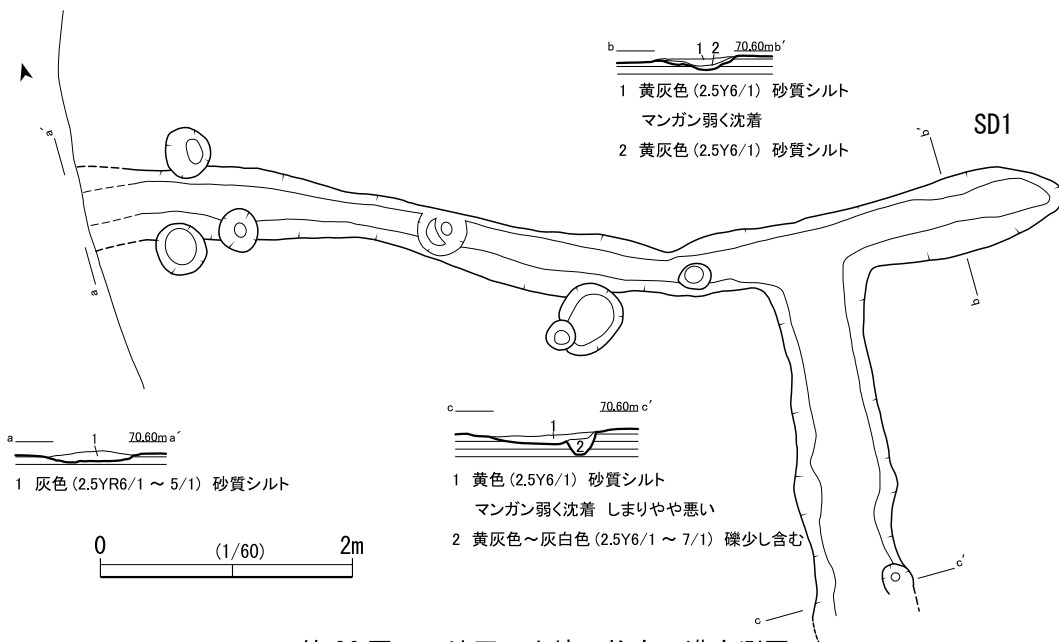


SP42



SP42 土層

- 1 灰白色 (10YR7/1) 細礫混じりシルト 褐灰色ブロック少し含む
- 2 明黄褐色 (10YR7/6) 細礫混じりシルト 褐灰色ブロック少し含む
- 3 にぶい黄橙色 (10YR7/2) ~ 褐灰色 (10YR6/2)  
粗砂混じり粘性シルト しまりや悪い
- 4 黄橙色 (10YR8/6) 粗砂混じりシルト わずかに粘性
- 5 にぶい黄橙色 (10YR7/4) 粗砂混じりシルト やや粘性
- 6-1 地山 明黄褐色 (10YR7/6) シルト しまり良い
- 6-2 地山 にぶい黄橙色 (10YR7/4) 中礫 粗砂混じりシルト



b-b' 70.60m b'

- 1 黄灰色 (2.5Y6/1) 砂質シルト  
マンガン弱く沈着
- 2 黄灰色 (2.5Y6/1) 砂質シルト

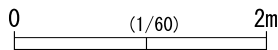
SD1

a-a' 70.60m a'

- 1 灰色 (2.5YR6/1 ~ 5/1) 砂質シルト

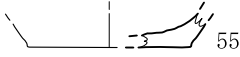
c-c' 70.60m c'

- 1 黄色 (2.5Y6/1) 砂質シルト  
マンガン弱く沈着 しまりや悪い
- 2 黄灰色 ~ 灰白色 (2.5Y6/1 ~ 7/1) 礫少し含む

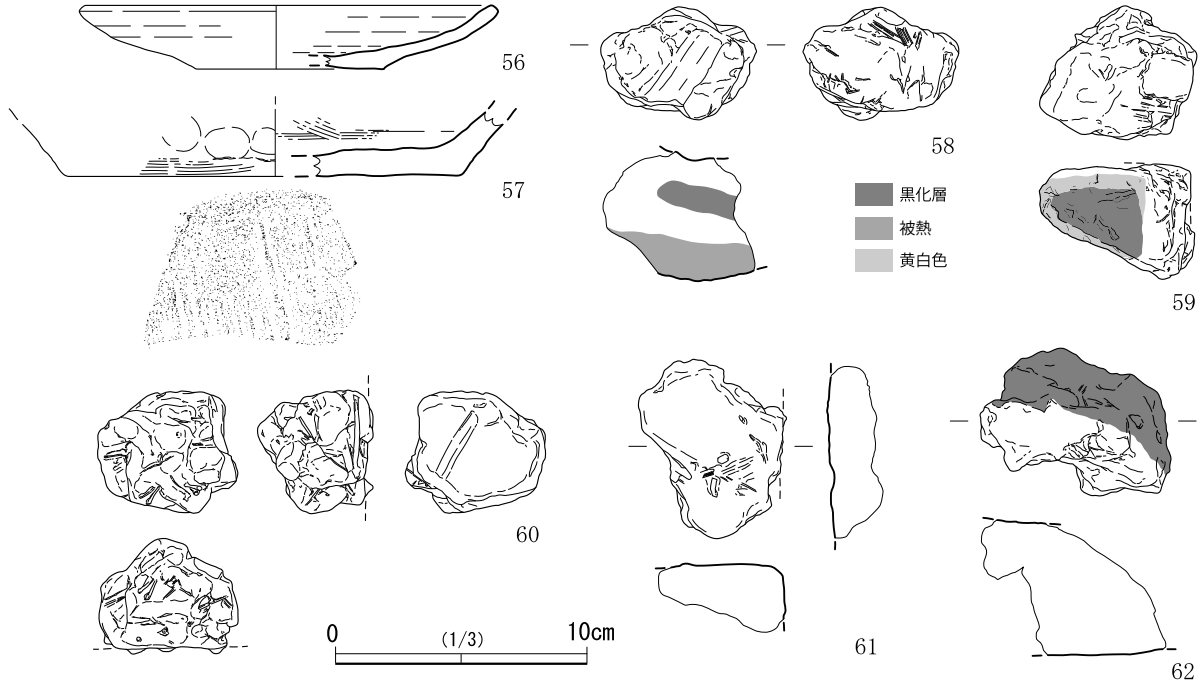


第 26 図 5 地区 十坑・柱穴・溝室測図

SB1 (SP47)



SK1



第 27 図 5 地区 出土遺物実測図 (1)

### 谷状落ち込み

調査区東端にあり、南北に通る。検出規模は長さ19.2m以上、幅6.0m以上、深さ1.4mである。上層で褐灰色、中層で黄灰色、下層で灰色を中心に構成され、上～中層は砂質土、下層は粘質土になる。上～中層は近現代の人為埋土であり、遺物は主に下層から出土している。遺物は土師器、瓦質土器、陶磁器、不明鉄製品などが出土した。

### (2) 遺物

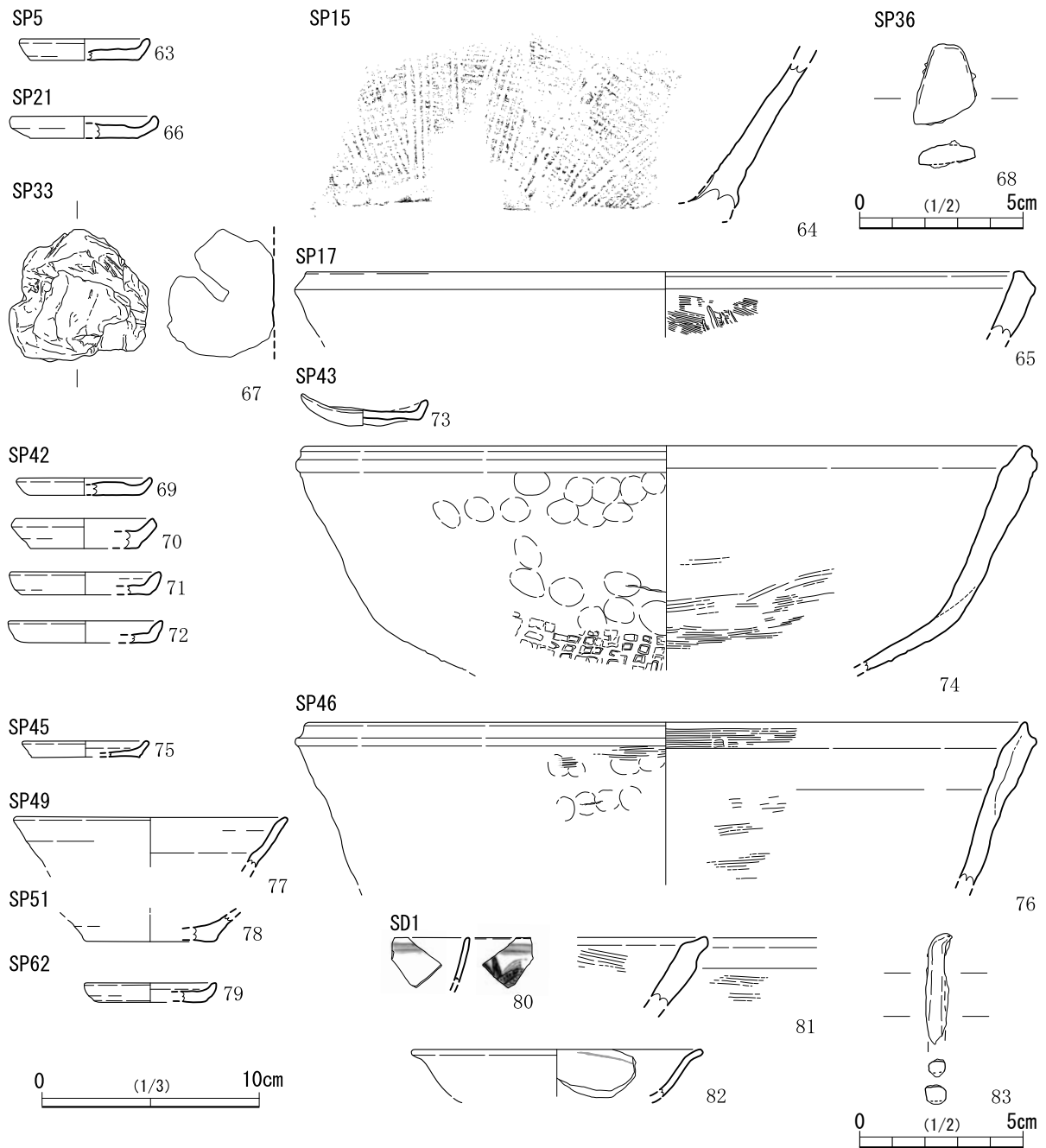
5地区からは13世紀後半～14世紀前半の土師器のほか、谷状落ち込みから青花を含む15世紀後半～16世紀の遺物が多く出土している。また、炉壁と考えられる焼土塊多数と鍛冶滓が出土しており、他の地区と様相がやや異なる。

#### 掘立柱建物出土遺物 (第27図)

55はSB1の構成柱穴SP47より出土した土師器杯である。深い器形であり、14世紀前半以降の所産であり、SB1の埋没時期の上限を示す。

#### 土坑出土遺物 (第27図)

56～62はSK1より出土している。また、図示していないが、マツ科の炭化材が出土している (図版26)。56は土師器杯であり、内外面は比較的ていねいにナデ調整を施す。皿形化した器形であることから、15世紀の所産であると仮定するが、精緻な検証は出来ていない。57は瓦質土器捏鉢である。器表面の劣化が進行しているが、内面にハケ目が残る。底部内面はナデ調整を施す。15世紀前半以



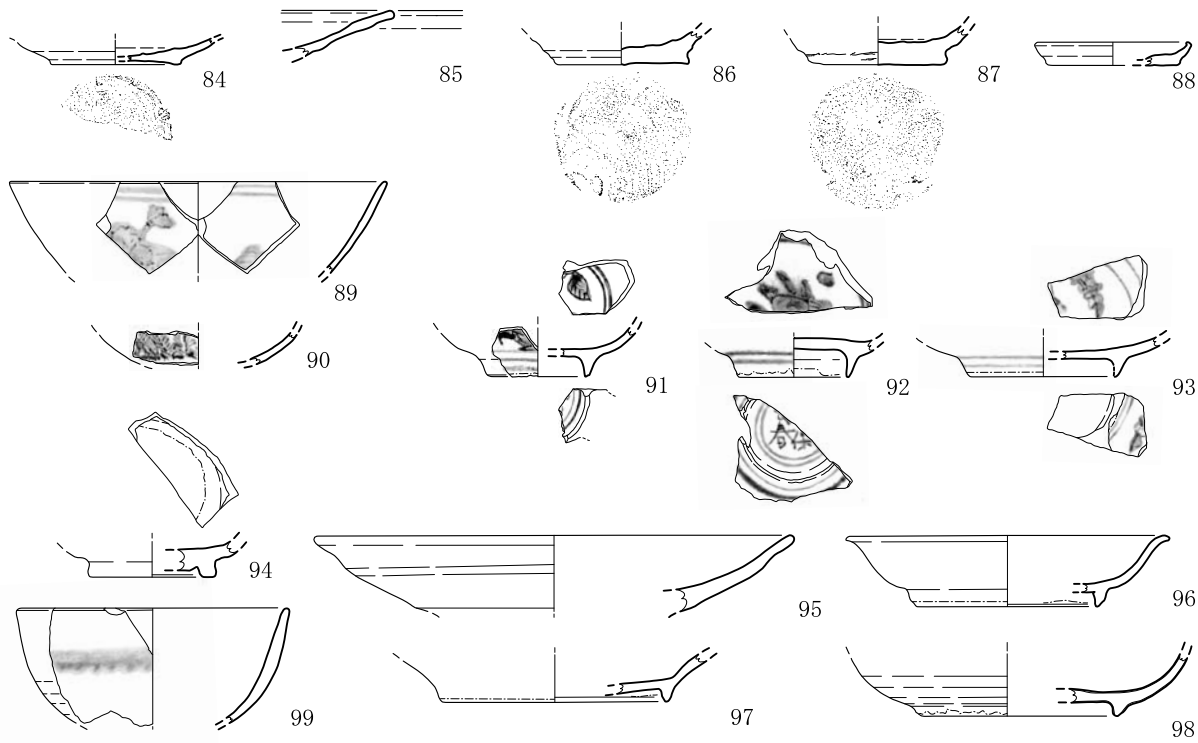
第 28 図 5 地区 出土遺物実測図 (2)

前の所産と考えられる。58～62は炉壁を構成していたと考えられる焼土塊であり、図示したもの以外にも多数出土している（図版 21）。直線的な平坦面が残るものと、湾曲するもののが確認できるが、全体像を復元するには至っていない。いずれも混和材の繊維痕や棒状圧痕などが確認できる。以上の所見から、近辺に鑄造遺構が存在した可能性が高く、SK1 出土遺物はその廃棄物ととらえることができる。廃棄時期は 15 世紀を前後するものと想定しているが、今後の追検証は必要である。

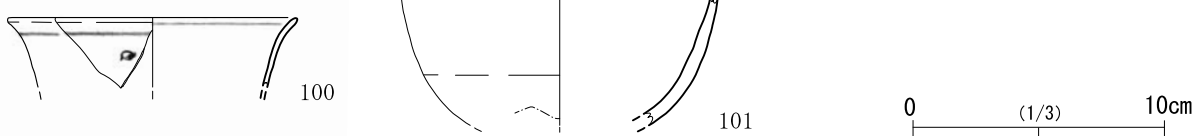
#### 柱穴出土遺物（第 28 図）

63は SP5 出土の土師器皿で、13 世紀後半～14 世紀前半の所産である。64は SP15 の瓦質土器播鉢である。内面のハケが明瞭に残り、卸目を密に入れていることから、15 世紀後半～16 世紀の所産である。65は SP17 出土の瓦質土器播鉢で、口縁部をやや拡張している点から、15 世紀の所産と考

谷状落ち込み 埋土下層



谷状落ち込み 埋土上層



第 29 図 5 地区 出土遺物実測図 (3)

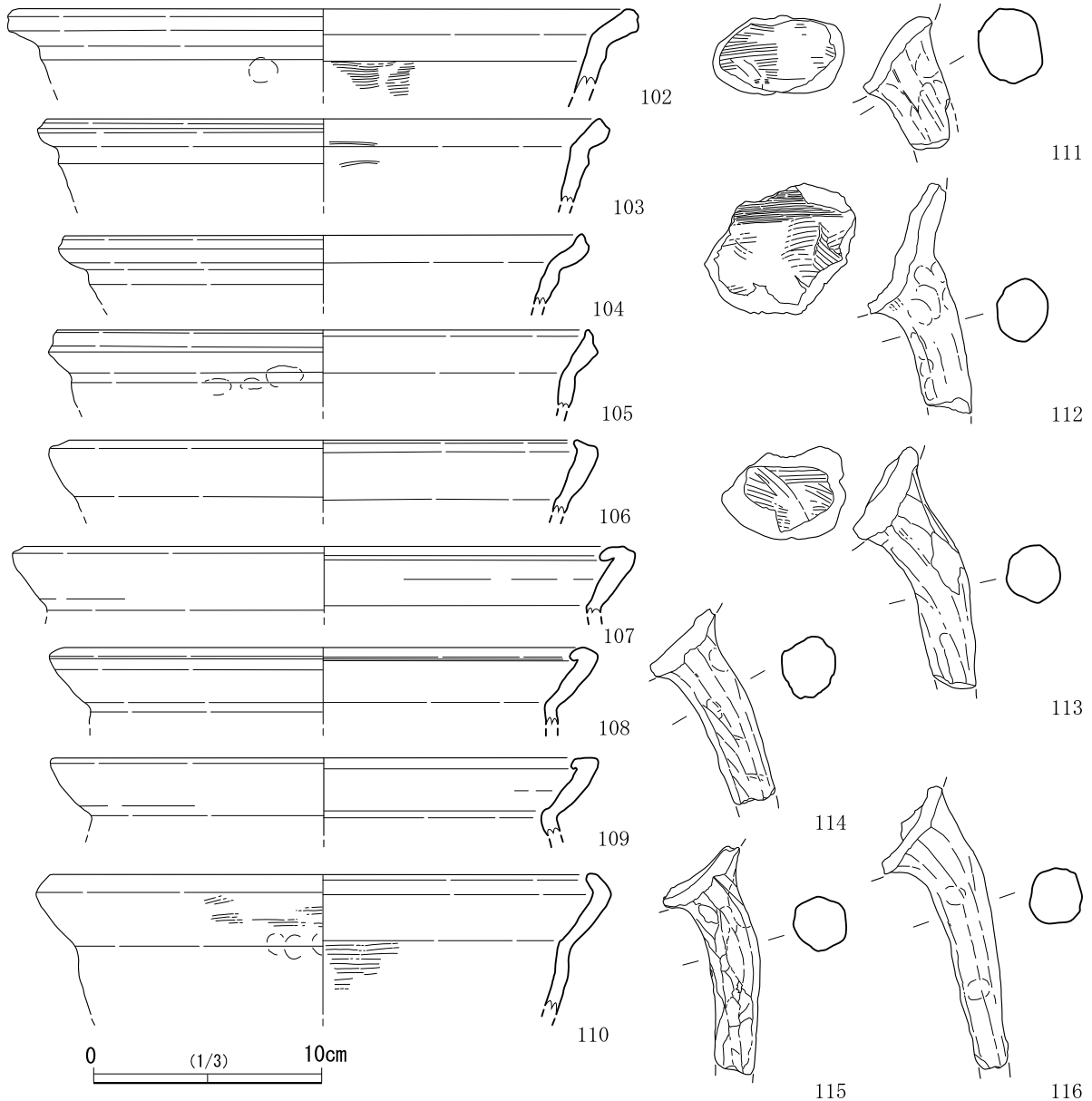
える。66 は SP21 出土の土師器皿で、13 世紀後半～14 世紀前半の所産である。67 は SP33 出土の焼土塊であり、板状の圧痕が明瞭に残る。SK1 出土焼土塊と由来を同じくするものであり、15 世紀を前後するものと仮定する。68 は SP36 出土の不明鉄片である。明瞭な刃部等は確認できず、裁断された残片の可能性がある。また、図示していないが、SP41 からは鍛錬鍛冶滓が出土している（第 44 図・図版 22）。69～72 は SP42 出土の土師器皿であり、13 世紀後半～14 世紀前半の所産である。73・74 は SP43 から出土している。73 は土師器皿で使用が困難なほど歪む。74 は瓦質土器鍋であり、口縁部の形状から 15 世紀の所産と考える。75 は SP45 出土の土師器皿であり、14 世紀以降の所産である。76 は SP46 出土の土師質土器鍋であり、退化気味の有段口縁をなす。14 世紀の所産と考えられる。77 は SP49 出土の土師器杯であり、14 世紀の所産である。78 は SP51 出土の土師器杯であり、14 世紀の所産である。79 は SP62 出土の土師器皿であり、14 世紀前半～中頃の所産と考えられる。

以上は、各柱穴の埋没時期の上限を示している。

溝出土遺物 (第 28 図)

80～83 は SD1 より出土している。80 は青花椀である。内外面に圈線を 2 条巡らしたうえ、外面に花卉文を描く。染付椀 C 群もしくは E 群であり、15 世紀末～16 世紀前半の所産である。81 は瓦質土器鍋であり、口縁部の形状から 15 世紀の所産と考えられる。82 は白磁鉢であり、16 世紀以降の所

谷状落ち込み 埋土下層



第30図 5地区 出土遺物実測図(4)

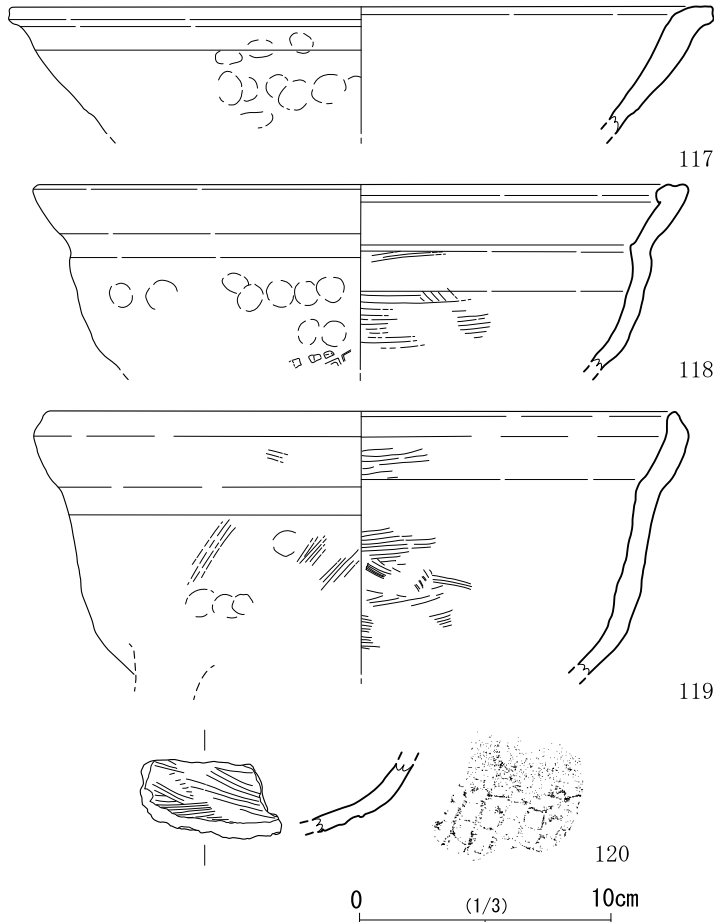
産である。83は鉄製品であり、鉄釘の可能性が考えられるが、頭部が明瞭ではない。これらはいずれも16世紀を主体とし、SD1の埋没時期の上限を示すものと判断している。

谷状落ち込み出土遺物(第29～34図)

谷状落ち込みからは多くの遺物が出土した。調査時には遺物が出土する埋土を上層、下層に細分して遺物を回収しているが、多くは埋土下層からの出土である。

84～87は土師器杯、88は土師器皿である。84・85は同一個体の可能性が高く、皿状に開く器形となる。内外面は比較的丁寧にナデ調整を施しているが、ロクロ目は消しきれていない。両者が同一個体なら、口径12.5cm、器高2.3cmほどに復元でき、器壁が薄型化していることから、15世紀後半～16世紀前半の所産と推定できる。86～88は14世紀前半と考えられ、谷状落ち込み出土遺物の中では古い様相になる。89～92は青花椀、93は青花皿であり、多くは景德鎮産と考えられる。花卉文

谷状落ち込み 埋土上層



第 31 図 5 地区 出土遺物実測図 (5)

が多く、芭蕉文 (90) も含まれる。椀は染付椀 E 群もしくは C 群、皿は B 1 群もしくは B 2 群の範疇であり、概ね 16 世紀代の所産である。94 は龍泉窯青磁椀である。内面釉剥ぎがなされ、畳付から外底面にかけては露胎する (図版 23)。角高台であり、12 世紀末～13 世紀前半の所産である。95～97 は中国産白磁皿である。96・97 の畳付は露胎する。15 世紀後半～16 世紀の所産と考える。98 は陶器皿であり、他国産の可能性が高いが、産地を特定できない。99 は信楽焼陶器椀である。近世後半に下る可能性があり、混入の可能性も想定しておきたい。

100・101 は埋土上層からの出土で、100 が磁器染付椀、101 が陶器椀である。100 は端反り口縁であるが、九州近世陶磁編年 II - 2 期に類例が認められ、17 世紀前半の所産かと考える。

101 は初期唐津焼陶器椀で 17 世紀以降の所産であり、両者とも埋土下層より新しい様相を備える。

102～116 は埋土下層より出土した土師質土器鍋および瓦質土器足鍋・鍋である。岩崎編年 II 型式 (102)、III 古型式 (103)、III 新型式 (105)、IV 型式 (106・110)、V B 型式 (107～109) が出土しており、14 世紀後半～16 世紀代のものが出土しているが、14 世代のものが少なく、16 世紀代のものが主体を占めている点で、上述の供膳具の様相と同じである。

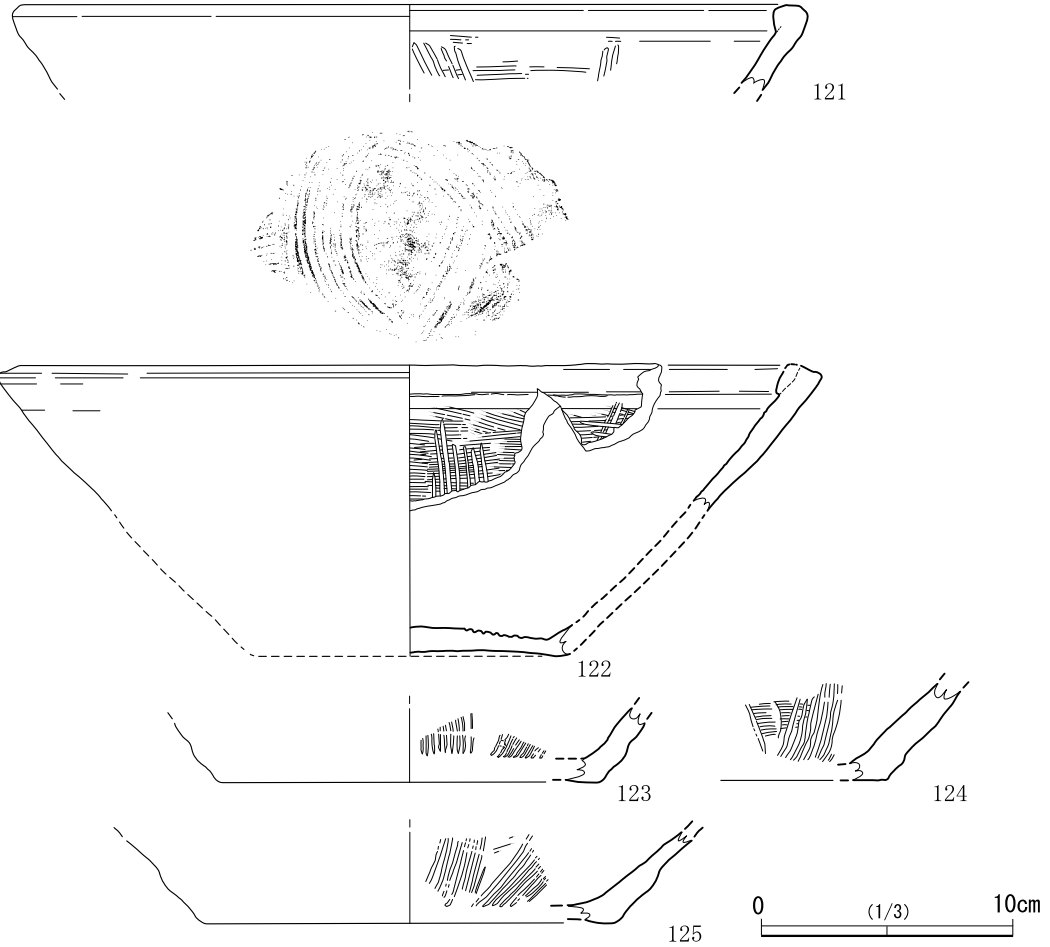
117～120 は埋土上層より出土した土師質土器鍋および瓦質土器足鍋である。117 は西長門型で、14 世紀以降の所産である。118 は岩崎編年 V B 型式、119 は III 新もしくは IV 型式で 15 世紀後半～16 世紀の所産であり、120 もタタキが明瞭に残ることから 15 世紀以降のものである。これらは埋土下層と同時期のものであり、本来、埋土下層に属する可能性が高い。

121～128 は瓦質土器播鉢で、121～125 は埋土下層、127～128 は埋土上層より出土している。埋土下層のものは口縁部の形状と、内面ハケの残存状況から、いずれも 15 世紀後半～16 世紀の所産である。埋土上層から出土したものは、126 が 122 と形式的にはほぼ同じかやや新しく、127 は今宿東遺跡 II 区の井戸より出土した 17 世紀前半の基準資料と同様、口縁端部を強く横ナデした凹凸が認められる。したがって、埋土下層よりやや新しい様相を備えており、同じく埋土上層より出土した 100・101 と同時期に位置づけられよう。

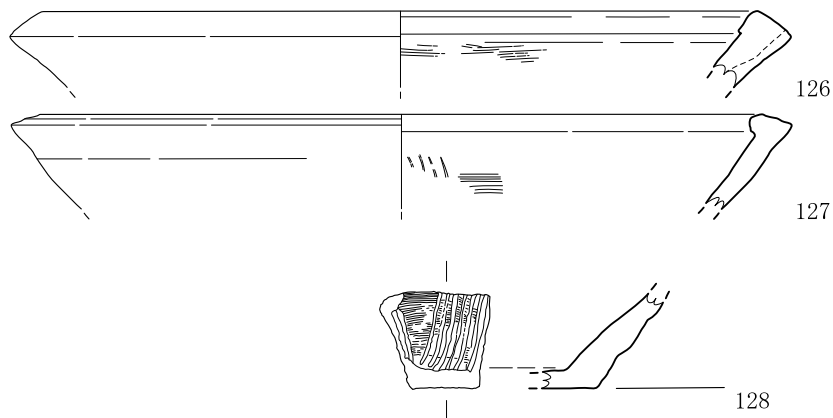
129～134 は埋土下層より出土した瓦質土器湯釜である。このうち、134 は径の大きい平底である



谷状落ち込み 埋土下層



谷状落ち込み 埋土上層

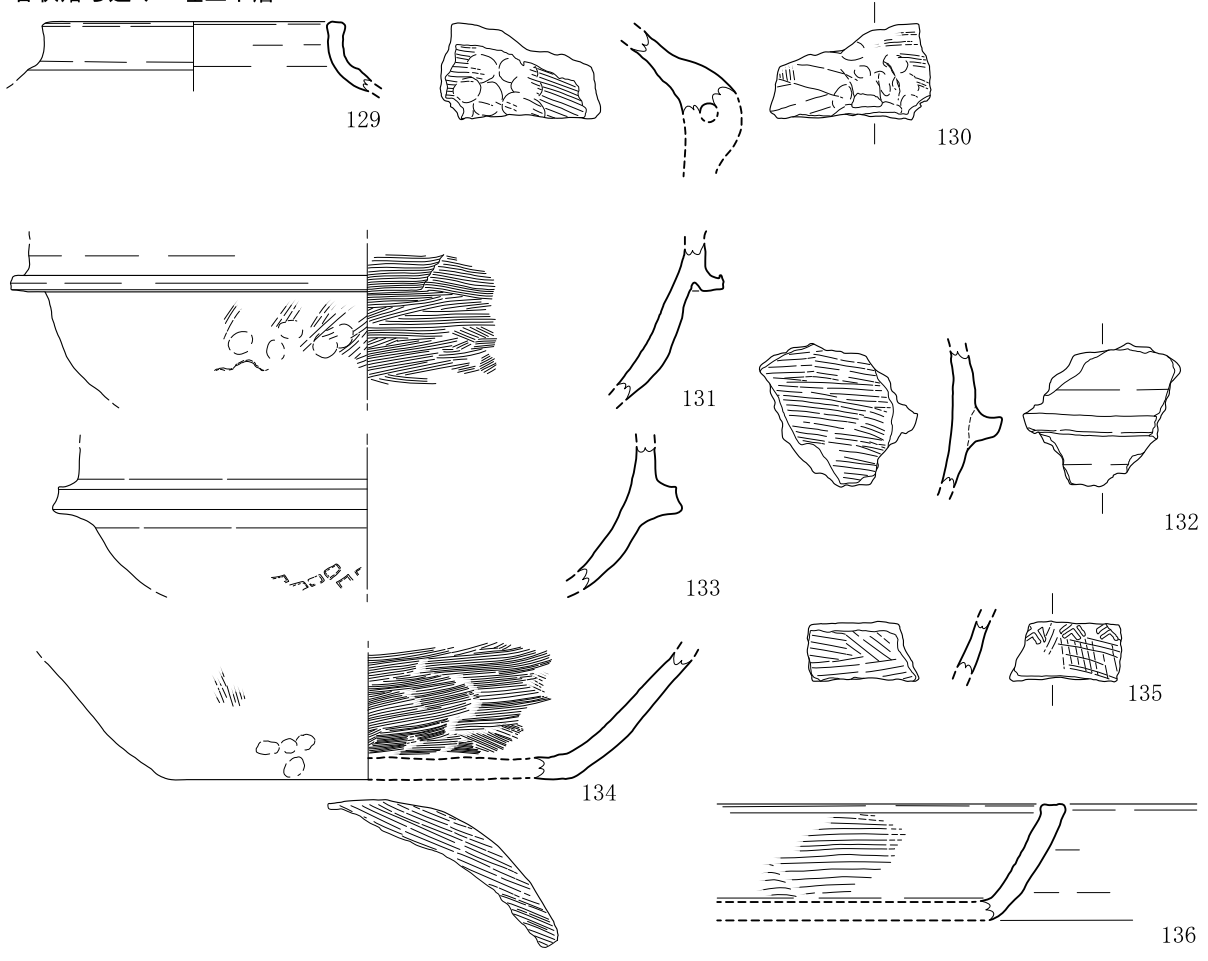


第 32 図 5 地区 出土遺物実測図 (6)

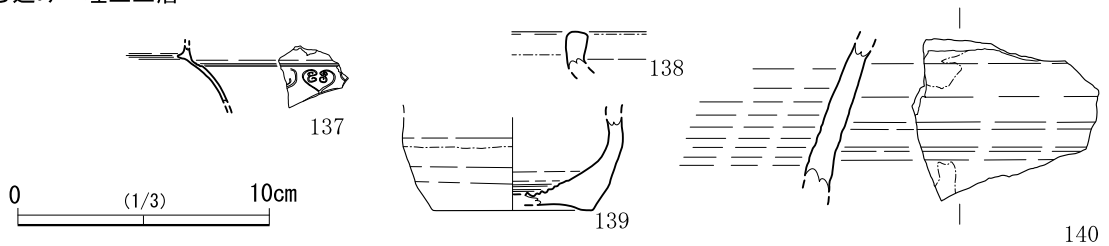
ことから、15 世紀後半に位置づけられ、131・133 が丸底に復元できることから、16 世紀の所産と考えられる。135 は火鉢、136 は焙烙であり、16 世紀の所産である。

137～140 は埋土上層より出土した陶磁器である。137 は陶器茶入と思われ、心葉形のスタンプ文を施した後、外面に朱泥を塗布している。他国産の可能性が高いが、産地を特定できない。138・139 は同一個体の可能性のある唐津焼陶器で、茶入れかと思われる。九州近世陶磁器編年Ⅲ期に類例が認められ、17 世紀の所産と考えられる。140 は陶器甕であり、福建産の可能性が高い。これらは、産地・

谷状落ち込み 埋土下層



谷状落ち込み 埋土上層



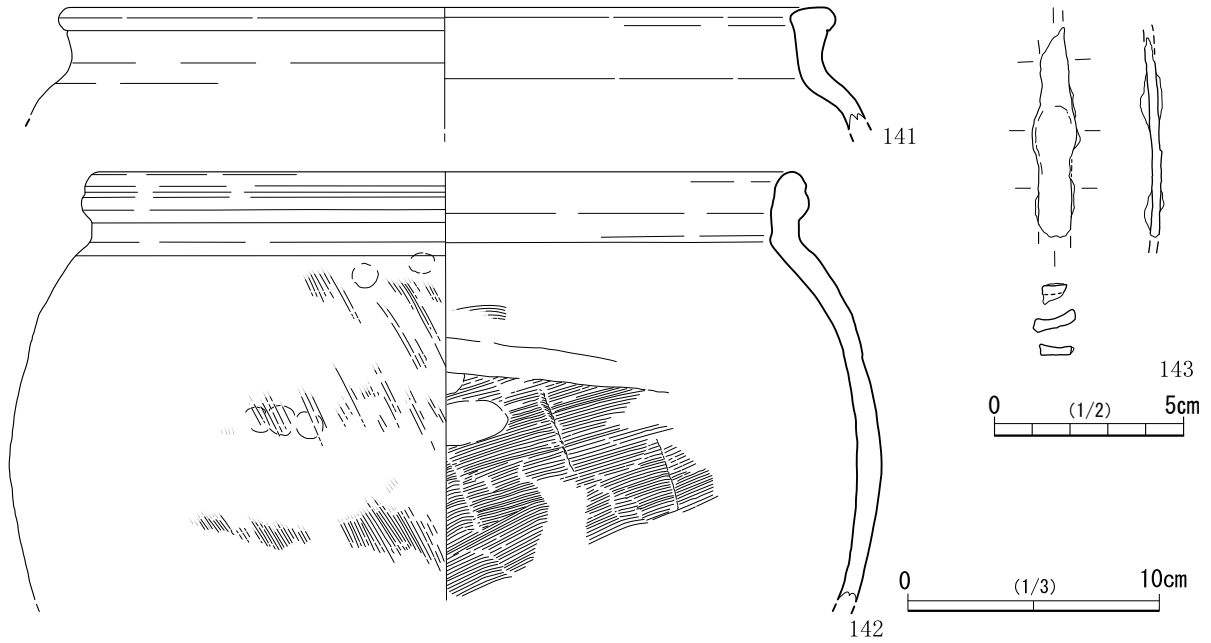
第33図 5地区 出土遺物実測図(7)

時期ともに不確定なものが多く、今後の追検証が必要であるが、少なくとも137～139は埋土下層よりも新しい時期の様相を備えるものである。

141・142は埋土下層より出土した瓦質土器甕もしくは火鉢であり、15世紀後半～16世紀の所産である。143は用途不明の鉄製品である。全体的に沿った形状をなし、中央部でへこむとともに幅広くなっている。

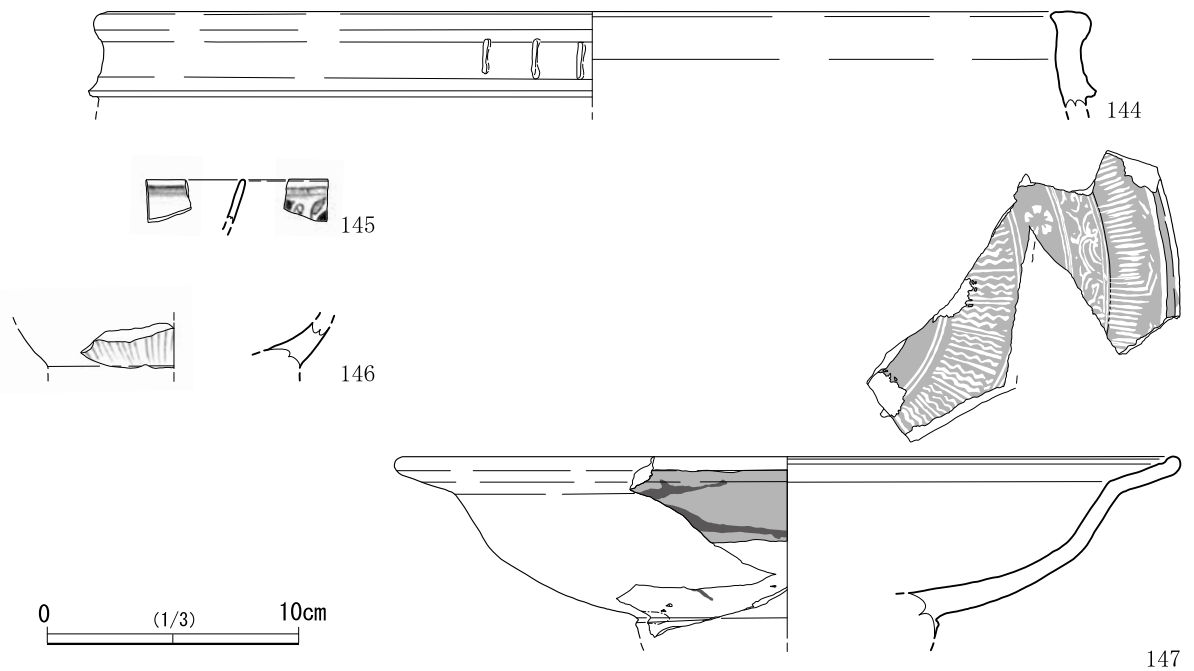
谷状落ち込みの出土遺物を総じてみると、埋土下層が15世紀後半～16世紀のものが主体を占め、埋土上層では17世紀のものが少量ではあるが主体となる。これらは、谷状落ち込みが埋没し始めた頃の時期を示していると考えられ、かつ、近辺の土地利用の主要時期を示しているものとみられる。

谷状落ち込み 埋土下層



第34図 5地区 出土遺物実測図(8)

遺物包含層



第35図 5地区 出土遺物実測図(9)

遺物包含層出土遺物(第35図)

144は瓦質土器火鉢であり、頸部に突線を巡らし、口縁部との間に縦刻み状のスタンプ文を巡らす。145は青花碗であり、内外面に圈線を2条巡らし、外面に花卉文を描く。146は青磁碗であり、線描き蓮弁文を施す。これらは、15世紀後半～16世紀の所産であり、谷状落ち込み埋土下層の出土遺物と同時期のものとなる。

147は三島手の陶器鉢である。内面の象嵌が形骸化しており、17世紀後半～18世紀の所産かと思われる。

## 6 6地区

### (1) 遺構

6地区は標高72.2～72.8mに位置する。基本土層は他地区と同様であるが、中層(第37図5-1～5-8)で氾濫堆積および水成堆積と考えられる層を確認した。いずれも灰～灰褐色で細～中礫が混じる。下層(第37図6-1～6-6)からは黒～灰褐色を基調とした包含層を確認し、細礫～中礫、炭化粒などが混じる。

遺構は柱穴65個、土坑6基、溝2条を検出した。以下、主な遺構を取り上げる。

#### 掘立柱建物

**SB1(第38図)** 調査区南西端に位置する。規模は1間(1.7m)×1間(2.0m)であり、調査区外に延びると推測される。方位はN18°Eである。構成柱穴であるSP12、SP13から土師器杯片が出土した。時期は中世である。

**SB2(第38図)** 調査区南西端に位置する。規模は2間のみで長さ3.3mある。方位はN66°Wである。構成柱穴であるSP18、SP26から土師器片が出土した。時期は中世である。

#### 土坑

**SK1(第39図)** 調査区西側中央付近に位置する。規模は長軸1.4m、短軸1.3m、深さ4～20cmの不整形土坑である。土師器杯がまとまって出土した。出土状況から廃棄されたと推測される。遺構の時期は13世紀後半～14世紀前半である。

**SK6(第39図)** 調査区東に位置する。平面形は円形である。規模は径68cm、深さ15cmである。土師器杯小片が出土した。遺構の時期、性格は不明である。

**SD1(第39図)** 調査区北側に位置し、東西に走行する。溝は西側で一度明瞭でなくなるが、調査区西壁にSD1の痕跡を確認する。規模は長さ10m以上、幅15～40cm、深さ1～16cmである。遺物は土師器小片、瓦質土器片が出土した。遺構の時期は、中世後半以降である。

**SD2(第39図)** 調査区南中央寄りに位置し南北に走行する。規模は長さ1.85m以上、幅51～60cm、深さ5～10cmである。遺物は土師器杯片が出土した。遺構の時期、性格は不明である。

### (2) 遺物

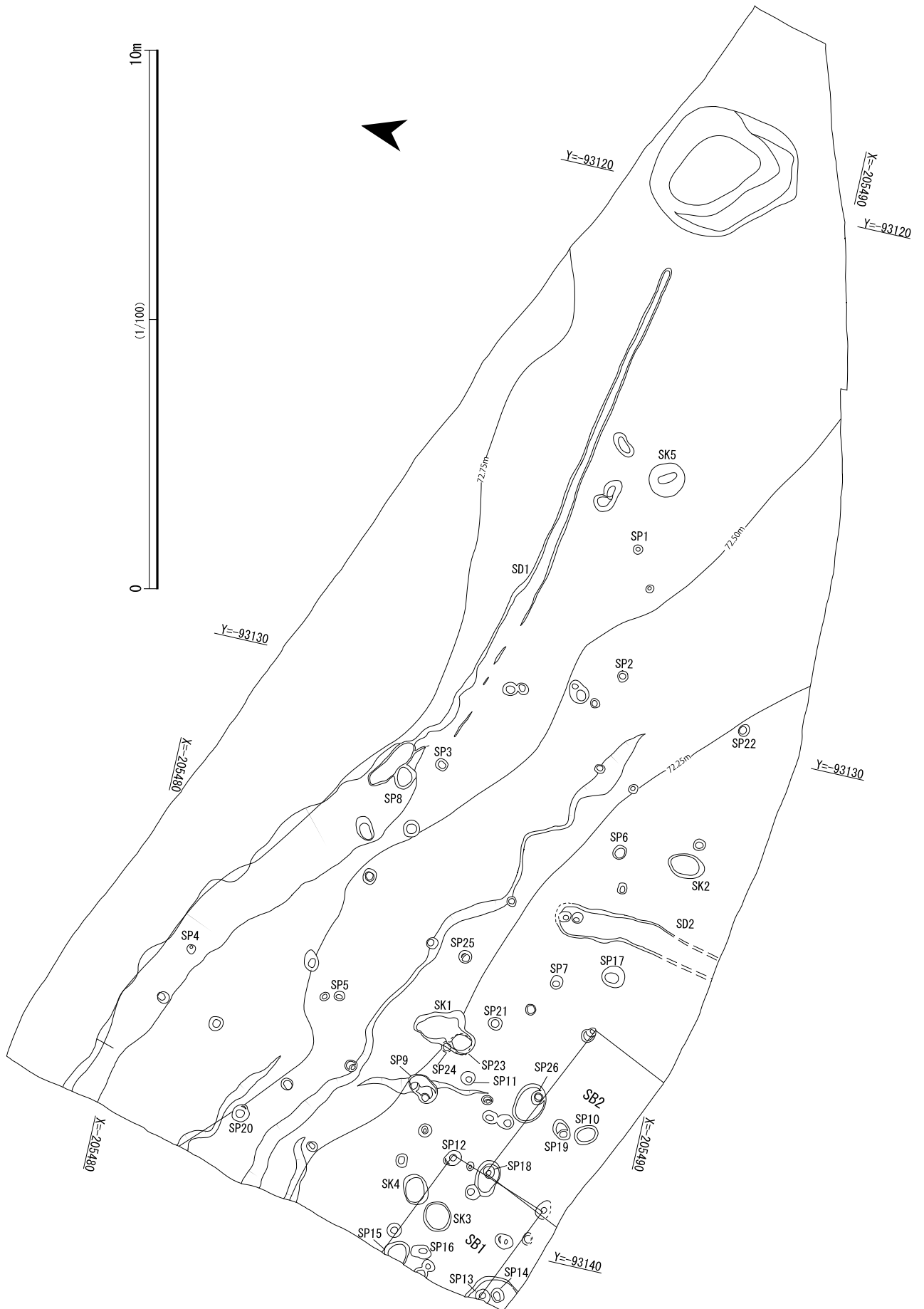
6地区からは主に遺物包含層から13世紀後半～14世紀前半の土器類が出土している。特に、SK1では土師器杯が一括廃棄された状況で検出でき、今回調査の時期を比定するうえでの基準資料となる。

#### 掘立柱建物出土遺物(第40図)

148・149はSB1の構成柱穴SP13より出土した土師器杯である。深い器形のもの(148)と外に開く器形のもの(149)が出土している。両者は、後述するSK1出土のものと同差がなく、13世紀後半～14世紀前半の所産であり、SB1の埋没時期の上限を示す。

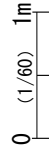
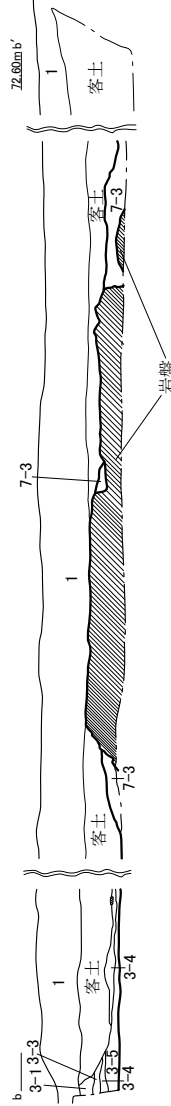
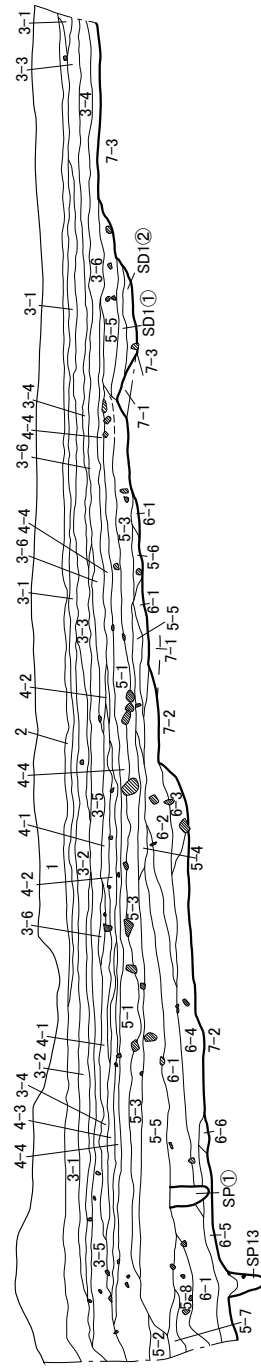
#### 土坑出土遺物(第40図)

150～157はSK1より出土した土師器杯・皿である。杯は湾曲しながら外側に開くタイプ(150～153)、直線的に開き、深い器形のタイプ(154～155)に分けられる。また、前者は白色系で胎土に長石を含み、後者は赤褐色に近い橙色系で胎土に雲母を多量に含む点でも区別される。



第 36 図 6 地区 遺構配置図

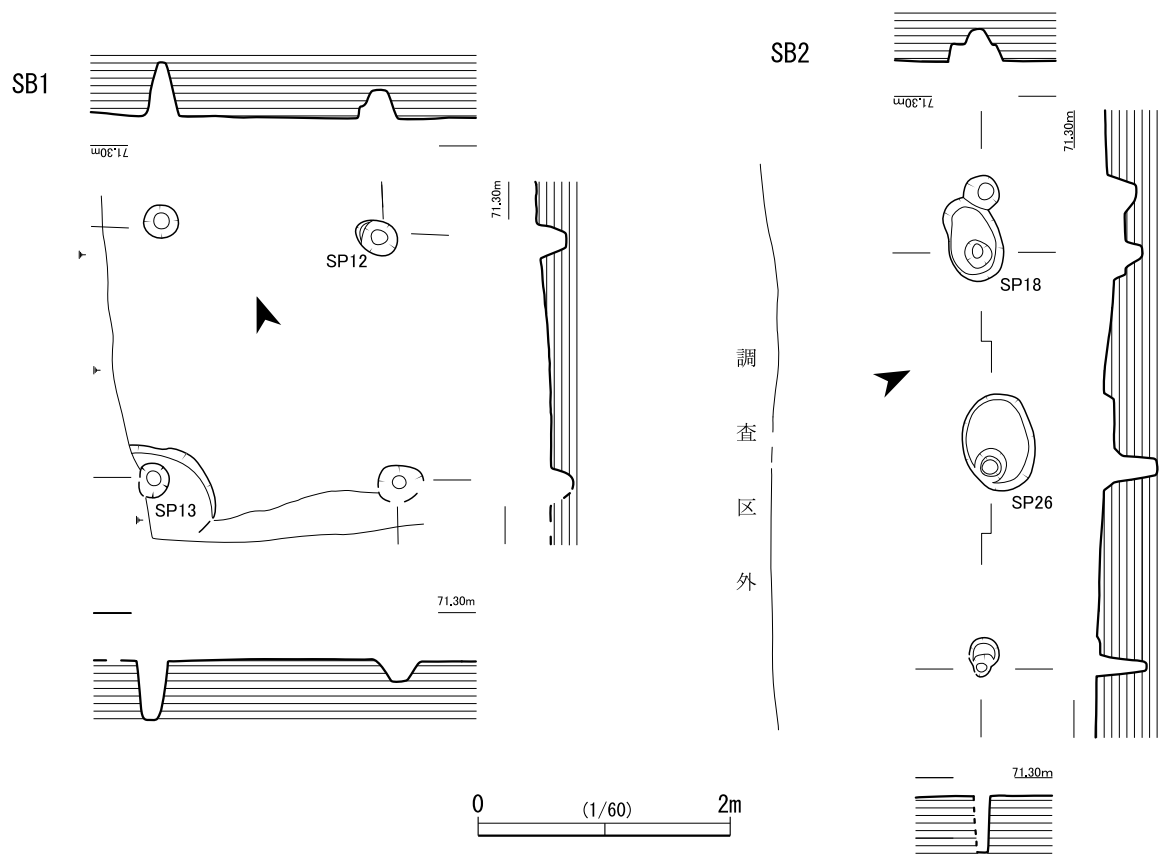
72.60m a'



6地区北・西壁

- |           |  |               |                                    |
|-----------|--|---------------|------------------------------------|
| 1 現耕作土    | Fe沈着                                       | 6-1 包含層・人為的埋土 | 黄灰色(2.5Y5/1~4/1)中礫・細礫混じり砂質土        |
| 2 盤土      |  |               | 黄褐色土ブロック非常に多く含む。土器片含む              |
| 3-1 旧耕作土  | 黄灰色(2.5Y5/1~6/1)中礫混じり砂質土                   | 6-2 包含層・人為的埋土 | 褐灰色(5.5Y4/1)中礫・細礫混じり砂質土            |
| 3-2 旧耕作土  | 黄褐色(2.5Y5/3)中礫混じり砂質土                       |               | 黄褐色土ブロック多く含む。炭化粒・土器片含む             |
| 3-3 旧耕作土  | 黄褐色(2.5Y5/3~5/4)中礫混じり砂質土                   | 6-3 包         | 層 黄褐色土ブロック(10YR3/1~4/1)細礫混じり砂質土    |
| 3-4 旧耕作土  | 黄褐色(2.5Y5/3~5/4)砂質土 中礫少し含む                 |               | 層 黄褐色土ブロック少し含む。炭化粒・土器片含む           |
| 3-5 旧耕作土  | 暗灰黄色(2.5Y5/2~5/1)中礫混じり砂質土                  | 6-4 包         | 層 褐灰色(2.5Y4/1)中礫・細礫混じり砂質土          |
| 3-6 旧耕作土  | 暗灰黄色(2.5Y5/1)細礫混じり砂質土 花崗土ブロック少し含む          |               | 炭化物・土器片含む                          |
| 4-1 盤土    | 黄灰色(2.5Y5/1)砂質土 花崗土ブロック多く含む                | 6-5 包         | 層 黒褐色~褐灰色(10YR3/1~2.5Y4/1)粗砂混じり砂質土 |
| 4-2 旧耕作土  | 灰色(5Y5/1)砂質土 花崗土ブロック少し含む                   |               | 炭化物・土器片含む                          |
| 4-3 旧耕作土  | 灰色(5Y5/1)細砂混じり砂質土                          | 6-6 包         | 層 黒褐色~褐灰色(10YR3/1~2.5Y4/1)粗砂混じり砂質土 |
| 4-4 盤土    | 花崗土ブロック層                                   |               | 炭化物非常に多く含む。土器片含む                   |
| 5-1 氾濫堆積? | 褐灰色(2.5Y4/1~5/1)中礫混じり土。マンガンをわずかに沈着         | 7-1 地         | 山 にぶい褐色(7.5YR5/3)粘土                |
| 5-2       | 灰色(2.5Y5/1~5Y5/1)細礫混じり砂質土 黄褐色土ブロック含む       | 7-2 地         | 山 黄褐色(10YR6/4)粘土                   |
| 5-3 旧耕作土? | 灰色(5Y5/1)細礫混じり砂質土                          | 7-3 地         | 山 明黄褐色(10YR7/6)花崗土 巨礫・大礫含む         |
| 5-4       | 褐灰色(2.5Y4/1~5/1)中礫混じり砂質土 花崗土ブロック含む。マンガンを沈着 | SP①           | 褐灰色(2.5Y4/1)細礫まじり砂質土               |
| 5-5 氾濫堆積? | 灰褐色(2.5Y4/1~5Y4/1)中礫・粗砂混じり土。マンガンを沈着        | SP13          | 黒褐~褐灰色(10YR3/1~4/1)砂質土 やや粘性        |
| 5-6       | 灰色(5Y5/1)細砂~砂質土 花崗土ブロック少し含む                | SD1①          | 別途掲載                               |
| 5-7 水成堆積  | 灰色(5Y5/1~4/1)細砂~砂質土                        | SD1②          | 別途掲載                               |
| 5-8 水成堆積  | 灰色(5Y5/1~4/1)中礫混じり粗砂                       |               |                                    |

第37図 6地区 壁面土層断面図



第 38 図 6 地区 掘立柱建物実測図

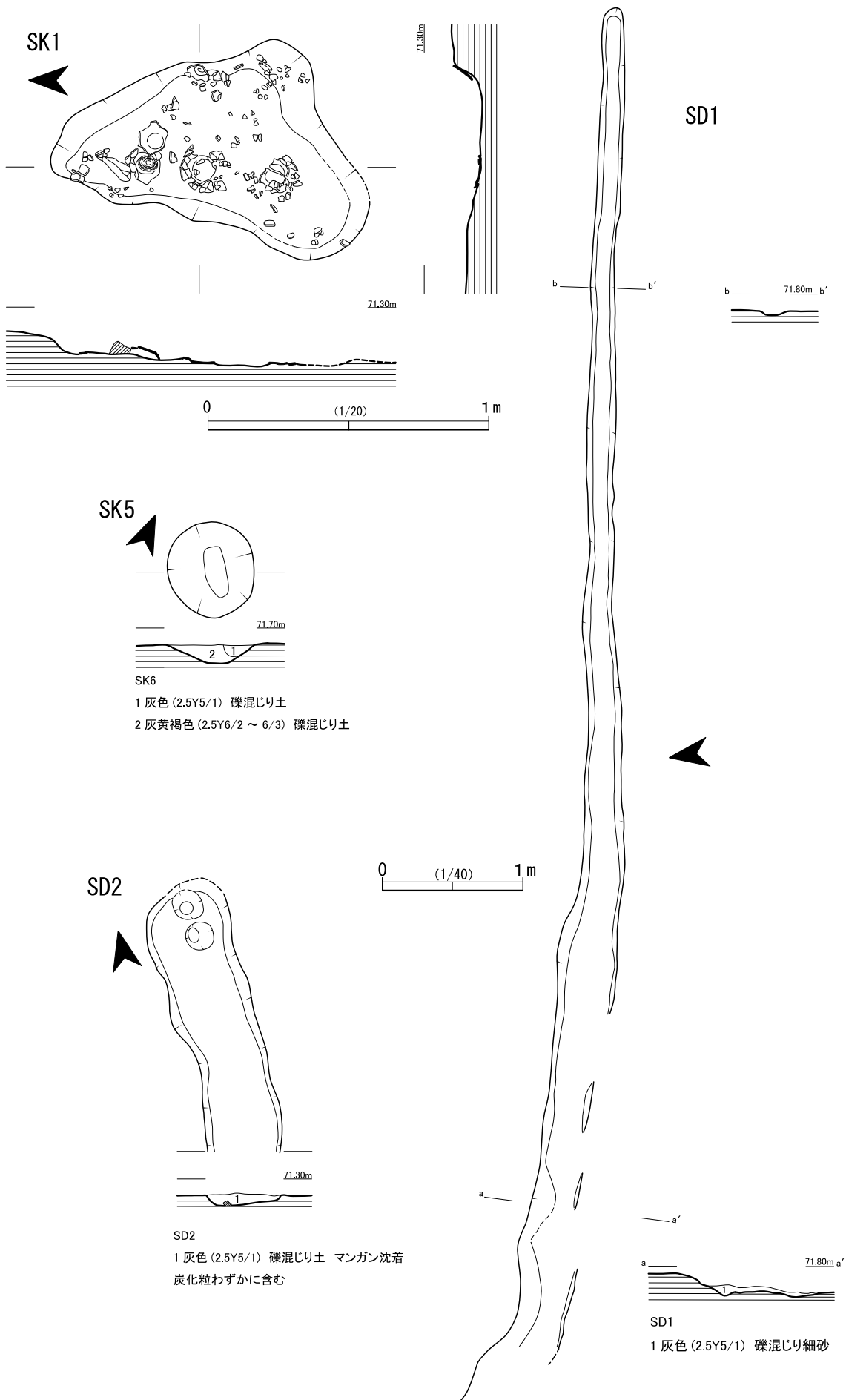
これまでの編年観では、前者が13世紀代、後者が14世紀代に位置づけられているものであるが、両者の破片が絡み合って、層位的な区別のしようがない状況で出土しており、一括廃棄された共伴資料である。13世紀後半の基準資料である本郷遺跡SK15出土土器よりもやや新しい様相を備えることから、13世紀末～14世紀前半に位置づけることが可能である。

158はSK2より出土した土師器杯である。13世紀後半～14世紀前半の所産である。159はSK3より出土した土師器杯である。法量から14世紀後半～15世紀前半に比定できる。160・161はSK4より出土した土師器皿である。器形は13世紀代のものに近いが法量が縮小化している。13世紀末～14世紀前半の所産とみられる。

以上は、各土坑の埋没時期の上限を示している。

#### 柱穴出土遺物（第40図）

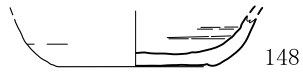
162はSP11より出土した硯である。断面形が垂直でなく、外に少し開く形状をなす。中世後半の所産と考えられる。163～165はSP14から出土した土師器杯である。163は底部と体部の接合面で剥離しており、その剥離面ではハケ目が観察できる。したがって、底部と体部を別作りで成形している。165も断面観察から同様の成形である可能性が高い。いずれも雲母を含み、赤褐色に近い橙色系の色調である。14世紀前半の所産と考える。166・167はSP15より出土した土師器杯である。14世紀前半～中頃の所産と考える。168・169はSP17より出土した土師器杯・皿である。13世紀末～14世紀前半の所産と考える。170・171はSP19より出土した土師器杯・皿である。13世紀末～14世紀前半の所産



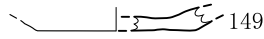
第 39 図 6 地区 土坑・溝実測図



SB1 (SP13)

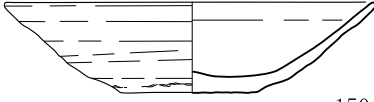


148

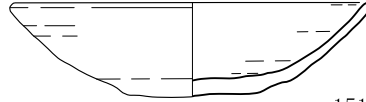


149

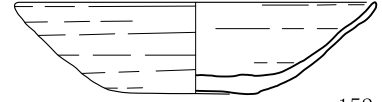
SK1



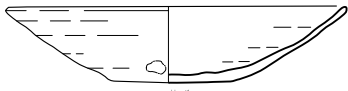
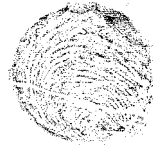
150



151



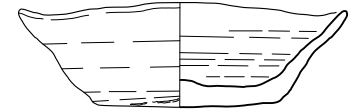
152



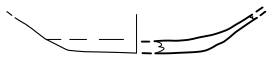
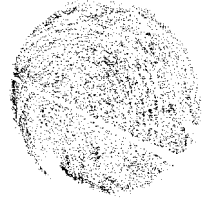
153



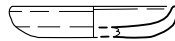
154



155

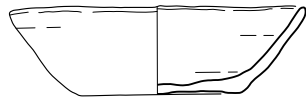


156



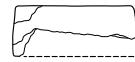
157

SK3



159

SP11



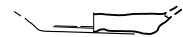
162

SP14



163

SK2

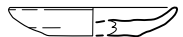


158

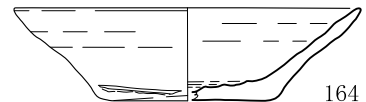
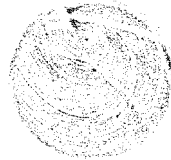
SK4



160

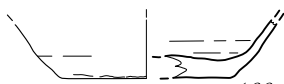


161



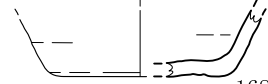
164

SP15



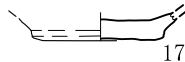
166

SP17

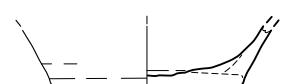


168

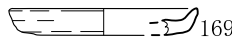
SP19



170



165



169

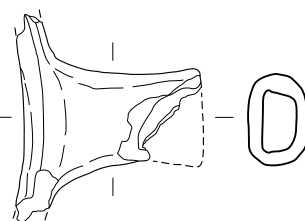


171



167

SD1



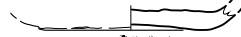
173

SD2

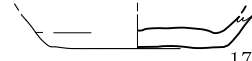


174

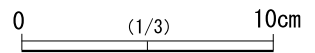
SP20



172

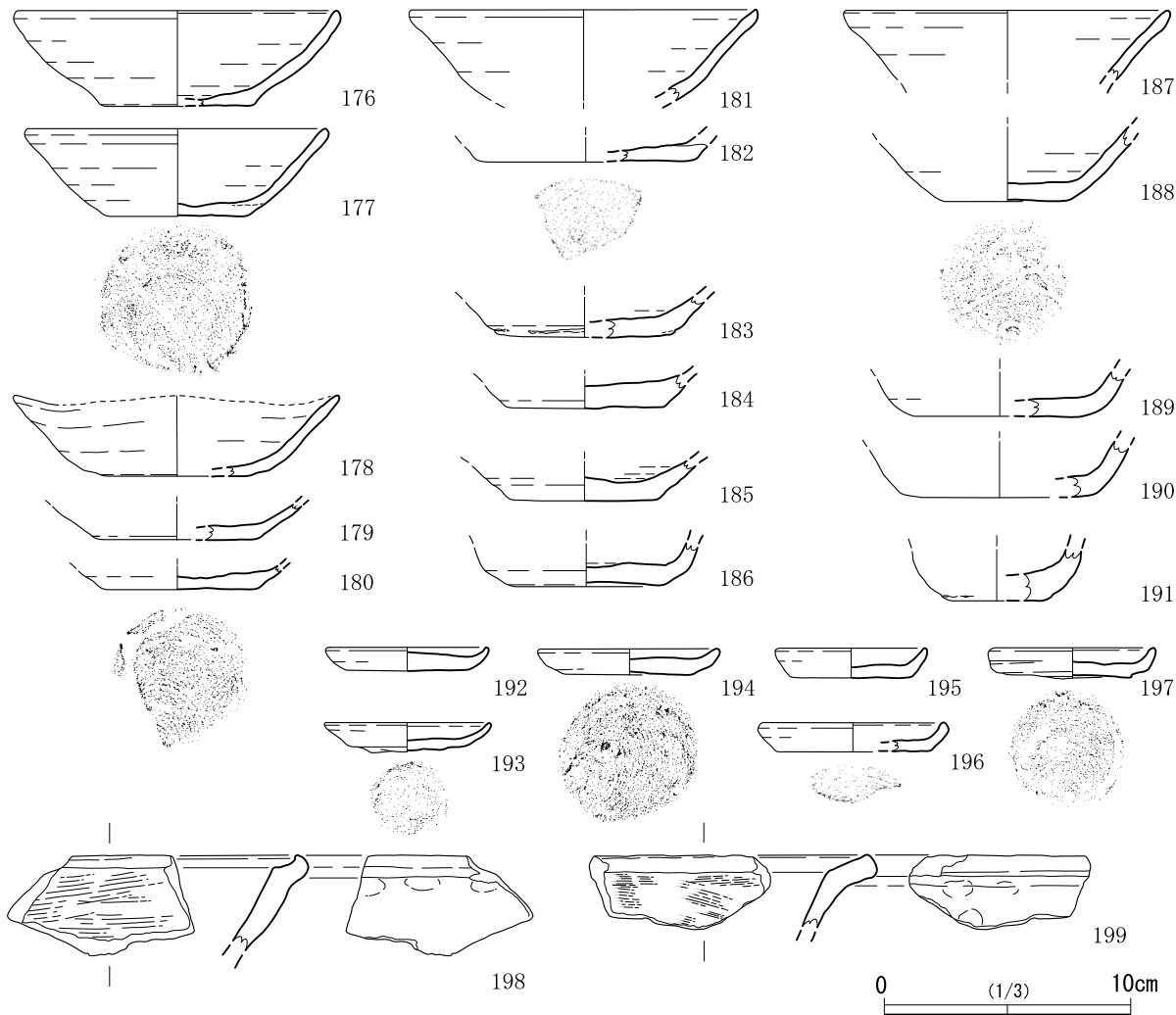


175



第40图 6地区 出土遺物実測図(1)

遺物包含層



第41図 6地区 出土遺物実測図(2)

と考える。172はSP20より出土した土師器杯である。13世紀後半～14世紀前半の所産である。

以上の出土遺物は、それぞれの柱穴の埋没時期の上限を示している。

溝出土遺物(第40図)

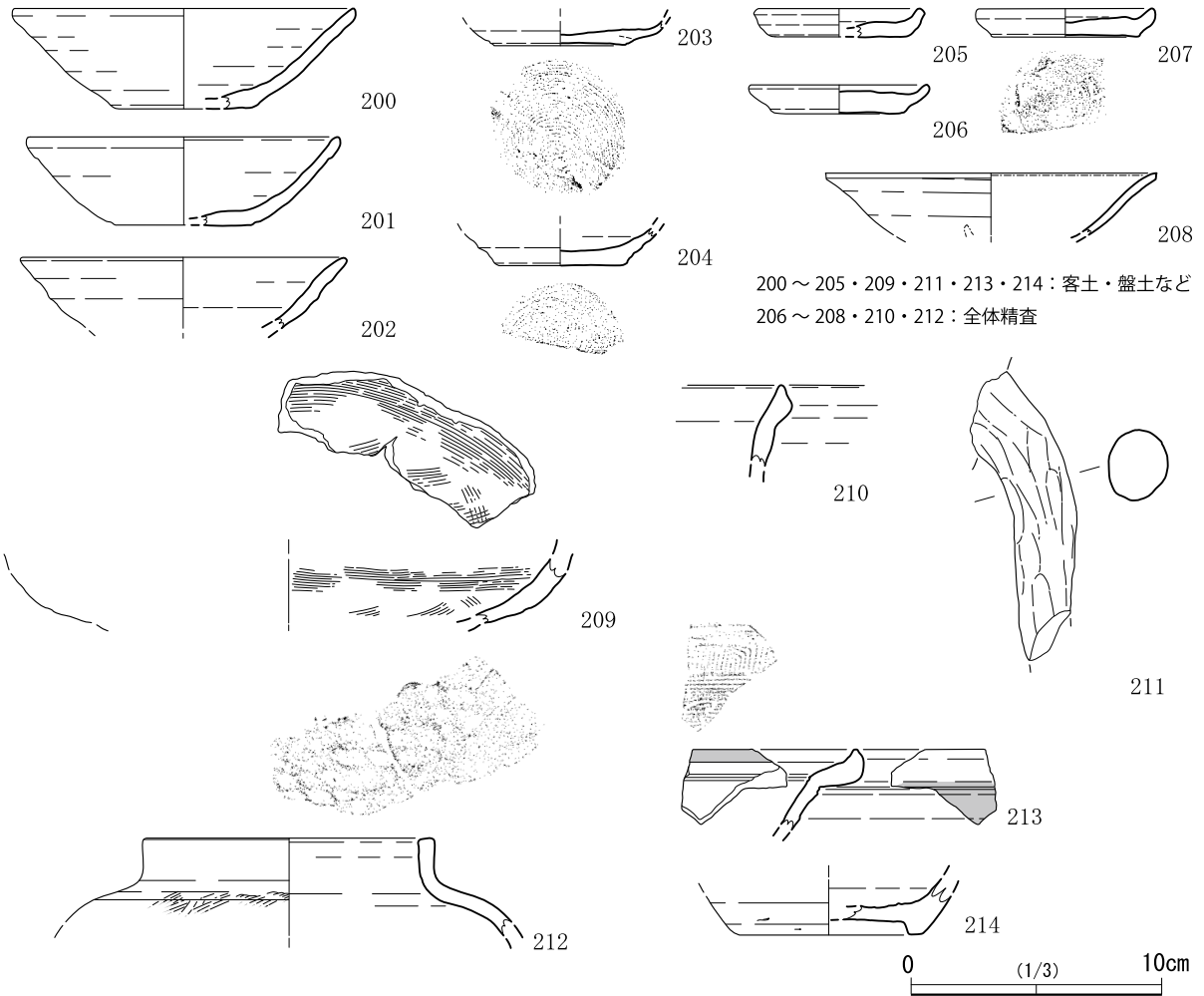
173はSD1より出土した瓦質土器鍋である。把手部の断面形が岩崎分類A1類(外面楕円形・内面長方形)である点では13世紀後半～15世紀前半に比定されるが、口縁部の断面形はⅢ新形式に近く、15世紀後半に比定できる。174・175はSD2より出土した土師器杯である。13世紀後半～14世紀前半の所産である。これらの出土遺物は溝の埋没時期の上限を示している。

遺物包含層出土遺物(第41図)

遺物包含層からは主に13世紀後半～14世紀前半の土師器が出土している。なお、SK1は調査時の便宜上、土坑名を付しているが、基本的に遺物包含層の一部であり、一括してとらえる必要がある。

176～190は土師器杯である。湾曲気味に開く器形のもの(176～181)、直線的に開くと思われるもの(187～190)がある。底部は薄手のもの(177～180・182)、厚手のもの(183～185)、体部まで均質的なもの(186・188～190)があり、湾曲気味に開く器形と薄手の底部の相関関係が高い。また、177・182は断面観察から底部と体部は別作りの可能性がある。SK1同様、13世紀末から14世紀前半

遺構外



第 42 図 6 地区 出土遺物実測図 (3)

の所産と考える。

土師器皿も湾曲気味に開く器形 (192～194)、直線的に開く器形 (195～197) がある。全体的に浅い器形であり、13世紀末～14世紀前半の所産と考える。

198・199は土師質土器鍋である。両者とも西長門型の可能性が高く、199は13世紀後半の所産と思われる。198は同時期かやや下るかもしれない。

これらは、遺物包含層の形成時期を示すとともに、6地区および近辺の居住域の存続時期を示す。

遺構外出土遺物 (第42図)

土師器杯 (200～204)、土師器皿 (205～207) は客土・盤土からの出土であるが、本来、遺物包含層に属する可能性が高い。13世紀末～14世紀前半の所産である。208は白磁鉢であり、口縁部は口禿げである。大宰府分類Ⅸ類 (14世紀) であり、これも本来遺物包含層に属する可能性が高い。

209～211は瓦質土器足鍋である。このうち、210は岩崎編年Ⅲ古もしくはⅢ新型式であり、15世紀中頃～後半の所産である。212は瓦質土器湯釜である。15世紀後半～16世紀の所産である。これらは本来、遺物包含層を切り込んで形成される柱穴の存続時期に関わるものと考えられ、かつ、中世後半と推定される硯が出土したSP11とも対応するものではないかと考える。

第2表 遺物観察表  
土器・陶磁器観察表

挿 図	図 版	Na	地 区	遺構番号	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内) (外)	主な調整 (内) (外)	備 考
							口径	底径	器高					
							(復元値)	(復元値)	(残存値)					
8	19	1	1	SP1	瓦質土器	播鉢	-	-	(5.45)	粗 長石 石英	やや良	黒色、灰黄褐色 にぶい橙色	ハケ オサエ、ナデ	5条卸目
8	-	2	1	SD1 下層	土師器	杯	(14.0)	-	(2.2)	密 長石	不良	浅黄褐色 浅黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	
8	-	3	1	SD1 上面	土師器	杯	-	(6.0)	(0.8)	密 長石	良	にぶい橙色 にぶい橙色、橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り 板目圧痕
8	19	4	1	SD1 下層	土師器	皿	7.0	6.0	1.0	密 長石 石英	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部摩滅
8	19	5	1	SD1 下層	土師器	皿	6.9	5.9	0.8	密 長石	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
8	19	6	1	SD1	青磁	碗	-	-	(5.0)	密	良		回転ナデ 回転ヘラケズリ	13c 前半～中頃
8	19	7	1	SD1	白磁	皿	(9.2)	-	(2.05)	密	良		回転ナデ 回転ヘラケズリ	
8	19	8	1	SD1	瓦質土器	鍋	(35.0)	-	(5.0)	密 長石 石英	不良	浅黄褐色、にぶい橙色 浅黄褐色、黄灰色	ハケのちナデ、横ナデ ハケのちナデ、横ナデ	
8	-	9	1	SD1 上面	瓦質土器	鍋	-	-	(2.2)	密 長石	やや良	にぶい橙色、浅黄褐色 にぶい橙色	ハケのち横ナデ ハケのち横ナデ	
8	19	10		表採	陶器	甕	(19.0)	-	(3.6)	密	良		回転ナデ 回転ナデ	常滑焼 13c 後
8	19	11	1	遺構検出	瓦質土器	足鍋 脚部	-	-	(6.2)	粗 長石	不良	灰白色 灰白色	ナデ オサエ、ナデ、格子タタキ	接合面で剥離
8	19	12	1	遺構検出	陶器	鉢	-	(9.5)	(4.0)	密	良		回転ナデ 回転ヘラケズリ	深川焼 薬灰釉 底部に亀裂
12	-	14	2	SK11	土師器	杯	-	(6.0)	(0.9)	密 長石 雲母	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
12	-	15	2	SK19	土師器	杯	-	(6.6)	(1.15)	密 長石 石英	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
12	-	16	2	S P 21	土師器	皿	(6.0)	(5.0)	(0.75)	密 長石 雲母	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
12	19	17	2	遺構検出	青磁	碗	-	-	(2.5)	密	良		回転ナデ 回転ヘラケズリ	口縁内面に2条圈線 鍋蓮弁文?
12	-	18	2	遺構検出	青磁	碗	-	-	(2.3)	密	良		回転ナデ 回転ヘラケズリ	鍋蓮弁文 13c
12	19	19	2	客土	青磁	碗	-	(4.6)	(3.5)	密	良		回転ナデ 回転ヘラケズリ	鍋蓮弁文 12c 末～13c 初
12	-	20	2	遺構検出	瓦質土器	足鍋 もしくは鍋	(28.0)	-	(4.8)	密 長石	良	灰色 暗灰色	ハケのち横ナデ ハケのち横ナデ	外面煤付着
12	-	21	2	遺構検出	瓦質土器	播鉢	(30.0)	-	(3.8)	密 長石 石英	良	黒色、黒褐色 暗灰色	ハケのち横ナデ ハケのち横ナデ、オサエ	
16	-	22	3	SK1	土師器	杯	-	(5.3)	(0.5)	密 長石	良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
16	-	23	3	SK2	土師器	皿	(7.85)	(5.95)	1.2	密	良	暗灰色 暗灰色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
16	20	24	3	SP1	瓦質土器	播鉢	(37.0)	(19.2)	11.3	密 長石 石英	良	灰白色 灰白色、灰色	ハケ オサエ、ハケのちナデ	5条卸目 板目圧痕
16	-	25	3	SP13	土師器	杯	-	(7.0)	(1.3)	密 長石	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り 板目圧痕?
16	20	26	3	SP39	土師器	杯	(12.4)	(6.0)	4.0	密 長石 雲母	良	橙色 橙色	回転ナデ (ロクロ目残る) 回転ナデ	回転糸切り 油煙付着? 底部内面ロクロ目顕著
16	20	27	3	SP39	土師器	杯	-	(6.0)	(2.0)	密 長石	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
16	-	28	3	SP39	土師器	杯	-	(5.7)	(1.3)	密 長石 雲母	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
16	20	29	3	SP39	土師器	杯	-	(5.8)	(1.2)	密 長石 雲母	良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
16	-	30	3	SP39	土師器	杯	-	(7.0)	(0.95)	密雲母多量 長石	良	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
16	-	31	3	SP39	土師器	杯	-	(6.6)	(1.75)	密 長石 雲母	やや良	にぶい黄褐色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
16	-	32	3	SP39	土師器	杯	(14.4)	-	(3.4)	密	やや良	浅黄褐色 浅黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	
16	20	33	3	SP39	土師器	杯	-	(6.6)	(2.05)	粗 雲母 長石	良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
16	20	34	3	SP39	土師器	杯	-	(8.0)	(2.95)	密 長石 雲母	良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
16	20	35	3	SP39	土師器	皿	6.8	5.5	0.9	密 長石	良	浅黄褐色 浅黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
16	-	36	3	SP39	土師器	皿	(7.0)	(5.8)	0.9	密 長石 雲母	良	橙色 橙色	回転ナデ、ナデ 回転ナデ	回転糸切り
16	20	37	3	SP39	土師器	皿	(8.2)	(5.8)	2.3	密 長石 雲母	やや良	橙色、褐灰色 褐色、褐灰色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り 油煙付着
16	-	38	3	SP42	土師器	杯	-	(6.0)	(1.0)	密 長石	やや良	灰黄色 灰黄色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
16	20	39	3	SP44	土師器	杯	-	(5.4)	(1.05)	密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り 油煙付着
16	-	40	3	SP45	土師器	杯	-	(7.5)	(1.3)	密 長石	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
17	-	41	3	遺構検出	土師器	杯	-	(6.6)	(1.0)	密 長石 雲母	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
17	-	42	3	遺構検出	土師器	皿	(7.4)	(5.8)	1.1	密 長石	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り

挿図	図版	No.	地区	遺構番号	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内) (外)	主な調整 (内) (外)	備考
							口径	底径	器高					
							(復元値)	(復元値)	(残存値)					
17	20	43	3	遺構検出	土師質土器	鍋	-	-	(4.6)	粗	やや良	浅黄褐色 浅黄褐色	ハケのちナデ、横ナデ ハケのちナデ、横ナデ	
17	20	44	3	耕土	土師質土器	鍋	(33.0)	-	(4.4)	粗 長石 石英	やや良	浅黄褐色 浅黄褐色	ハケのちナデ ハケのちナデ、オサエ	
17	20	45	3	客土	土師質土器	鍋	(33.0)	-	(6.85)	密 長石 石英	やや良	橙色、明褐色、灰黄褐色 灰褐色	オサエ、ハケ、横ナデ オサエ、ハケ、横ナデ	外面煤付着
17	-	46	3	客土	土師質土器	鍋	(34.0)	-	(5.3)	粗 長石 石英	やや良	にぶい黄褐色 灰黄褐色、橙色	ハケのちナデ ハケのちナデ	
17	20	47	3	遺構検出	土師質土器	鍋	-	(19.5)	(5.4)	密 長石 石英	やや良	にぶい黄褐色 灰黄褐色	オサエのちハケ オサエのちハケ	外面煤付着
17	20	48	3	表採	陶器	行平鍋蓋	-	-	(2.0)	密	良		回転ナデ 回転ヘラケズリ	瀬戸美濃系
17	20	49	3	耕土	陶器	椀	-	(3.7)	(1.7)	密	良		回転ナデ 回転ヘラケズリ	肥前系 白化粧土 外底面砂目
22	20	50	4	SK3	土師器	杯	-	(4.8)	1.1	密 長石 石英	やや良	浅黄褐色、にぶい黄褐色 淡褐色、浅黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
22	-	52	4	SD1 北	土師器	杯	-	(7.0)	1.05	密 長石 石英	やや良	橙色 橙色	ハケのちナデ? 回転ナデ	回転糸切り?
22	20	53	4	SD1 南	土師器	皿	(6.0)	(4.0)	0.9	密 長石	良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
22	20	54	4	SD1 南	瓦質土器	不明	-	-	(2.2)	粗 長石	良	灰白色 灰白色	横ナデ 横ナデ	頸部に突線 須恵質に近い
27	-	55	5	SB1 (SP47)	土師器	杯	-	(6.4)	(0.9)	密 雲母 長石	良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
27	21	56	5	SK1	土師器	杯	(16.6)	(7.4)	2.5	密 長石 石英	やや良	浅黄褐色、にぶい黄褐色 浅黄褐色、灰黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
27	21	57	5	SK1	瓦質土器	捏鉢	-	(14.8)	(2.1)	粗	やや良	灰白色 灰白色	横ナデ、ハケ、オサエ オサエのちナデ	板目圧痕
28	22	63	5	SP5	土師器	皿	(6.0)	(5.0)	(1.0)	粗雲母多量 長石	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
28	22	64	5	SP15	瓦質土器	搦鉢	-	-	(7.4)	密 長石 石英	不良	灰色、暗灰色、灰白色 灰色、暗灰色、灰白色	ハケ ナデ?	8条卸目
28	-	65	5	SP17	瓦質土器	搦鉢	(34.0)	-	(3.0)	密	やや良	灰白色、灰色 灰白色、灰色	ハケ、横ナデ ナデ?、横ナデ	
28	22	66	5	SP21	土師器	皿	(6.6)	(4.9)	1.0	密	良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
28	-	69	5	SP42	土師器	皿	(6.2)	(5.2)	0.8	密 雲母	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部摩滅
28	22	70	5	SP42	土師器	皿	(5.6)	(5.0)	1.4	密 雲母	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
28	22	71	5	SP42	土師器	皿	(7.0)	(6.0)	1.05	密 雲母	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
28	22	72	5	SP42	土師器	皿	(7.0)	(6.0)	1.0	密 長石 雲母	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部摩滅
28	22	73	5	SP43	土師器	皿	5.9	4.8	1.5	密 長石 雲母	良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り 歪み大
28	22	74	5	SP43	瓦質土器	鍋	(34.0)	-	(5.0)	密 長石 石英	やや良	灰白色、灰色 にぶい橙色	ハケのち横ナデ 格子タタキ、横ナデ	外面煤付着
28	-	75	5	SP45	土師器	皿	(5.8)	(5.0)	0.75	密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
28	22	76	5	SP46	土師質土器	鍋	(34.0)	-	(7.4)	密 長石 石英	やや良	浅黄褐色、にぶい黄褐色 浅黄褐色、にぶい黄褐色	ハケのちナデ、横ナデ ハケのちナデ、横ナデ	
28	-	77	5	SP49	土師器	杯	(12.6)	-	(2.3)	密 雲母 長石	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	
28	-	78	5	SP51	土師器	杯	-	(6.0)	(0.9)	密 雲母 長石	良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
28	-	79	5	SP62	土師器	皿	(6.0)	(5.0)	1.9	密 雲母 長石	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	
28	23	80	5	SD1 東側	青花	椀	-	-	(2.3)	密	良		回転ナデ 回転ヘラケズリ	花卉文
28	-	81	5	SD1 東側	瓦質土器	鍋	-	-	(3.1)	密	不良	灰色、灰白色 灰色、灰黄褐色	ハケのちナデ、横ナデ ハケのちナデ、横ナデ	
28	-	82	5	SD1 西側	白磁	鉢	(13.2)	-	(2.2)	密	良		回転ナデ 回転ヘラケズリ	16c ~
29	22	84	5	谷状落ち込み 埋土下層	土師器	杯	-	(5.0)	(0.9)	密 石英	良	浅黄褐色 浅黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
29	-	85	5	谷状落ち込み 埋土下層	土師器	杯	-	-	(3.2)	密 石英	良	浅黄褐色、橙色 浅黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	84と同一個体の 可能性高い
29	-	86	5	谷状落ち込み 埋土下層	土師器	杯	-	(5.2)	(1.3)	密	良	にぶい黄褐色 浅黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
29	-	87	5	谷状落ち込み 埋土下層	土師器	杯	-	(5.4)	(1.2)	密 長石	良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
29	-	88	5	谷状落ち込み 埋土下層	土師器	皿	(6.1)	(5.2)	1.9	密	良	灰白色 灰白色	回転ナデ 回転ナデ	
29	23	89	5	谷状落ち込み 埋土下層	青花	椀	(14.8)	-	(3.6)	密	良		回転ナデ 回転ヘラケズリ	中国産 16c
29	23	90	5	谷状落ち込み 埋土下層	青花	椀	-	-	(1.3)	密	良		回転ナデ 回転ヘラケズリ	景徳鎮産 芭蕉葉文
29	23	91	5	谷状落ち込み 埋土下層	青花	椀	-	(3.7)	(1.95)	密	良		回転ナデ 回転ヘラケズリ	景徳鎮産 16c 後
29	23	92	5	谷状落ち込み 埋土下層	青花	椀	-	(4.4)	(1.55)	密	良		回転ナデ 回転ヘラケズリ	花卉文 (永) 保長春 16c 後
29	23	93	5	谷状落ち込み 埋土下層	青花	皿	-	(5.7)	(1.6)	密	良		回転ナデ 回転ヘラケズリ	景徳鎮産 16c

挿図	図版	No	地区	遺構番号	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内) (外)	主な調整 (内) (外)	備考
							口径	底径	器高					
							(復元値)	(復元値)	(残存値)					
29	23	94	5	谷状落ち込み埋土下層	青磁	椀	-	(49)	(1.3)	密	良		回転ナデ 回転ヘラケズリ	龍泉窯系 内面釉剥ぎ 12c 末～13c 前
29	23	95	5	谷状落ち込み埋土下層	白磁	皿	(18.8)	-	(3.0)	密	良		回転ナデ 回転ヘラケズリ、回転ナデ	広東産か 15～16c
29	23	96	5	谷状落ち込み埋土下層	白磁	皿	(12.5)	(7.2)	2.8	密	良		回転ナデ 回転ヘラケズリ	中国産 15c 末～16c
29	-	97	5	谷状落ち込み埋土下層	白磁	皿	-	(8.9)	(1.9)	密	良		回転ナデ 回転ヘラケズリ	中国産 15～16c
29	23	98	5	谷状落ち込み埋土下層	陶器	皿	-	(7.7)	(2.5)	密	良		回転ナデ 回転ヘラケズリ	産地不明
29	23	99	5	谷状落ち込み埋土下層	陶器	椀	(10.6)	-	(4.6)	密	良		回転ナデ 回転ヘラケズリ	信楽焼混入の可能性あり
29	23	100	5	谷状落ち込み埋土上層	磁器 染付	椀	(11.35)	-	(2.75)	密	良		回転ナデ 回転ヘラケズリ	17c 前半
29	23	101	5	谷状落ち込み埋土上層	陶器	椀	-	-	(5.0)	密	良		回転ナデ 回転ヘラケズリ	初期唐津
30	-	102	5	谷状落ち込み埋土下層	土師質土器	鍋	(27.6)	-	(3.5)	密 石英	良	灰白色 灰白色	ハケ、横ナデ 横ナデ、オサエ	
30	24	103	5	谷状落ち込み埋土下層	瓦質土器	鍋	(25.0)	-	(3.6)	密	良	灰色 黒色	ハケのちナデ、横ナデ ハケのちナデ、横ナデ	外面煤付着
30	24	104	5	谷状落ち込み埋土下層	瓦質土器	鍋	(23.2)	-	(3.0)	密 石英	良	浅黄橙色 浅黄橙色	ハケのち横ナデ 横ナデ	
30	24	105	5	谷状落ち込み埋土下層	瓦質土器	鍋もしくは足鍋	(24.0)	-	(3.4)	粗	良	灰白色 灰白色	ハケのち横ナデ オサエ、横ナデ	
30	-	106	5	谷状落ち込み埋土下層	瓦質土器	鍋もしくは足鍋	(24.0)	-	(3.1)	密	良	灰色 灰色	横ナデ 横ナデ	
30	24	107	5	谷状落ち込み埋土下層	瓦質土器	足鍋 もしくは鍋	(27.2)	-	(3.0)	粗	良	灰色 暗灰色	横ナデ 横ナデ	
30	-	108	5	谷状落ち込み埋土下層	瓦質土器	足鍋	(24.0)	-	(3.4)	密	良	灰色 灰色	横ナデ 横ナデ	
30	24	109	5	谷状落ち込み埋土下層	瓦質土器	足鍋	(24.0)	-	(3.1)	密 長石	不良	暗灰色 灰色	横ナデ ハケのち横ナデ	
30	-	110	5	谷状落ち込み埋土下層	瓦質土器	足鍋 もしくは鍋	(25.6)	-	(6.1)	密	良	暗灰色、灰色 暗灰色、明黄褐色	ハケのち横ナデ ハケのち横ナデ	
30	-	111	5	谷状落ち込み埋土下層	瓦質土器	足鍋 脚部	-	-	(5.8)	粗 長石 石英	良	灰色 灰白色	ハケ ナデ、オサエ	
30	24	112	5	谷状落ち込み埋土下層	瓦質土器	足鍋 脚部	-	-	(10.0)	密	良	灰色 灰黄色	ハケ、ナデ ハケのちナデ、オサエ	
30	24	113	5	谷状落ち込み埋土下層	瓦質土器	足鍋 脚部	-	-	(10.5)	粗	やや良	灰白色 灰白色	ハケ、オサエ ナデ、オサエ	
30	24	114	5	谷状落ち込み埋土下層	瓦質土器	足鍋 脚部	-	-	(8.5)	密 長石	良	暗灰色、灰色 暗灰色、灰色	ハケのちナデ オサエ、ナデ	
30	24	115	5	谷状落ち込み埋土下層	瓦質土器	足鍋 脚部	-	(9.9)	-	密	良	暗灰色 灰白色	ハケのちナデ ハケのちナデ	外面煤付着
30	24	116	5	谷状落ち込み埋土下層	瓦質土器	足鍋 脚部	-	-	(12.3)	密 長石	良	灰白色、暗灰色 灰白色、暗灰色	ハケのちナデ オサエのちナデ	
31	24	117	5	谷状落ち込み埋土上層	土師質土器	鍋	(28.0)	-	(5.0)	密 長石	良	淡黄色 灰黄褐色	ナデ、横ナデ オサエのちナデ、横ナデ	外面煤付着
31	24	118	5	谷状落ち込み埋土上層	瓦質土器	足鍋	(24.0)	-	(7.3)	密 長石	良	灰白色、灰色 灰色	ハケのちナデ、横ナデ オサエのちナデ、横ナデ	外面煤付着
31	24	119	5	谷状落ち込み埋土包含層	瓦質土器	足鍋	(26.0)	-	(10.4)	密	良	灰色 灰色	ハケ、横ナデ ハケ、横ナデ、タタキ?	
31	-	120	5	谷状落ち込み埋土上層	瓦質土器	足鍋	-	-	(2.7)	密 長石 石英	良	灰色、暗灰色 暗灰色、灰白色	ハケ オサエ、ナデ、格子タタキ	
32	25	121	5	谷状落ち込み埋土下層	瓦質土器	播鉢	(31.6)	-	(3.3)	密	良	橙色、灰黄色 橙色、灰黄色	ハケのち横ナデ 横ナデ	煤・被熱痕
32	25	122	5	谷状落ち込み埋土下層	瓦質土器	播鉢	(31.0)	12.2	(11.5)	粗	良	灰色 灰色	ハケ、横ナデ ナデ	7条卸目 板目圧痕
32	-	123	5	谷状落ち込み埋土下層	瓦質土器	播鉢	-	(15.0)	(2.3)	密	良	灰白色、灰色 灰白色、灰色	不明 ナデ	9条卸目
32	-	124	5	谷状落ち込み埋土下層	瓦質土器	播鉢	-	-	(3.5)	密	良	灰色 灰白色	ハケ ナデ	7条卸目
32	-	125	5	谷状落ち込み埋土下層	瓦質土器	播鉢	-	(16.4)	(3.3)	密 長石	やや良	灰白色、灰色 灰白色、灰色	ハケ ナデ	7条卸目
32	-	126	5	谷状落ち込み埋土上層	瓦質土器	播鉢	(31.0)	-	(3.1)	密 長石 石英	良	灰黄色 灰黄色	ハケのち横ナデ 横ナデ	
32	25	127	5	谷状落ち込み埋土上層	瓦質土器	播鉢	(31.0)	-	(3.6)	密 長石 石英	やや良	灰白色、灰色 灰白色、灰色	横ナデ ハケ、横ナデ	
32	25	128	5	谷状落ち込み埋土上層	瓦質土器	播鉢	-	-	(3.4)	密 長石	良	灰色 灰色	ハケ ナデ	
33	25	129	5	谷状落ち込み埋土下層	瓦質土器	湯釜	(11.7)	-	(2.8)	密	やや良	灰色 灰色	横ナデ 横ナデ	
33	25	130	5	谷状落ち込み埋土下層	瓦質土器	湯釜 把手部	-	-	(3.4)	粗	やや良	灰白色 不明(煤付着)	ハケのちオサエ ハケのちオサエ、ナデ	内面が煮沸により黒変
33	-	131	5	谷状落ち込み埋土下層	瓦質土器	湯釜	-	-	(6.2)	密	良	灰色 灰色	ハケ オサエ、ハケ、ナデ	
33	25	132	5	谷状落ち込み埋土下層	土師質土器	湯釜	-	-	(5.3)	粗	やや良	灰黄褐色 褐灰色	ハケ 横ナデ	瓦質の可能性あり
33	25	133	5	谷状落ち込み埋土	瓦質土器	湯釜	-	-	(5.6)	密 長石 石英	良	灰色 黄灰色、黒褐色	ハケのちナデ 横ナデ、格子タタキ	外面煤付着
33	25	134	5	谷状落ち込み埋土下層	瓦質土器	湯釜	-	(10.0)	(5.0)	粗	良	灰色 灰色	ハケ ハケのちナデ	煤痕顕著
33	26	135	5	谷状落ち込み埋土下層	瓦質土器	火鉢もしくは火入れ	-	-	(2.0)	密	やや良	灰色 灰色	ハケ ハケのちナデ	型押し文

挿図	図版	No	地区	遺構番号	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内) (外)	主な調整 (内) (外)	備考
							口径	底径	器高					
							(復元値)	(復元値)	(残存値)					
33	26	136	5	谷状落ち込み埋土下層	瓦質土器	茶入?	-	-	(4.6)	粗	やや良	黄灰色 黄灰色	ハケ ナデ	
33	26	137	5	谷状落ち込み包含層	陶器	急須	-	-	(1.95)	密	良		回転ナデ 回転ヘラケズリ?	産地不明 17~18c
33	-	138	5	谷状落ち込み埋土上層	陶器	茶入?	-	-	(1.5)	密	良		回転ナデ 回転ナデ	139と同一個体か?
33	26	139	5	谷状落ち込み埋土上層	陶器	茶入?	-	6.3	(3.65)	密	良		回転ナデ 回転ヘラケズリ	唐津焼 17c
33	26	140	5	谷状落ち込み埋土	陶器	甕	-	-	(5.2)	密	良		回転ナデ 回転ナデ	福建産?
34	26	141	5	谷状落ち込み埋土下層	瓦質土器	甕もしくは火鉢	(30.8)	-	(4.4)	粗	不良	暗灰色、灰色 暗灰色、灰色	横ナデ 横ナデ	
34	26	142	5	谷状落ち込み埋土下層	瓦質土器	甕	(27.6)	-	(17.0)	粗	良	灰色 灰色	ハケのちナデ、横ナデ ハケのちナデ、横ナデ	
35	26	144	5	下層	瓦質土器	火鉢	(39.6)	-	(3.8)	粗 長石 石英	やや良	灰色 灰色	ハケのち横ナデ ハケのち横ナデ	
35	-	145	5	遺物包含層下層	青花	椀	-	-	(1.7)	密	良		回転ナデ 回転ナデ	16c
35	26	146	5	遺物包含層下層	青磁	椀	-	-	(1.8)	密	良		回転ナデ 回転ヘラケズリ	線描蓮弁文 15c末~16c
35	26	147	5	上層	陶器	鉢	(35.0)	-	(7.2)	密	良		回転ナデ 回転ヘラケズリ	三島手 内面象嵌 砂目
40	-	148	6	SB1 (SP13)	土師器	杯	-	(6.5)	(2.0)	密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
40	-	149	6	SB1 (SP13)	土師器	杯	-	(6.2)	(0.9)	密	やや良	浅黄橙色 浅黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
40	27	150	6	SK1 No.1	土師器	杯	(14.6)	5.4	3.6	密 長石	やや良	浅黄橙色 にぶい橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り No.4の破片と接合
40	27	151	6	SK1 No.5	土師器	杯	(14.1)	5.2	3.8	密 長石	やや良	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り No.10の破片と接合
40	27	152	6	SK1 No.3	土師器	杯	14.2	5.3	3.7	密 長石	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り 外面にロクロ目やや残る
40	27	153	6	SK1 No.4	土師器	杯	(13.35)	4.8	3.1	密 長石少量	やや良	浅黄橙色 浅黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り 2色の粘土混ぜ合わせ
40	27	154	6	SK1 No.2	土師器	杯	(12.6)	4.9	3.6	密 長石少量	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
40	27	155	6	SK1 No.2	土師器	杯	(12.9)	7.4	4.1	密 雲母	良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り ロクロ目やや残る No.3と接合
40	28	156	6	SK1 No.12	土師器	杯	-	(5.2)	1.5	密 長石少量	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
40	28	157	6	SK1 No.13	土師器	皿	(6.4)	(4.5)	1.2	密 長石少量	やや良	橙色 浅黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部摩滅
40	28	158	6	SK2	土師器	杯	-	4.7	(0.8)	密	やや良	灰白色 灰白色	未調整か 回転ナデ	回転糸切り
40	28	159	6	SK3	土師器	杯	11.6	6.3	3.6	密	やや良	浅黄橙色 にぶい褐色、橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
40	28	160	6	SK4	土師器	皿	(6.6)	(4.4)	1.35	密 長石少量	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
40	-	161	6	SK4	土師器	皿	(6.6)	(3.6)	1.1	密	やや良	にぶい褐色 灰褐色	回転ナデ 回転ナデ	底部摩滅
40	28	163	6	SP14	土師器	杯	-	7.7	(0.9)	密 雲母	良	橙色 橙色	ハケのちナデ 未調整	回転糸切り
40	28	164	6	SP14	土師器	杯	(13.7)	(7.1)	3.7	密 雲母	良	にぶい橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
40	28	165	6	SP14	土師器	杯	-	(7.2)	(2.5)	密 雲母	良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
40	28	166	6	SP15	土師器	杯	-	(6.85)	(2.3)	密	やや良	浅黄橙色 浅黄橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り 板目庄痕
40	28	167	6	SP15	土師器	杯	-	(7.9)	(1.8)	密 長石少量	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部摩滅
40	28	168	6	SP17	土師器	杯	-	(7.2)	(2.6)	密 雲母	良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
40	-	169	6	SP17	土師器	皿	(7.4)	(6.5)	1.05	密 雲母少量	良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	
40	28	170	6	SP19	土師器	杯	-	(5.2)	1.1	密 長石少量	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
40	-	171	6	SP19	土師器	皿	(7.2)	(6.0)	0.6	密 長石	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	底部摩滅
40	28	172	6	SP20	土師器	杯	-	(6.8)	(0.95)	密 雲母	良	橙色 橙色	未調整 未調整	回転糸切り
40	28	173	6	SD1	瓦質土器	鍋把手部	-	3.7	-	粗	良	暗灰色 暗灰色	ナデ オサエのちナデ	外面煤付着
40	-	174	6	SD2	土師器	杯	-	6.3	(1.3)	密 雲母	やや良	橙色 橙色	未調整か 未調整	回転糸切り
40	28	175	6	SD2	土師器	杯	-	(6.9)	(1.3)	粗	やや良	浅黄橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
41	29	176	6	遺物包含層	土師器	杯	12.8	(6.25)	4.9	密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
41	29	177	6	遺物包含層	土師器	杯	(12.1)	5.7	3.5	密	やや良	灰黄褐色 灰黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
41	29	178	6	遺物包含層	土師器	杯	(13.0)	(5.95)	3.3	密	やや良	にぶい黄橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
41	-	179	6	遺物包含層	土師器	杯	-	(6.7)	(1.4)	密	不良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り

挿図	図版	No	地区	遺構番号	種別	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調 (内) (外)	主な調整 (内) (外)	備考
							口径	底径	器高					
							(復元値)	(復元値)	(残存値)					
41	29	180	6	遺物包含層	土師器	杯	-	5.6	(0.95)	密	やや良	灰黄褐色 灰黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
41	29	181	6	遺物包含層	土師器	杯	(14.0)	-	(3.7)	密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	
41	-	182	6	遺物包含層	土師器	杯	-	(8.75)	(1.0)	粗 雲母	良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
41	29	183	6	遺物包含層	土師器	杯	-	(7.2)	(1.65)	密 長石少量	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
41	-	184	6	遺物包含層	土師器	杯	-	(6.9)	(1.35)	粗 雲母	良	橙色 橙色	未調整か 未調整	回転糸切り
41	29	185	6	遺物包含層	土師器	杯	-	(6.25)	(2.6)	密	やや良	橙色 にぶい橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
41	29	186	6	遺物包含層	土師器	杯	-	(6.3)	(1.7)	密 長石少量	良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
41	-	187	6	遺物包含層	土師器	杯	(13.05)	-	2.8	密	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ 回転ナデ	
41	29	188	6	遺物包含層	土師器	杯	-	5.2	(3.0)	密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
41	29	189	6	遺物包含層	土師器	杯	-	(7.0)	(1.8)	粗 雲母	良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	
41	-	190	6	遺物包含層 No 2	土師器	杯	-	(7.5)	(3.2)	密 長石少量	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	
41	-	191	6	遺物包含層	土師器	鉢?	-	(3.9)	(2.1)	密	やや良	橙色 橙色	未調整 (ロクロ目) 回転ナデか	
41	29	192	6	遺物包含層 No 4	土師器	皿	(6.4)	5.0	0.9	密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
41	29	193	6	遺物包含層	土師器	皿	6.6	4.7	1.2	密 長石	やや良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
41	29	194	6	遺物包含層 No 1	土師器	皿	(7.2)	5.3	1.05	粗 長石・石英	良	にぶい橙色 にぶい橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
41	29	195	6	遺物包含層 No 3	土師器	皿	(6.0)	(4.7)	1.2	密 長石少量	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
41	-	196	6	遺物包含層	土師器	皿	(7.3)	(6.2)	1.2	密	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
41	29	197	6	遺物包含層	土師器	皿	6.6	6.2	1.25	密	良	浅黄褐色 浅黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
41	29	198	6	遺物包含層	土師質土器	鍋	-	-	(3.85)	密	良	橙色 にぶい橙色	ハケのちナデ、横ナデ ハケのちナデ、横ナデ	
41	-	199	6	遺物包含層	土師質土器	鍋	-	-	(3.0)	密	良	にぶい橙色 にぶい橙色	ハケ、横ナデ ハケのちナデ	
42	30	200	6	客土	土師器	杯	(13.5)	(5.85)	4.0	密 長石少量	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
42	30	201	6	盤土	土師器	杯	(12.5)	(5.4)	-	密 長石	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
42	30	202	6	盤土	土師器	杯	(13.0)	-	(2.8)	密 雲母 長石	良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	
42	30	203	6	客土	土師器	杯	-	(5.3)	(0.9)	密 長石 雲母	良	浅黄褐色 浅黄褐色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
42	-	204	6	盤土	土師器	杯	-	(5.4)	(1.4)	密 長石	良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
42	30	205	6	壁切	土師器	皿	(6.8)	(5.4)	1.15	密 雲母 長石	やや良	橙色 橙色	回転ナデ 回転ナデ	回転糸切り
42	-	206	6	全体精査	土師器	皿	(7.2)	(5.2)	1.15	密 長石少量	やや良	橙色 橙色	回転ナデ、ナデか 回転ナデ	回転糸切り
42	30	207	6	全体精査	土師器	皿	(7.2)	(5.7)	1.15	密 長石	良	橙色 橙色	回転ナデ、ハケのちナデ? 回転ナデ	回転糸切り 底部内面にハケ目?
42	30	208	6	遺構検出	白磁	鉢	(13.2)	-	(2.5)	密	良		回転ナデ 回転ナデ	口禿げ 13c 後～14c 前半
42	30	209	6	盤土	瓦質土器	足鍋	-	(18.8)	(2.6)	粗	やや良	浅黄褐色 褐灰	ハケ ナデ、格子タタキ	
42	30	210	6	全体精査	瓦質土器	足鍋	-	-	(2.2)	粗	良	灰色 灰色	横ナデ 横ナデ	15c 中～後
42	30	211	6	盤土	瓦質土器	足鍋 脚部	-	-	(10.5)	密	良	灰黄褐色 灰黄褐色	ナデ ナデ	接合面に刻み目 煤痕
42	30	212	6	全体精査	瓦質土器	湯釜	(11.35)	-	(3.85)	密	やや良	灰白色 灰白色	横ナデ ハケのち横ナデ	
42	30	213	6	壁切	陶器	鉢	-	-	(3.2)	密	良		回転ナデ 回転ナデ	三島手 内面象嵌
42	30	214	6	壁切	陶器	壺	-	(7.4)	(2.2)	密	良		回転ナデ 回転ヘラケズリ	疊付に砂 削り出し高台



### 土製品観察表

挿図	図版	No.	地区	遺構番号	種別	器種	法量 (cm)			色調	備考
							長さ	幅	厚さ		
27	21	58	5	SK1	焼土塊		4.4	6.1	4.9	橙色	繊維圧痕多数
27	21	59	5	SK1	焼土塊		5.3	6.0	4.55	浅黄橙色	被熱中に本体から剥落?
27	21	60	5	SK1	焼土塊		4.85	5.5	4.6	表面：橙色 破面：にぶい黄橙色	平坦面に棒状圧痕 繊維圧痕多数
27	21	61	5	SK1	焼土塊		6.85	5.8	2.6	明黄褐色	平坦面2面残存 繊維圧痕
27	21	62	5	SK1	焼土塊		5.9	7.5	5.2	にぶい黄橙色	
28	21	67	5	SP33	焼土塊		6.0	6.3	4.85	にぶい黄橙色	平坦面残存 繊維圧痕、板状の圧痕
-	21	216	5	SK1	焼土塊		3.7	3.6	2.9	橙色	棒状圧痕
-	21	217	5	SK1	焼土塊		5.0	4.2	3.45	橙色、灰白色	棒状圧痕
-	21	218	5	SK1	焼土塊		3.1	2.95	1.9	橙色	棒状圧痕
-	21	219	5	SK1	焼土塊		7.35	5.4	4.35	灰白色	棒状圧痕
-	21	220	5	SK1	焼土塊		6.6	3.7	3.05	にぶい黄橙色	平坦面残存
-	21	221	5	SK1	焼土塊		5.70	4.3	2.8	褐灰色、灰白色	棒状圧痕
-	21	224	5	SP26	焼土塊		4.35	3.8	2.5	にぶい橙色、灰白色	繊維圧痕
-	21	225	5	SP33	焼土塊		7.0	4.6	4.15	橙色、にぶい黄橙色	平坦面残存 繊維圧痕多数
-	21	226	5	SD1 東側	焼土塊		3.35	3.4	2.95	にぶい黄橙色	
-	21	227	5	SD1 東側	焼土塊		3.8	3.4	2.6	黒褐色、にぶい黄橙色	棒状圧痕
43	-	239	1	SD1	焼土塊	炉壁	5.1	3.2	3.8	黒褐色、にぶい黄橙色	分析番号 KOK-1
43	-	240	1	表採	焼土塊	炉壁	7.7	5.1	4.7	黒褐色、にぶい黄橙色	分析番号 KOK-2

### 鉄製品観察表

挿図	図版	No.	地区	遺構番号	種別	器種	法量 (cm)			重量 g	備考	
							長さ	幅	厚さ			
22	20	51	4	SP1	鉄製品	鉄釘	(3.40)	0.7	0.80	5.3		
28	22	68	5	SP36	鉄製品	不明	(2.45)	1.7	0.55	4.5		
28	22	83	5	SD1 西側	鉄製品	鉄釘?	(3.35)	0.6	0.45	2.0		
35	26	143	5	谷状落ち込み	埋土下層	鉄製品	不明	(5.5)	1.2	2.0	8.7	
44	-	215	4	SK3	椀形鍛冶滓		3.7	2.9	1.7	16.3	分析番号 KOK-3	
44	22	229	5	SP41	鍛冶滓		11.4	8.8	7.0	480.8	分析番号 KOK-4	

### 石製品観察表

挿図	図版	No.	地区	遺構番号	器種	法量 (cm)			重量 g	石材	備考
						長さ	幅	厚さ			
8	19	13	1	表面採集	剥片	10.25	9.1	3.15	301.5	安山岩	風化顕著
40	28	162	6	SP11	硯 硯頭部	(1.55)	4.95	2.0	13.6	赤色頁岩	中世後半か
-	21	222	5	SK1	焼石	7.85	4.7	2.15			焼成破裂片
-	21	223	5	SK1	焼石	13.25	7.25	1.5			焼成破裂片
-	21	228	5	SD1 東側	焼石	8.6	3.65	0.7			焼成破裂片

### 炭化物観察表

挿図	図版	No.	地区	遺構番号	種別	器種	法量 (cm)			色調	備考
							長さ	幅	厚さ		
-	26	230	6	SK1	炭 (アカガシ)						分析番号 PLD-27042
-	-	231	5	SK1	炭 (マツ)						分析番号 PLD-27041
-	-	232	3	SP39	炭 (散孔材)						分析番号 PLD-27040

## IV 自然科学分析

### 1 江の河原遺跡出土炉壁・鉄滓の分析調査

日鉄住金テクノロジー(株)  
八幡事業所 TACセンター  
大澤正己・鈴木瑞穂

#### (1) いきさつ

江の河原遺跡は山口県美祢市に所在する。調査地区からは中世の炉壁・鉄滓などの鉄関連遺物が出土している。当遺跡周辺での生産の様相を検討する目的から調査を実施する運びとなった。

#### (2) 調査方法

##### ① 供試材

第3表に示す。出土炉壁・鉄滓計4点の調査を行った。

##### ② 調査項目

肉眼観察

分析調査を実施する遺物の外観の特徴など、調査前の観察所見を記載した。

顕微鏡組織

鉄滓の鉄組成や金属部の組織観察、非金属介在物の調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の $3\mu\text{m}$ と $1\mu\text{m}$ で鏡面研磨した。観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真撮影を行った。

EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査

日本電子(株)製JXA-8800RL (波長分散型5チャンネル)にて含有元素の定性・定量分析を実施した。定量分析は試料電流 $2.0 \times 10^{-8}$ アンペア、ビーム径 $3\mu\text{m}$ 、補正法はZAFに従った。

反射電子像 (COMP) は、調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される個所ほど明るく、軽い元素で構成される個所ほど暗い色調で示される。これを利用して、各相の組成の違いを確認後、定量分析を実施している。また元素の分布状態を把握するため、反射電子像に加え、特性X線像の撮影も適宜行った。

化学組成分析

出土遺物の性状を調査するため、構成成分の定量分析を実施した。

全鉄分 (Total Fe)、金属鉄 (Metallic Fe)、酸化第一鉄 (FeO) : 容量法。

炭素 (C)、硫黄 (S) : 燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化珪素 ( $\text{SiO}_2$ )、酸化アルミニウム ( $\text{Al}_2\text{O}_3$ )、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム ( $\text{MgO}$ )、酸化カリウム ( $\text{K}_2\text{O}$ )、酸化ナトリウム ( $\text{Na}_2\text{O}$ )、酸化マンガン ( $\text{MnO}$ )、二酸化チタン ( $\text{TiO}_2$ )、酸化クロム ( $\text{Cr}_2\text{O}_3$ )、五酸化燐 ( $\text{P}_2\text{O}_5$ )、バナジウム (V)、銅 (Cu)、二酸化ジルコニウム ( $\text{ZrO}_2$ ) : ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法 : 誘導結合プラズマ発光分光分析。

### (3) 調査結果

#### ①KOK - 1 : 炉壁

肉眼観察：ごく小形の炉壁 (38.0g) 破片である。炉材の厚みと被熱の状態から、鑄造用の溶解炉の可能性が考えられる。内面は強い熱影響を受けており、黒色ガラス質化している。ガラス質滓部分には弱い着磁性があり、コバルト色の付着物が点在する。炉壁は淡橙色の粘土質で、砂や有機質の混和物が確認される。

顕微鏡組織：第43図①～③に示す。内面表層の黒色ガラス質滓部分の拡大である。素地部分は完全にガラス質化しているが、炉材粘土中に混和された微細な石英・長石類などの砂粒が点在する。また微細な明白色結晶はヘマタイト (Hematite:  $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )、灰褐色多角形結晶はマグネタイト (Magnetite:  $\text{Fe}_3\text{O}_4$ ) と推定される。

化学組成分析：第4表に示す。全鉄分 (Total Fe) 5.73%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.05%、酸化第1鉄 (FeO) 1.58%、酸化第2鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) 6.37%の割合であった。ガラス質滓中の鉄酸化物を反映したものと考えられる。一方銅 (Cu) は<0.01%と非常に低値であった。またアルミナ ( $\text{Al}_2\text{O}_3$ ) は14.68%と低めで、耐火性にはやや不利な成分系といえる。

当炉壁の内面表層部では溶着金属はみられなかったが、微細な鉄酸化物が多数晶出していた。これらは鑄造原料 (鑄鉄) の溶解の際、一部が酸化雰囲気によって酸化されて滓化したものと推察される。上述した炉材の形状を勘案しても、鉄鑄物の鑄造に用いた溶解炉の破片の可能性が高いと考えられる。

#### ②KOK - 2 : 炉壁

肉眼観察：小形で厚手の炉壁 (126.3g) 破片である。炉壁 (KOK - 1) と同様、炉材の厚みと被熱の状態から、鑄造用の溶解炉の可能性が考えられる。内面は強い熱影響を受けており黒色ガラス質化している。ガラス質滓の着磁性はやや強く、黒灰色の付着物が点在する。炉壁は淡橙色で粘土質である。また砂や有機質の混和物、木炭が少量確認される。

顕微鏡組織：第43図④～⑥に示す。内面表層のガラス質滓部分の拡大である。やはり素地部分は完全にガラス質化しているが、微細な石英・長石類などの砂粒が点在する。また表層に凝集して晶出する微細な明白色結晶はヘマタイト、その内側の灰褐色多角形結晶はマグネタイトと推定される。

EPMA 調査：第45図①に内面表層部の反射電子像 (COMP) を示す。微細な明白色結晶と灰褐色結晶は反射電子像では明瞭な色調差はなく、特性X線像をみると鉄 (Fe)、酸素 (O) に反応がある。定量分析値は前者が78.8%FeO - 3.1% $\text{Al}_2\text{O}_3$  (分析点6)、後者は81.4%FeO - 3.7% $\text{Al}_2\text{O}_3$  (分析点7)、78.6%FeO - 5.3% $\text{Al}_2\text{O}_3$  - 1.9%MgO (分析点8) であった。アルミナ ( $\text{Al}_2\text{O}_3$ ) などを少量含むが、前者はヘマタイト (Hematite:  $\text{Fe}_2\text{O}_3$ )、後者はマグネタイト (Magnetite:  $\text{Fe}_3\text{O}_4$ ) と推定される。また素地部分の定量分析値は67.4% $\text{SiO}_2$  - 10.8% $\text{Al}_2\text{O}_3$  - 2.1%CaO - 4.1% $\text{K}_2\text{O}$  - 1.8% $\text{Na}_2\text{O}$  - 6.0%FeO (分析点9) であった。非晶質硅酸塩である。

化学組成分析：第4表に示す。全鉄分 (Total Fe) 3.92%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は0.07%、酸化第1鉄 (FeO) が0.72%、酸化第2鉄 ( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ ) 4.70%の割合であった。一方銅 (Cu) は0.01%と低値である。またアルミナ ( $\text{Al}_2\text{O}_3$ ) は15.14%とやや低めで、耐火性には若干不利な成分系といえる。

当炉壁のガラス質滓表層でも鉄酸化物の晶出が確認された。炉壁 (KOK - 1) と同様、鉄鑄物の鑄

造に用いられた溶解炉の炉壁片と考えられる。また胎土部分の組成も近似する。

### ③KOK - 3 : 椀形鍛冶滓

肉眼観察 : ごく小形で薄手の椀形鍛冶滓 (16.3g) 破片で、側面2面は破面である。上面表層には、白色の砂粒を含む黒色ガラス質滓が部分的に付着する。羽口先端の溶融物と推測される。滓部は灰褐色で着磁性がある。気孔は少なく緻密である。

顕微鏡組織 : 第44図①~③に示す。滓中の微細な明白色粒は金属鉄、粒状・不定形の青灰色部は銹化鉄である。また全体に淡灰色柱状結晶ファヤライト (Fayalite :  $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ ) が晶出する。

EPMA 調査 : 第45図②に滓部の反射電子像 (COMP) を示す。中央の微小明白色部は特性X線像では鉄 (FeO) にのみ強い反応がある。定量分析値は99.5%Fe (分析点1) であった。金属鉄 (Metallic Fe) である。周囲の淡灰色柱状結晶は特性X線像では鉄 (Fe)、珪素 (Si)、酸素 (O) に反応がある。定量分析値は63.1%FeO - 1.7%MgO - 30.5%SiO<sub>2</sub> (分析点10) であった。ファヤライト (Fayalite :  $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ ) で、微量マグネシア (MgO) を固溶する。また素地部分の定量分析値は39.2%SiO<sub>2</sub> - 16.2%Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> - 12.7%CaO - 2.3%K<sub>2</sub>O - 1.5%Na<sub>2</sub>O - 22.2%FeO (分析点12) であった。非晶質硅酸塩で、鉄分 (FeO) が高い割合を占める。

化学組成分析 : 第4表に示す。全鉄分 (Total Fe) 40.38%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.07%、酸化第1鉄 (FeO) 43.62%、酸化第2鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 9.16%の割合であった。造滓成分 (SiO<sub>2</sub> + Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> + CaO + MgO + K<sub>2</sub>O + Na<sub>2</sub>O) は42.91%と高値であるが、このうち塩基性成分 (CaO + MgO) の割合は3.21%と低めである。また主に製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) に含まれる二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) は0.21%、バナジウム (V) が0.01%と低値であった。酸化マンガン (MnO) も0.15%、銅 (Cu) は<0.01%と低値である。

当鉄滓は主に鉄酸化物 (FeO) と炉材粘土 (SiO<sub>2</sub>主成分) 溶融物からなり、鉄素材を熱間で鍛打加工した際に生じた鍛錬鍛冶滓と推定される。

### ④KOK - 4 : 鍛冶滓

肉眼観察 : 大形で厚手の鍛冶滓 (480.8g) 破片である。表面には黄褐色の土砂が付着する。滓の地の色調は暗灰色で着磁性がある。気孔は少なく、緻密で重量感のある滓である。また部分的に茶褐色の銹化鉄部が点在するが、特殊金属探知器での反応はない。

顕微鏡組織 : 第44図④~⑥に示す。滓中には微細な白色樹枝状結晶ウスタイト (Wustite : FeO)、淡灰色柱状結晶ファヤライト (Fayalite :  $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$ ) が晶出する。また滓中の不定形青灰色部は銹化鉄である。金属組織痕跡は不明瞭で、炭素含有率の推定等は困難な状態であった。

化学組成分析 : 第4表に示す。全鉄分 (Total Fe) 47.50%に対して、金属鉄 (Metallic Fe) は0.12%、酸化第1鉄 (FeO) 8.76%、酸化第2鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 58.01%の割合であった。造滓成分 (SiO<sub>2</sub> + Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub> + CaO + MgO + K<sub>2</sub>O + Na<sub>2</sub>O) は19.66%と低めで、塩基性成分 (CaO + MgO) の割合も0.53%と低い。主に製鉄原料の砂鉄 (含チタン鉄鉱) に含まれる二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) は0.10%、バナジウム (V) が0.01%と低値であった。また酸化マンガン (MnO) は0.08%、銅 (Cu) も0.01%と低値である。

当鉄滓も椀形鍛冶滓 (KOK - 3) と同様、主に鉄酸化物 (FeO) と炉材粘土 (SiO<sub>2</sub>主成分) の溶融物からなり、鉄素材を熱間で鍛打加工した際に生じた鍛錬鍛冶滓と推定される。

#### (4) まとめ

江の河原遺跡から出土した炉壁片・鉄滓を調査した結果、当遺跡では鉄鑄物の鑄造と鍛造鉄器加工の双方が行われた可能性が高いと考えられる。詳細は以下の通りである。

分析調査を実施した炉壁片2点(KOK-1、2)はともに、比較的厚手で内面表層が黒色ガラス質化している。ガラス質滓中には溶着金属はみられなかったが、表層に鉄酸化物が確認されることから、鉄鑄物の鑄造に用いられた溶解炉の炉壁片と推定される。

鉄滓2点(KOK-3、4)は、主に鉄酸化物(FeO)と炉材粘土(SiO<sub>2</sub>主成分)の溶融物からなる滓であった。鉄素材を熱間で鍛打加工した際に生じた鍛錬鍛冶滓と推定される。製鉄原料起源の不純物をほとんど含まない鉄素材、または廃鉄器を原料として、鍛造鉄器を製作したと推定される。

#### 第3表 供試材の履歴と調査項目

符号	地区名	遺構名	遺物名称	推定年代	計測値		メタル度	調査項目								備考
					大きさ(mm)	重量(g)		マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折	EPMA	化学分析	耐火度	カロリー	
KOK-1	1地区	SD1	炉壁	中世	51×32×38	38.0	なし		○				○			
KOK-2		表土除去中	炉壁		77×51×47	126.3	なし		○			○	○			
KOK-3	4地区	SK3	橢形鍛冶滓		37×29×17	16.3	なし		○			○	○			
KOK-4	5地区	SP41	鍛冶滓		114×88×70	480.8	なし		○				○			

#### 第4表 供試材の化学組成

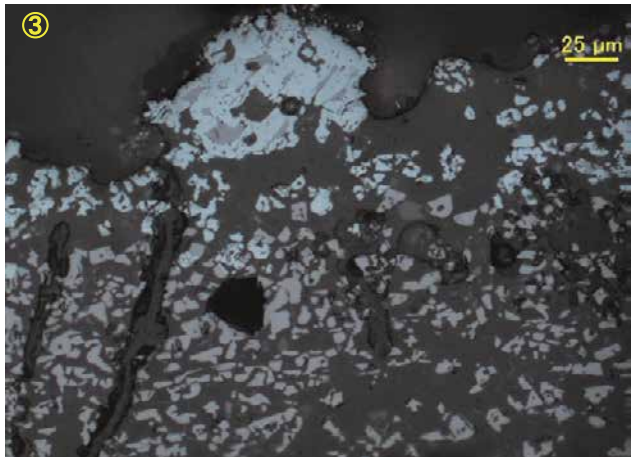
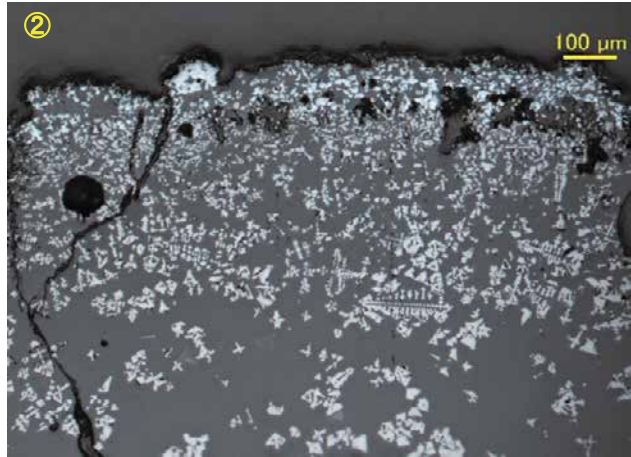
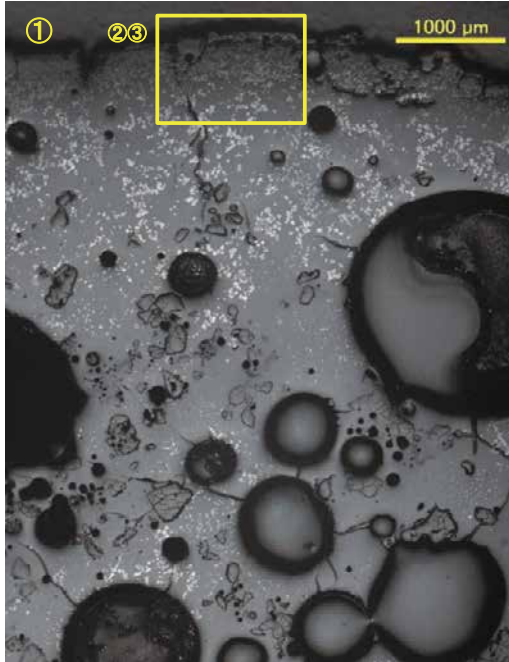
符号	地区名	遺構名	遺物名称	推定年代	化学組成 (%)																		注				
					全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	二酸化珪素 (SiO <sub>2</sub> )	酸化アルミニウム (Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化ナトリウム (Na <sub>2</sub> O)	酸化カリウム (K <sub>2</sub> O)	酸化ナトリウム (Na <sub>2</sub> O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO <sub>2</sub> )	酸化クロム (Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	硫黄 (S)	五酸化燐 (P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> )	炭素 (C)	バナジウム (V)		銅 (Cu)	二酸化ジルコニウム (ZrO <sub>2</sub> )	砒素 (As)	造滓成分
KOK-1	1地区	SD1	炉壁	中世	5.73	0.05	1.58	6.37	68.91	14.68	0.51	0.94	2.40	0.88	0.10	0.71	0.04	0.008	0.08	0.26	0.01	<0.01	0.05	<0.01	88.32	15.414	0.124
KOK-2		表土除去中	炉壁		3.92	0.07	0.72	4.70	70.11	15.14	0.30	0.92	2.34	0.92	0.13	0.73	0.06	0.010	0.06	0.50	0.01	0.01	0.03	<0.01	89.73	22.890	0.186
KOK-3	4地区	SK3	橢形鍛冶滓		40.38	0.07	43.62	9.16	32.40	5.24	2.38	0.83	1.57	0.49	0.15	0.21	0.04	0.013	0.26	0.21	0.01	<0.01	<0.01	<0.01	42.91	1.063	0.005
KOK-4	5地区	SP41	鍛冶滓		47.50	0.12	8.76	58.01	16.22	2.53	0.33	0.20	0.28	0.10	0.08	0.10	0.03	0.052	0.47	0.73	0.01	0.01	<0.01	<0.01	19.66	0.414	0.002

#### 第5表 出土遺物の調査結果のまとめ

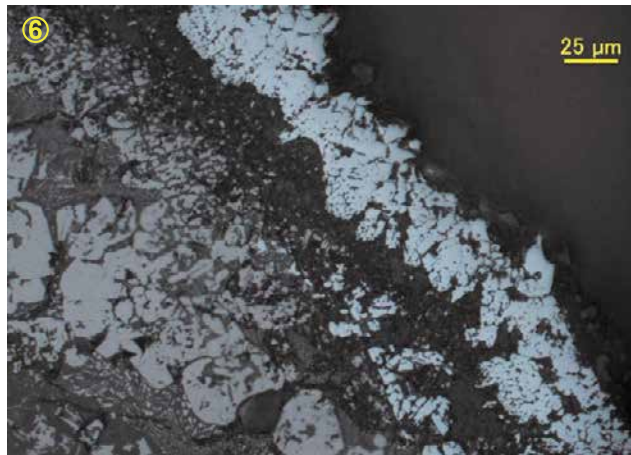
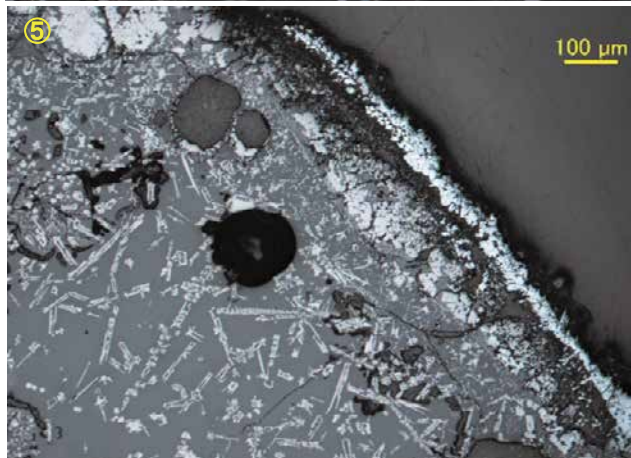
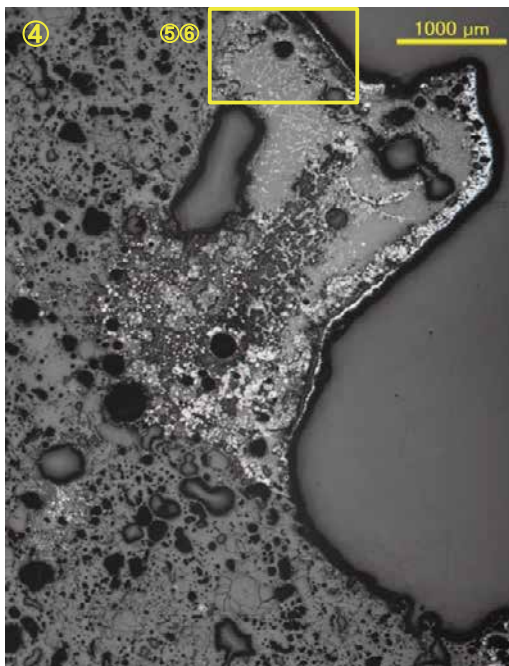
符号	地区名	遺構名	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成 (%)								所見
						Total Fe	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	塩基性成分	TiO <sub>2</sub>	V	MnO	造滓成分	Cu	
KOK-1	1地区	SD1	炉壁	中世	内面表層:ガラス質滓(石英・長石類混在)、滓部:He+M	5.73	6.37	1.45	0.71	0.01	0.10	88.32	<0.01	鉄鑄物の鑄造に用いられた炉壁片の可能性が高い
KOK-2		表土除去中	炉壁		内面表層:ガラス質滓(石英・長石類混在)、滓部:He+M	3.92	4.70	1.22	0.73	0.01	0.13	89.73	0.01	鉄鑄物の鑄造に用いられた炉壁片の可能性が高い
KOK-3	4地区	SK3	橢形鍛冶滓		滓部:F、微小金属鉄、錆化鉄粒	40.38	9.16	3.21	0.21	0.01	0.15	42.91	<0.01	鍛錬鍛冶滓
KOK-4	5地区	SP41	鍛冶滓		滓部:W+F、錆化鉄部	47.50	58.01	0.53	0.10	0.01	0.08	19.66	0.01	鍛錬鍛冶滓

W:Wustite (FeO)、He:Hematite (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、M:Magnetite (Fe<sub>3</sub>O<sub>4</sub>)、F:Fayalite (2FeO・SiO<sub>2</sub>)

**KOK-1 炉壁**  
 ①内面側：ガラス質滓、石英・長石類多数混在、②  
 ③表層部拡大、ヘマタイト・マグネタイト晶出



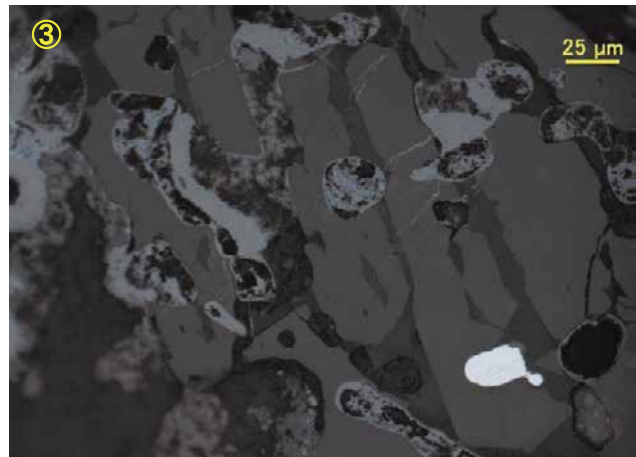
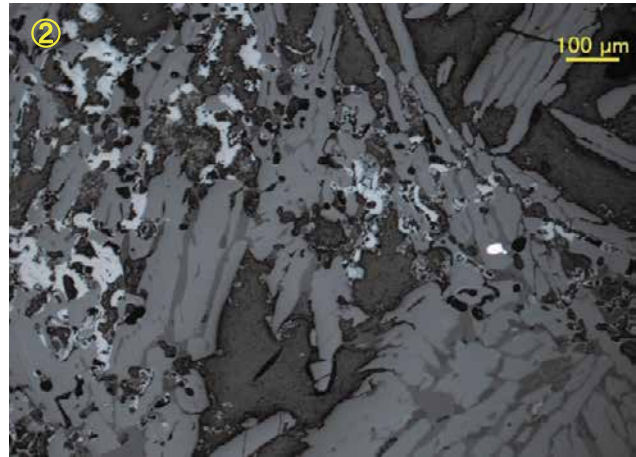
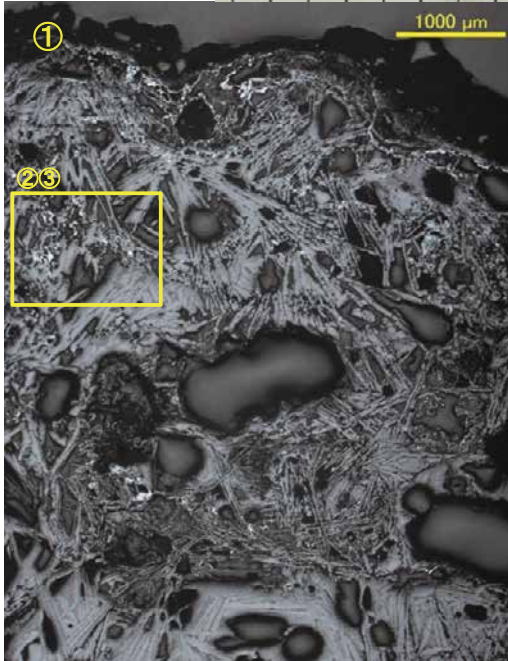
**KOK-2 炉壁**  
 ④内面側：ガラス質滓、石英・長石類混在、⑤⑥表層部拡大、ヘマタイト・マグネタイト晶出



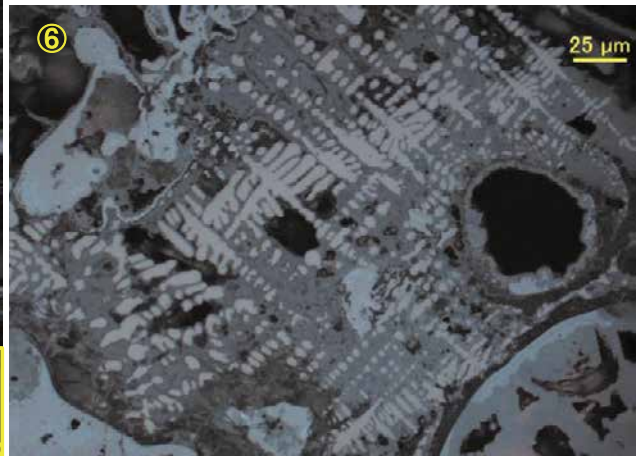
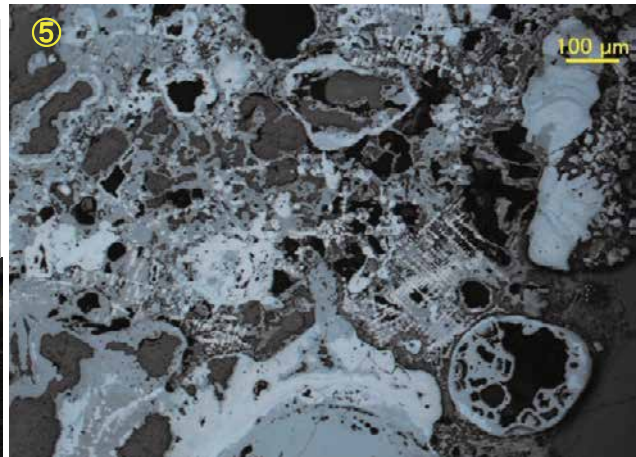
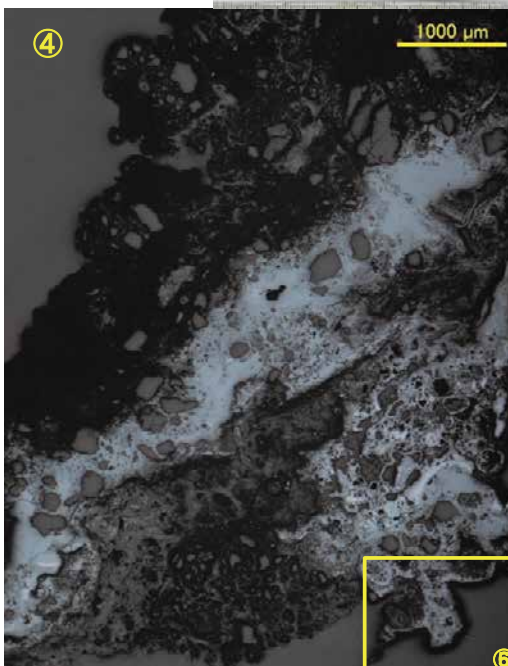
第 43 図 炉壁の顕微鏡組織



KOK-3  
 椀形鍛冶滓  
 ①～③滓部:ファイライト、微小金属鉄粒・錆化鉄散在

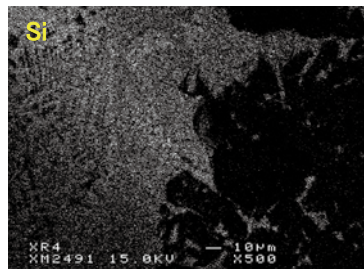
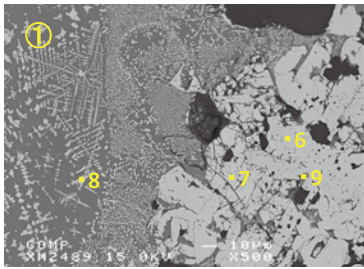


KOK-4  
 鍛冶滓  
 ④～⑥滓部:ウスタイト・ファイライト、錆化鉄散在



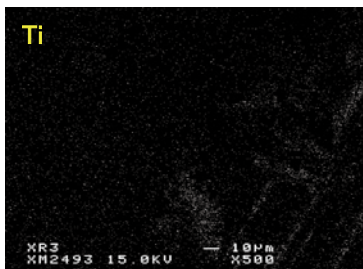
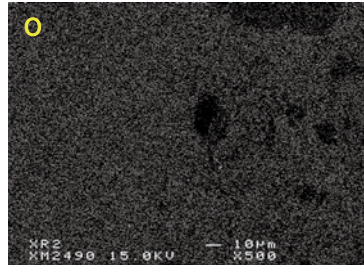
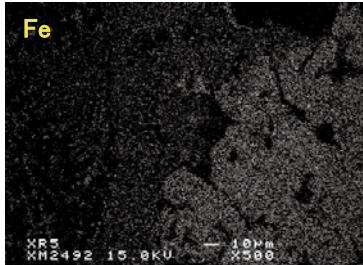
第 44 図 鍛冶滓の顕微鏡組織



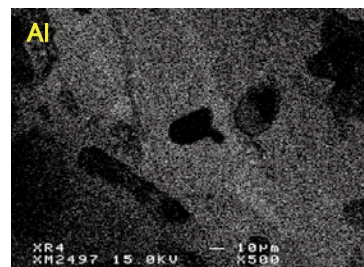
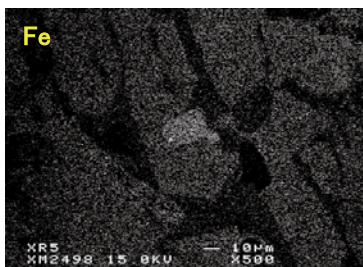
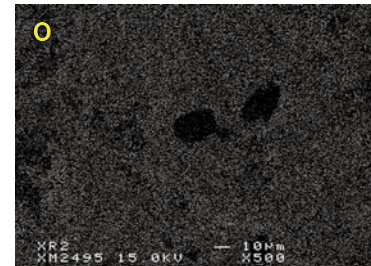
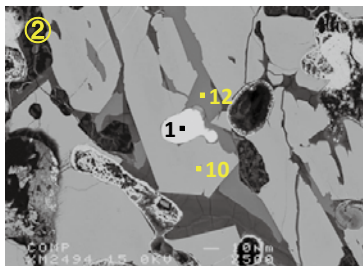


定量分析値

Element	6	7	8	9
Na <sub>2</sub> O	-	-	-	1.807
MgO	0.007	0.874	1.922	0.054
Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	3.105	3.673	5.264	10.838
SiO <sub>2</sub>	0.030	0.648	0.897	67.402
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	-	-	-	0.197
S	0.002	-	-	0.001
K <sub>2</sub> O	-	-	0.131	4.102
CaO	-	0.003	0.083	2.114
TiO <sub>2</sub>	0.475	0.010	0.382	0.302
Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	-	0.054	0.020	0.031
MnO	-	0.260	0.262	-
FeO	78.825	81.406	78.590	5.951
ZrO <sub>2</sub>	0.015	0.056	0.021	0.010
F	0.073	-	-	-
SrO	0.040	-	-	0.564
V <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.033	0.015	0.007	0.054
Total	82.574	86.999	87.579	93.427

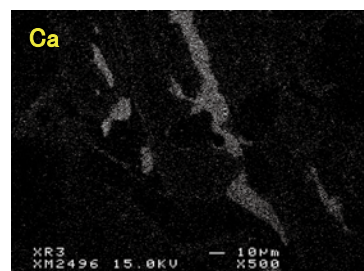


炉壁 (KOK-2) ガラス質滓部分の反射電子像 (COMP) および特性 X 線像



定量分析値

Element	1	Element	10	12
Mg	0.003	Na <sub>2</sub> O	-	1.481
Si	0.009	MgO	1.725	-
Fe	99.537	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.052	16.163
Sr	0.048	SiO <sub>2</sub>	30.540	39.233
Zr	0.090	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	0.021	0.873
O	0.360	S	0.002	0.084
As	0.126	K <sub>2</sub> O	-	2.310
Cu	0.070	CaO	0.660	12.746
Sn	0.101	TiO <sub>2</sub>	0.021	0.920
Total	100.344	Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.039	-
		MnO	0.302	0.008
		FeO	63.074	22.207
		ZrO <sub>2</sub>	0.019	-
		F	-	-
		SrO	0.176	0.302
		V <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	0.025	0.028
		Total	96.656	96.355



椀形鍛冶滓 (KOK-3) の反射電子像 (COMP) および特性 X 線像

第 45 図 炉壁 (KOK-2) ・ 椀形鍛冶滓 (KOK-3) の EPMA 調査結果



## 2 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林絃一

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・小林克也・中村賢太郎

### (1) はじめに

山口県美祢市に位置する江の河原遺跡より検出された炭化材について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

### (2) 試料と方法

試料は、炭化材3点（資料2～4）である。資料2（PLD-27040）は、Ⅲ地区のSP39から出土した炭化材（散孔材）で、最終形成年輪が確認された。資料3（PLD-27041）は、5地区のSK1から出土した炭化材（マツ科）で、最終形成年輪が確認できなかった。資料4（PLD-27042）は、6地区のSK1から出土した炭化材（アカガシ亜属）で、最終形成年輪が確認された。

測定試料の情報、調製データは第6表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

第6表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-27040	資料名：資料2 調査区：3地区 遺構：SP39 その他：20140417	種類：炭化材（散孔材、半割） 試料の性状：最終形成年輪含む5年輪分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-27041	資料名：資料3 調査区：5地区 遺構：SK1 その他：20140224	種類：炭化材（マツ科） 試料の性状：不明、一見最終形成年輪だ が年輪界で綺麗に割れているだけ 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-27042	資料名：資料4 調査区：6地区 遺構：SK1 その他：20140425	種類：炭化材（アカガシ亜属） 試料の性状：最終形成年輪含む4年輪分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

### (3) 結果

第7表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代を、第46図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代（yrBP）の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定

統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、および半減期の違い(<sup>14</sup>Cの半減期5730 ± 40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

<sup>14</sup>C年代の暦年較正にはOxCal4.1(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第7表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ 13C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1σ)	14C年代 (yrBP ± 1σ)	14C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-27040	- 26.71 ± 0.18	600 ± 20	600 ± 20	1310AD (26.6%) 1330AD 1339AD (28.8%) 1360AD 1387AD (12.8%) 1397AD	1300AD (73.5%) 1369AD 1381AD (21.9%) 1406AD
PLD-27041	- 26.53 ± 0.28	339 ± 20	340 ± 20	1495AD (22.1%) 1524AD 1559AD (33.3%) 1602AD 1615AD (12.8%) 1631AD	1476AD (32.9%) 1532AD 1538AD (62.5%) 1636AD
PLD-27042	- 28.46 ± 0.23	676 ± 19	675 ± 20	1282AD (50.0%) 1299AD 1370AD (18.2%) 1380AD	1276AD (64.1%) 1307AD 1362AD (31.3%) 1386AD

#### (4) 考察

以下、2σ暦年代範囲(確率95.4%)に着目して、結果を整理する。

3地区のSP39から出土した資料2(PLD-27040)の炭化材(散孔材)は、1300-1369 cal AD(73.5%)および1381-1406 cal AD(21.9%)で、13世紀末~15世紀初頭の範囲を示した。これは鎌倉時代~室町時代に相当する。

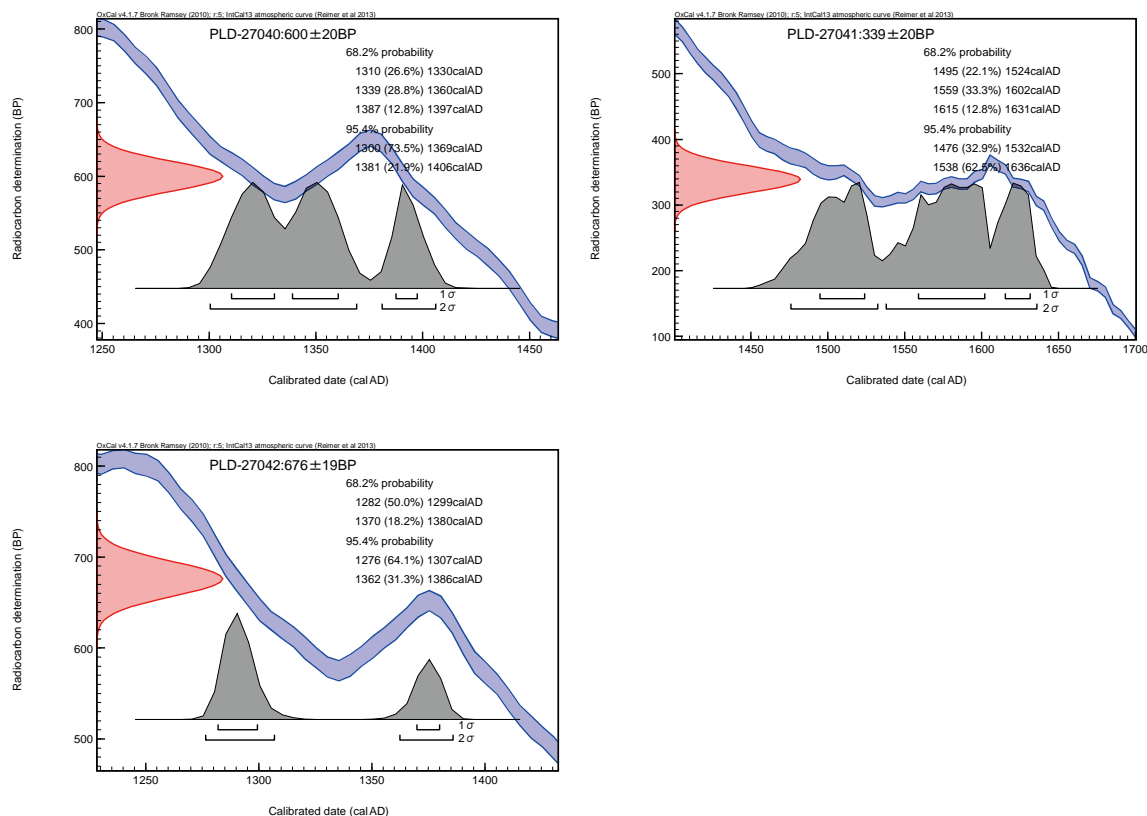
5地区のSK1から出土した資料3(PLD-27041)の炭化材(マツ科)は、1476-1532 cal AD(32.9%)および1538-1636 cal AD(62.5%)で、15世紀後半~17世紀前半の範囲を示した。ただし、測定した部位が最終形成年輪ではないため、材の伐採・枯死年より古い年代が得られていると考えられる。したがって、材の伐採・枯死年は室町時代~江戸時代、あるいはそれ以降と考えられる。

6地区のSK1から出土した資料4(PLD-27042)の炭化材(アカガシ亜属)は、1276-1307 cal AD(64.1%)および1362-1386 cal AD(31.3%)で、13世紀後半~14世紀後半の範囲を示した。これは鎌倉時代~室町時代に相当する。

#### 参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337-360.  
 中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55 (4) , 1869-1887.



第46図 暦年較正結果

### 3 江の河原遺跡から出土した貝類遺体

中村賢太郎 (パレオ・ラボ)

#### (1) はじめに

山口県美祢市に位置する江の河原遺跡の発掘調査では、1地区のSD1から貝類遺体が出土した。ここでは貝類遺体の特徴記載と同定結果を報告する。

#### (2) 試料と方法

試料は、1地区のSD1ベルト①～②間の中層(灰褐色粘土)から出土した貝類遺体である。肉眼および実体顕微鏡で観察し、特徴を記載し、標本と比較して同定した。

#### (3) 結果と考察

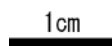
二枚貝である。平面形は卵円形。殻皮のみ残存している。殻皮の色は黒褐色。殻頂付近あるいは腹

縁近くまで、V字状あるいは顆粒状の模様がある。これらの特徴からイシガイ科 (Unionidae) と同定される。イシガイ科の中でも、マツカサガイ (*Pronodularia japonensis*) あるいはニセマツカサガイ (*Inversiunio yanagawensis*) の可能性が考えられる。

マツカサガイやニセマツカサガイなどイシガイ科は、小川や水路の砂礫～砂泥底に生息する。今回出土したイシガイ科の貝類もSD1内に自然に生息していた可能性が考えられる。なお、イシガイ科は食用も可能である。

第8表 1地区SD1の貝類遺体

資料名	地区名	遺構名	層位	その他	分類群	部位	左右	数量	計測値	
資料1	-1	1地区	SD1	中層 (灰褐色粘土)	ベルト ①～②間 2013.12.24	イシガイ科	殻皮	左	1	殻長：36mm、殻高：>27mm
	右							1	殻長：>39mm、殻高：>27mm	
	右							1	殻長：>45mm、殻高：34mm	
	右							1	殻長：32mm、殻高：>23mm	
	右							1	殻長：>37mm、殻高：>24mm	
	不明							4		



第47図 1地区SD1出土のイシガイ科殻皮

## V 総括

### 1 調査の意義

江の河原遺跡は、丘陵および砂礫台地を分断するように形成された谷地形を埋める形で埋積する、狭小な扇状地上に立地している点に特徴がある。美祢市域の集落遺跡は主に砂礫台地上に立地している点で立地を異にしており、扇状地上で遺跡が確認されること自体が現時点では稀である。こうした状況下、狭小な扇状地での調査事例として希少であるとともに、その実態を把握することができるという点に、今回の調査の大きな意義が見出せる。

### 2 調査結果の概略

調査の結果を概略的に示すと、以下のようになる。

- ①13世紀後半～末に開拓されたと推定される農村（居住域と耕作地）が確認された。
- ②扇状地内は複数の微高地と低地に細分でき、居住域は微高地上に立地する。
- ③低地は耕作地として利用されており、その用水路と推定できる溝を検出した。
- ④15世紀後半～16世紀になると、土師器杯が非常に少ない一方で、青花椀の出土が割合的に多く出土しており、13世紀後半～14世紀前半とは様相が異なる。
- ⑤時期検証が不十分だが、およそ15世紀代には鉄製品の鑄造および鍛造加工を行っている。
- ⑥遺物量は激減するが、近世以降も存続し、現在にまで至る。
- ⑦現在の居住地は13世紀後半～末の居住域と概ね重複する。

江の河原遺跡周辺は現在、居住地と農地が展開しており、今回の調査契機もほ場整備に伴うものである。上記の所見から、今回の調査は現在の居住地と農地の原型となる中世の農村を確認したということになる。狭小な谷底平野での耕地拡大こそが、江の河原遺跡に集落が開拓された契機と考えられる。

### 3 遺物に関する所見

#### (1) 6地区SK1出土遺物について

6地区の遺物包含層からは、13世紀後半～14世紀前半の土師器がまとまって出土している。その中でも、土師器杯が一括廃棄された状況で検出された窪み（SK1）では、13世紀代の特徴をもつ器形と14世紀代の特徴を持つ器形が重なり合って分離できない状態で出土した。

法量および組成から、13世紀後半に位置づけられている本郷遺跡SK15出土資料と、14世紀前半に位置づけられている岡田・江良遺跡SK15出土資料との間に位置づけることが可能であり、13世紀末～14世紀初頭と位置づけておきたい。ただし、そもそもの基準資料（特に14世紀代）の時期比定が流動的な側面をもっているため、追検証は必要である。

なお、13世紀前半以前の資料は基本的にないことから、当遺跡が13世紀後半～末に開拓された集落・耕作地であると位置づけている。

#### (2) 谷状落ち込み出土遺物について

5地区で検出された谷状落ち込みの埋土からは、15世紀（特に後半）～16世紀の遺物がまとまって

出土した。ここからは、この時期の生活用具としての器種組成が基本的に揃っているが、土師器杯が非常に少なく、代わりに青花椀の出土量が高い割合で出土していた点に特徴がある。

これらの生活用具の使用者は、経済力の高い者（もしくは集団）が想定でき、13世紀後半～14世紀前半とは様相を異にする状況が想定できよう。

### （3） 鑄造・鍛冶関連遺物について

5地区SK1を中心に、スサ混じりの焼土塊および鋳滓らしきものが一定量出土した。金属学的分析を実施した結果、これらは炉壁片・鉄滓であり、鉄鑄物の鑄造と鍛造鉄器加工の双方が行われた可能性が高いことが判明した。

何を作っていたかで遺跡の評価が大きく変わるが、（2）の所見と合わせて、江の河原遺跡が単に農村と位置づけるだけでは完結しない側面を備えていることがうかがい知れる。

これらの時期については、5地区SK1出土土師器杯（56）から、15世紀末～16世紀前半を前後する時期のものと推定しているが、土器の時期比定そのものが不安定であるうえに、1点のみの出土資料からの評価である点で検証不足とならざるを得ない。今後の追検証が必要である。

## 4 遺構に関する所見

### （1） 1地区SD1について

1地区SD1は14世紀前半までに機能していた用水路で、集落が開拓された13世紀後半～末に形成されたものと推定している。この水路は地形に沿って蛇行する簡易なものであり、すでに形成されていた自然小流路に手を加えて掘削されたものであることが、土層断面から推定できる。なお、小川や水路の砂礫～砂泥底に生息するイシガイ科の貝類が出土したことも、用水路と解釈することと矛盾しない。

この用水路の延長上は、現在の水路と重複しているものと推定できる。したがって、現在の水路の一部は13世紀後半～14世紀前半頃の用水路を踏襲していることがわかる。

### （2） 遺構の立地について

今回の調査では、小規模な掘立柱建物が3・5・6地区で検出されており、かつ、遺物も一定量出土している。一方で、1・2・4地区は掘立柱建物を構成しそうな柱穴自体の検出が皆無に近く、かつ、遺物量も極めて少ない。このため、居住域と非居住域が明瞭に区別される。

居住域は砂礫層の堆積などによって形成された微高地上に立地するが、必ずしも微高地全体を利用しているわけではなく、微高地内でも片側に偏って分布する傾向が確認できた（3・5地区）。おそらく、洪水・氾濫の被害を受ける確率の高い箇所を避けた選地と考えられる。

時期別にみると、13世紀後半～14世紀前半の遺構・遺物は各居住域で一定量確認できており、居住域が散在的に分布する集落を想定できる。一方、15世紀～16世紀の遺構・遺物は基本的には5地区に一極集中しており、13世紀後半～14世紀前半とは様相を異にする。

13世紀後半～14世紀前半の様相を農村と仮定している以上、15世紀～16世紀の様相は農村とは異なる機能を担っていた可能性が考えられる。5地区は旧街道沿いに位置することから、陸路を重視した何らかの役割が想定できよう。しかし、現時点ではそれを具体化するのが難しい。遺物の所見で述べたように、鉄製品生産の内容によって評価は大きく変わる。

一方、現在の江の河原集落の分布はむしろ13世紀後半～14世紀前半の様相に近く、微高地内における分布の偏りすら踏襲している印象を受ける。山間部の谷筋に形成される農村の様相としてはこちらが典型的といえそうである。このため、15世紀後半～16世紀の分布のあり方は、遺物の所見とあわせて、単に農村と位置づけるのが困難な特殊な状況が浮き彫りとなろう。

## 5 まとめ

現代の江の河原の集落の原型は、13世紀後半～末に開拓された農村に求められ、居住地の立地や水路の配置などは当時の状況を踏襲している箇所が認められた。耕作地は開拓当初は地形に合わせた不整形のものであるが、現代に至るまでに直線的で規模の大きいものに改変されている。そして、今回のほ場整備によって、より直線的で大規模なものへと姿を変えることで、江の河原の集落は新たな段階を迎えることになるといえよう。

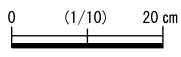
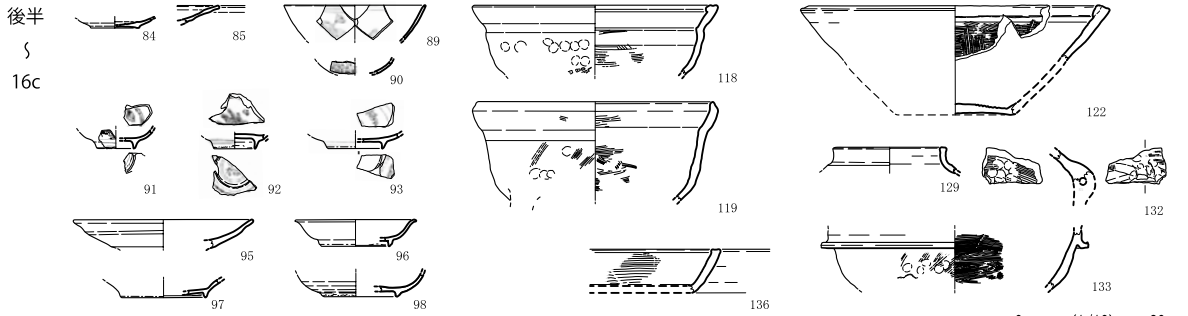
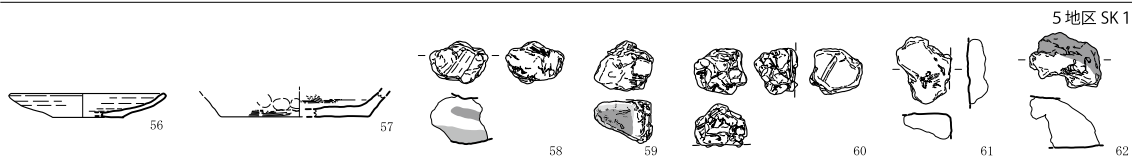
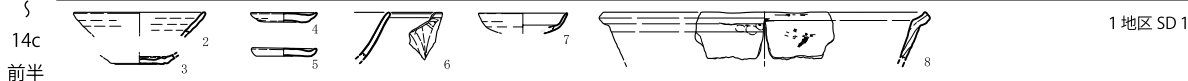
江の河原の集落が、開拓当初の基本構成を踏襲しつつも、時代に応じて徐々に姿を変えていった状況が浮かび上がったことが、今回の調査の最も大きな成果といえそうである。

また、これまでの県内における中世集落の調査事例は、比較的経済力の高い者（もしくは集団）に関する事例が多かった。これに対して江の河原遺跡は青磁・白磁も出土しているものの、基本的には一般集落の様相を示す事例として希少例と位置づけることができそうである。

一方で、時期比定にあいまいな側面が含まれる点、15世紀後半～16世紀の様相に対する解釈を提出できなかった点などの課題が未解決となった。将来的に周辺調査事例が加われば、あらためて検証および再評価していく必要があるだろう。

## 参考文献

- 小野正敏 1982 「15、16世紀の染付椀、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』第2号 日本貿易陶磁研究会  
小南裕一 2004 「付編 長門地域の中世土師器編年試案」『上太田遺跡 市の瀬遺跡 南ヶ畑遺跡』財団法人山口県教育財団山口県埋蔵文化財センター・豊北町教育委員会  
國守進 2012 「第二編第一章第三節 耕地の拡大」『山口県史 通史編 中世』山口県  
太宰府市教育委員会 2000 『大宰府条坊後XV - 陶磁器分類編 -』  
田中倫子 2012 「第五編第一章 諸産業の発達と流通経済の発展」『山口県史 通史編 中世』山口県  
日本道路公団山口工事事務所・山口県教育委員会 1996 『本郷遺跡』  
山口市教育委員会 2010 『大内氏館跡X I』  
渡辺一雄 2004 「第三章 遺跡からみた防長の中世」『山口県史 通史編 中世』山口県



第 48 図 微地形復原図・主要遺物変遷図



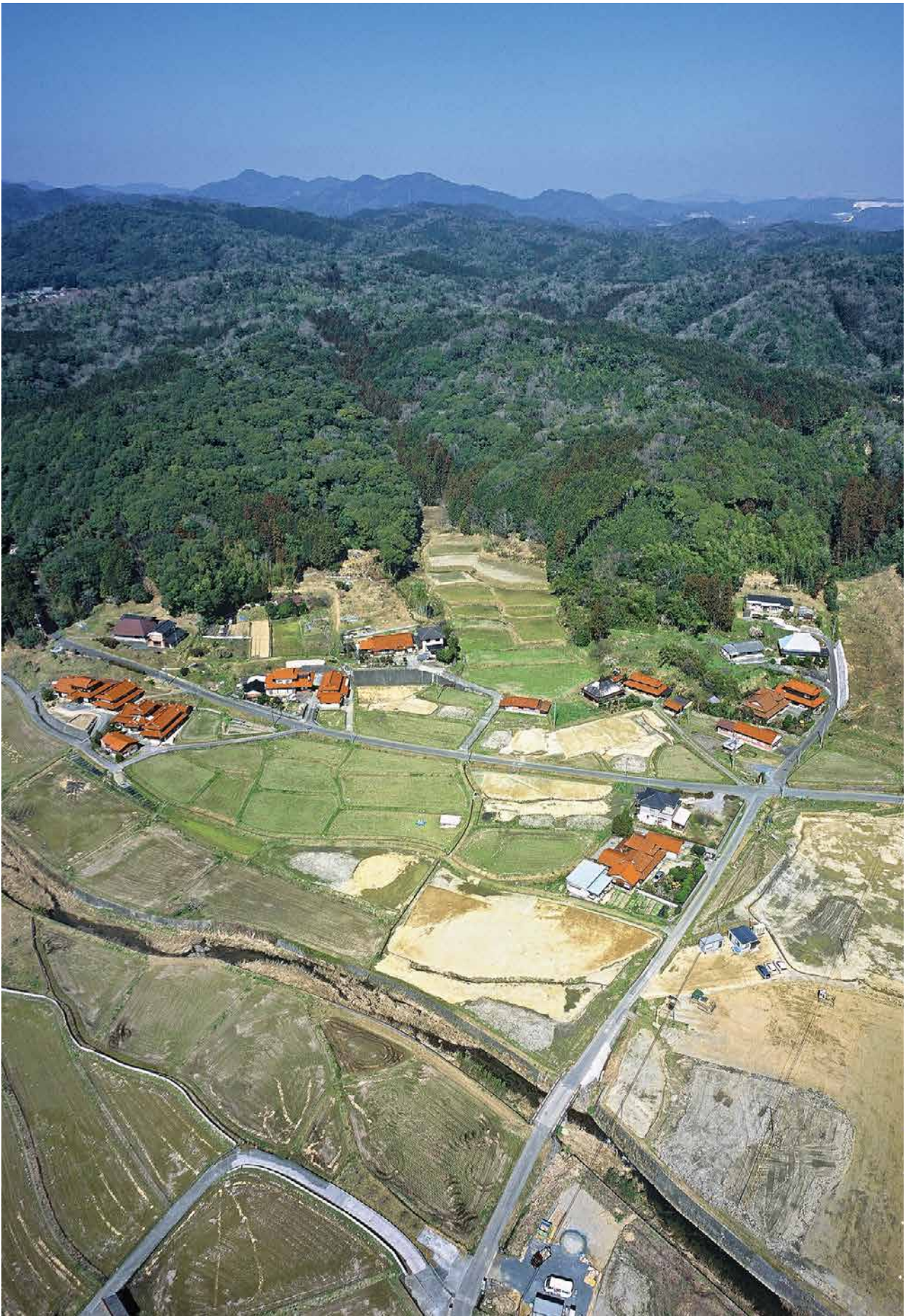
# 圖 版





調査区 全景（南東から）





調査区 全景（南西から）





調査区 遠景（北西から）



図版 4



1地区 全景（北から）



1地区 西壁南側土層（南東から）



1地区 東壁北側土層（南西から）



1地区 北壁東側土層（南東から）



1地区 北壁中央土層（南東から）





1地区 北壁西側土層（南から）



1地区 SD1 南東壁土層（西から）



1地区 SD1 完掘状況（北西から）



1地区 SD1 礫出土状況（南東から）



1地区 SD1 土層（南東から）



1地区 SD2 土層（南西から）



1地区 SD2 完掘状況（南西から）





2地区 全景（西から）



2地区 東壁土層（南西から）





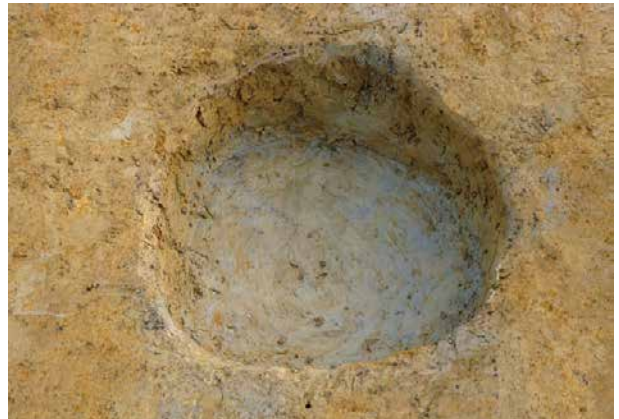
2地区 西壁土層（東から）



2地区 SK19土層（南から）



2地区 SK1土層（北から）



2地区 SK1完掘状況（北から）



2地区 SK13土層（西から）



2地区 SK13完掘状況（西から）



図版 8



3地区 全景（北から）



3地区 北壁東側土層（南から）



3地区 北壁西側土層（南から）





3 地区 北壁中央土層（南西から）



3 地区 西壁南側土層（南東から）



3 地区 西壁土層（北から）



3 地区 SP1 土器出土状況（北から）





4 地区 全景（北から）



4 地区 西壁土層（南から）



4 地区 北壁土層（南から）





4 地区 SK1 土層 (南西から)



4 地区 SK4 土層 (南西から)



4 地区 SD1・SD2 南側土層 (北から)



4 地区 SD1 中央土層 (南から)



4 地区 SK3・SP4 土層 (西から)





5地区 全景（北から）

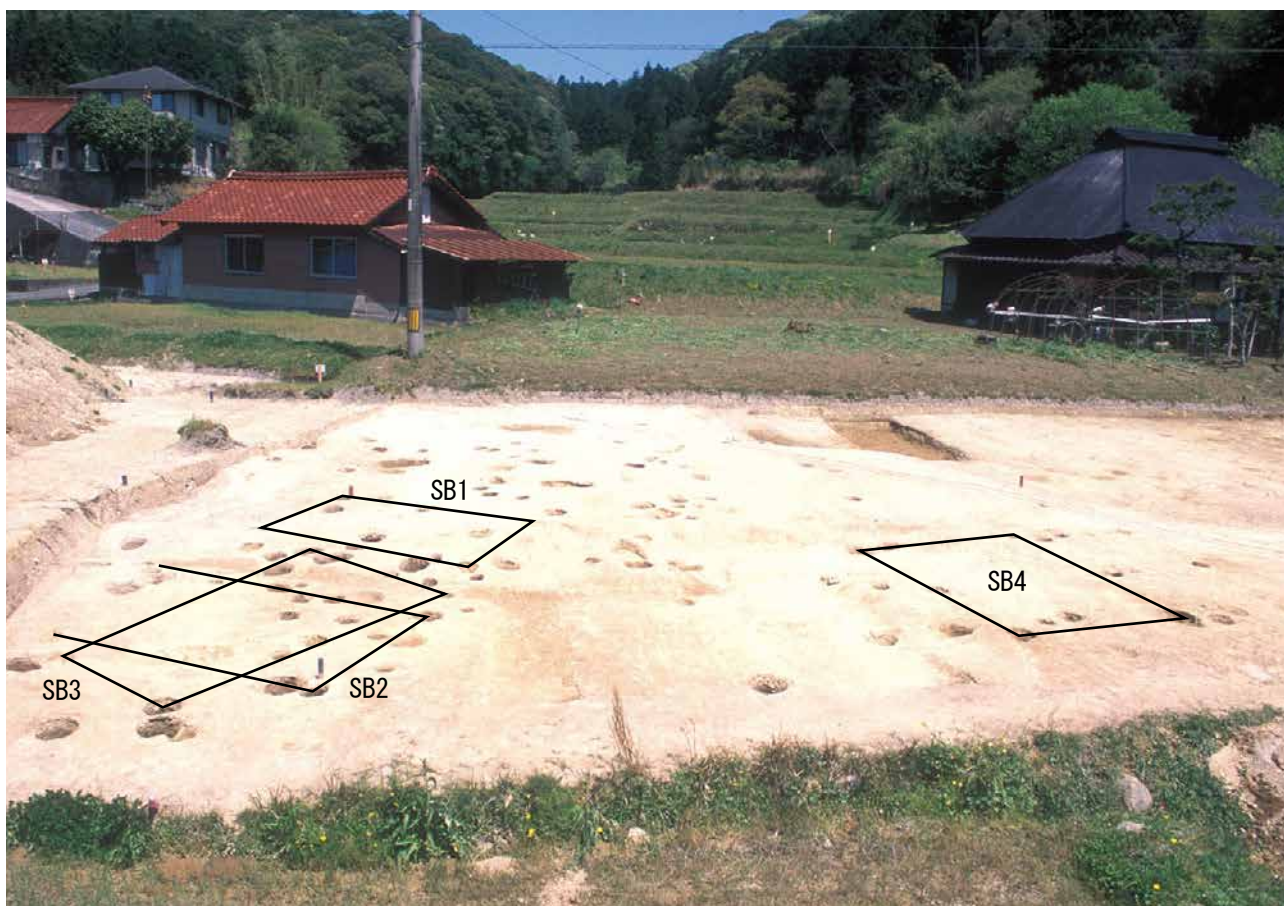


5地区北端 完掘状況（西から）





5 地区 西壁土層（北東から）



5 地区 掘立柱建物（SB1～SB4）（南から）



図版 14



5地区 SK1 土層 (東から)



5地区 SK3 土層 (南から)



5地区 SK3 完掘状況 (北から)



5地区 SP42 土層 (北から)



5地区 SP43 出土状況 (南から)





5地区 谷状落ち込み完掘状況（北西から）



5地区 北壁（谷状落ち込み）土層（南西から）





6地区 全景（北から）



6地区 西壁土層（南東から）



6地区 北壁西側土層（南東から）



6地区 北壁中央土層（南東から）





6地区 掘立柱建物 (SB1・SB2) (北から)



6地区 SK1 出土状況 (西から)



図版 18



6地区 SK5 土層（東から）



6地区 SK5 完掘状況（東から）



6地区 SD1 完掘状況（東から）



6地区 SD2 完掘状況（北から）



6地区 SD1 土層（東から）

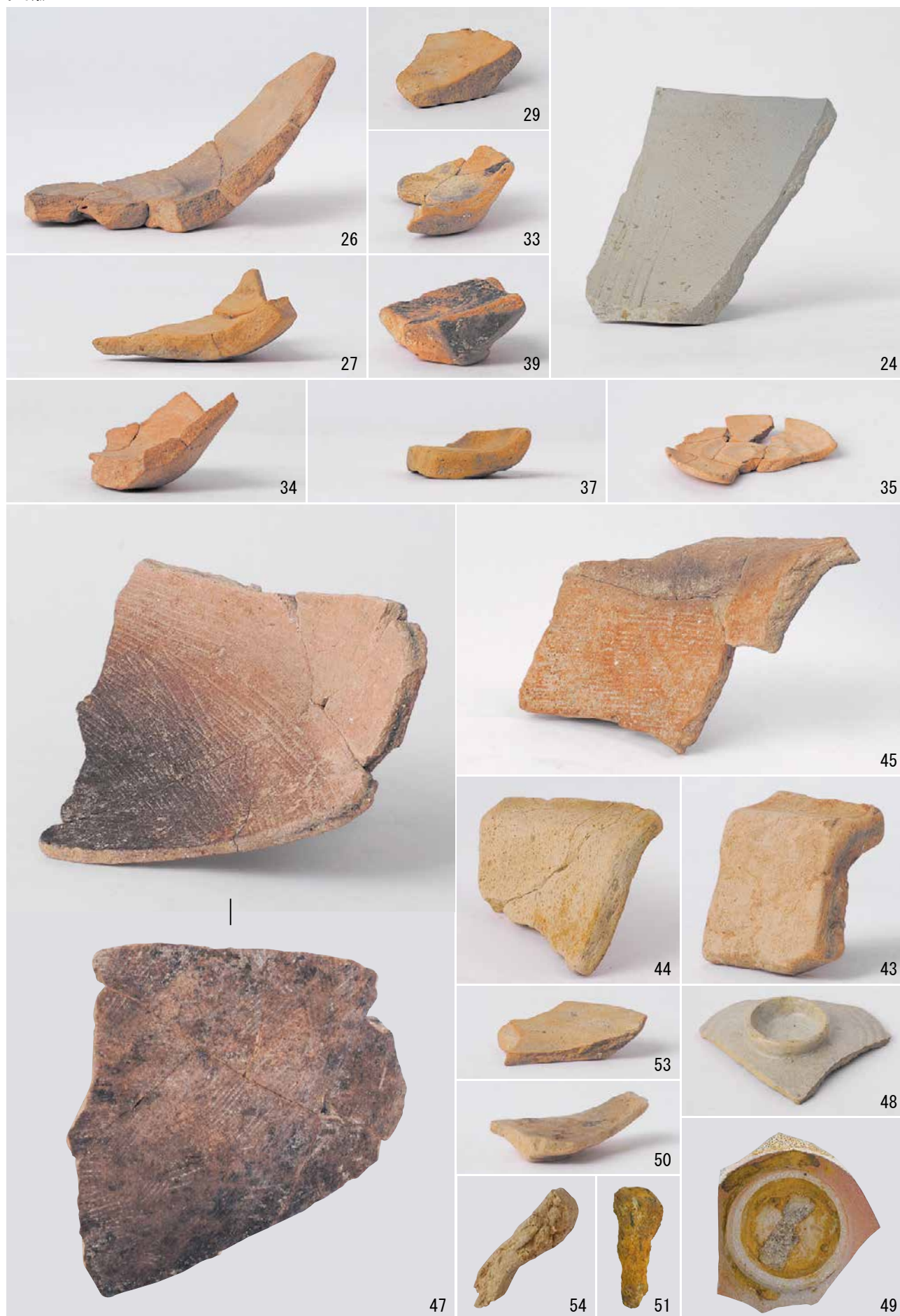


6地区 包含層遺物出土状況（西から）





1·2地区 出土遺物





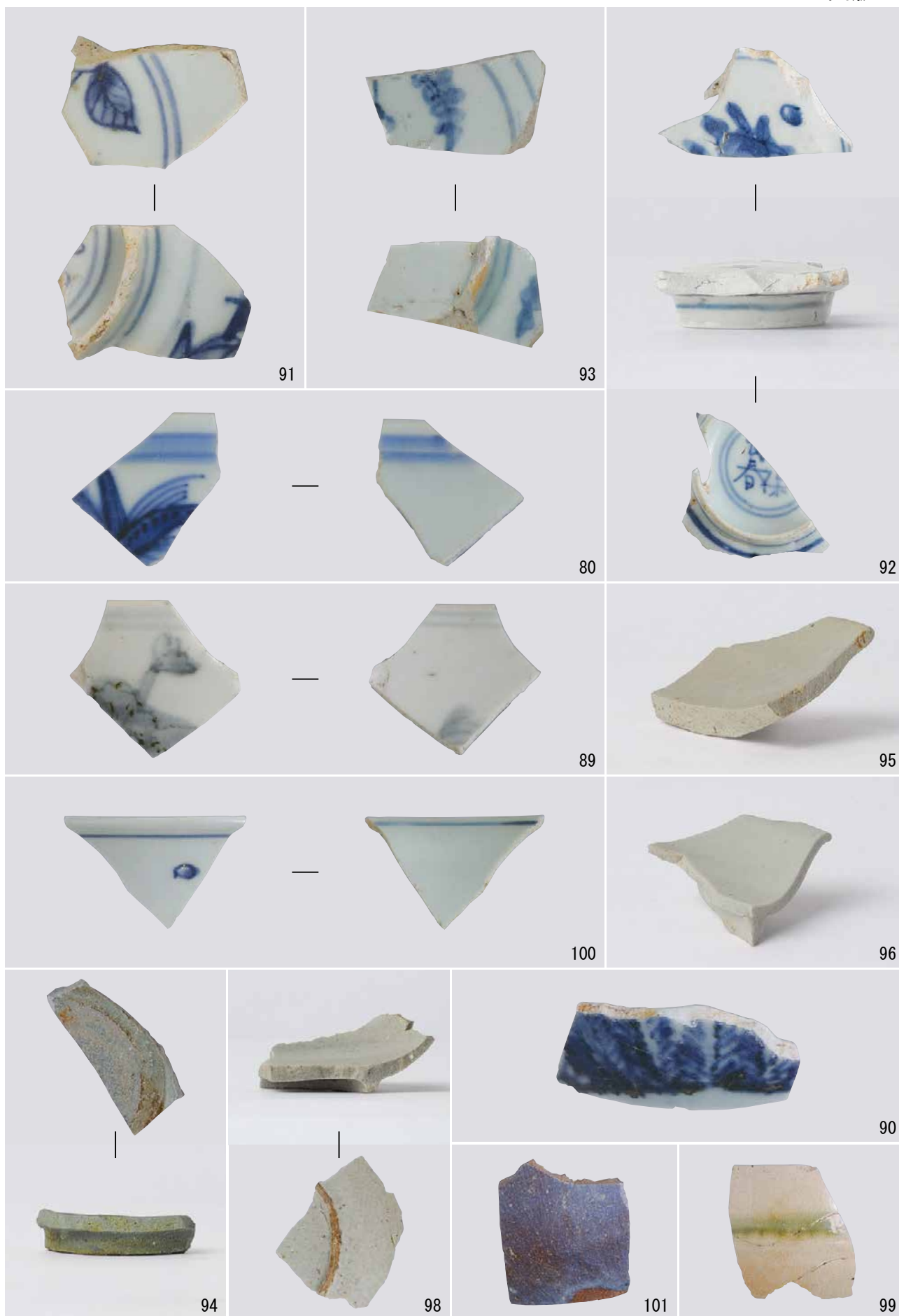
烧土塊・烧成破裂石片



5地区 出土遺物(1)







5地区 出土遺物(3)



图版 24



5地区 出土遺物(4)



5地区 出土遺物(5)







SK1 出土 土師器杯



150



151



152



153



154

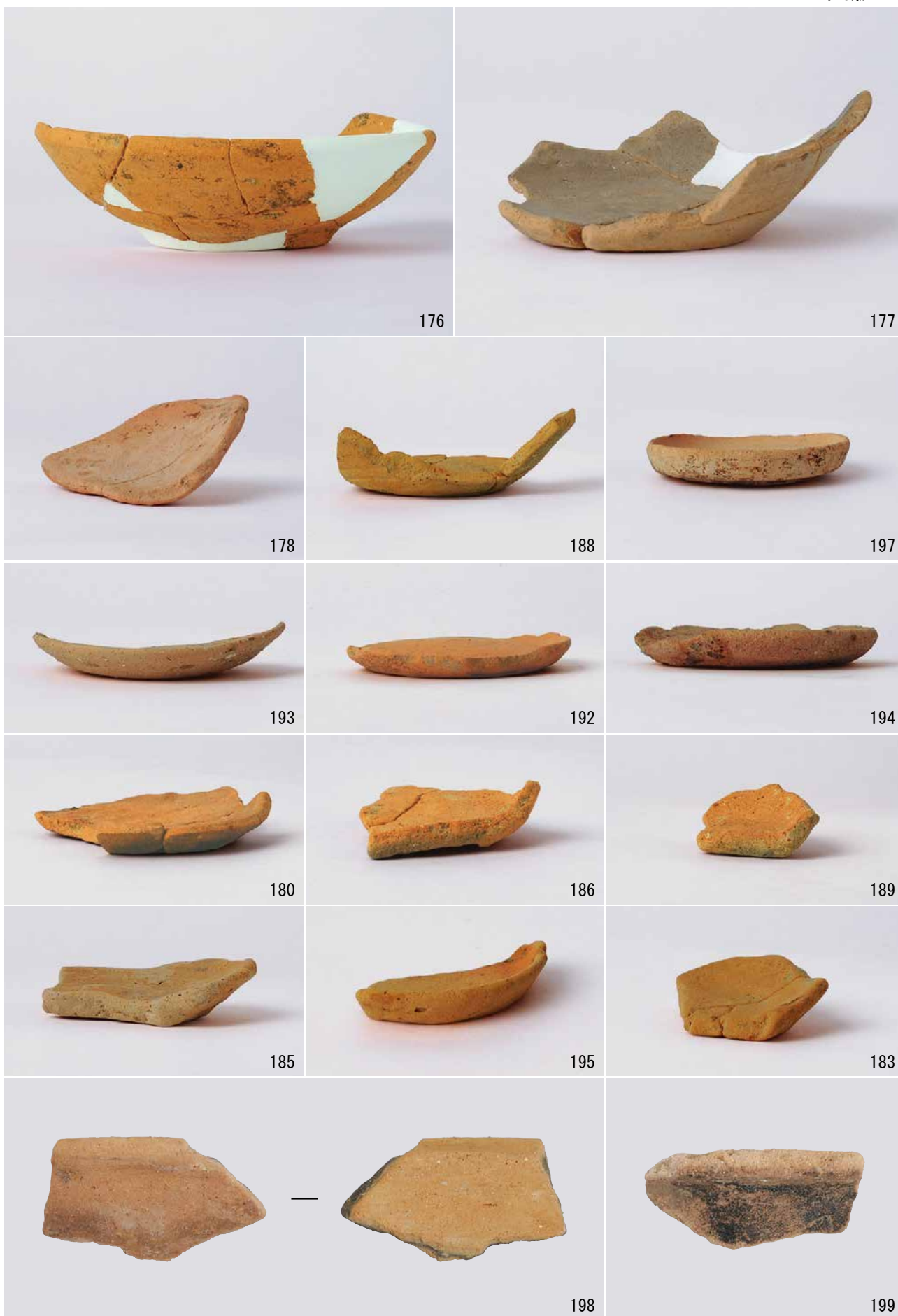


155

6地区 出土遺物(1)



6地区 出土遺物(2)



6地区 出土遺物(3)





6地区 出土遺物(4)

# 報告書抄録

ふりがな	えのがわらいせき
書名	江の河原遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第89集
編集著者名	上田克也（編）中里伸明 荒蒔周平
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL083-923-1060
発行年月日	西暦2015年3月16日（平成27年3月16日）

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
えのがわらいせき 遺跡	やまぐちけん 山口県 みねし 美祢市 ひがしあつちよう 東厚保町 かわがし 川東	352136		34° 8' 33"	131° 9' 27"	20131017 } 20140319 } 20140408 } 20140509	5,680	ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
江の河原遺跡	集落	中世 近世	掘立柱建物 7棟 土坑 39基 溝 12条 柱穴 836個 谷状落ち込み 1ヶ所	土師器 土師質土器 瓦質土器 輸入陶磁器 近世陶磁器 硯 鉄製品 炉壁・鍛冶滓	13世紀末～14世紀初頭の土師器一括資料 谷状落ち込みより15世紀～16世紀の遺物多数 鑄造および鍛冶関連遺物

要約	<p>江の河原遺跡は、美祢市南西部に位置し、厚狭川の支流である平原川（江の河原川）流域に散在する扇状地上に立地する集落遺跡である。</p> <p>調査の結果、13世紀後半～末頃に開拓された農村であり、微高地上で居住域を、低地にて耕作に伴う水路を検出した。居住域で出土した土師器杯は13世紀末～14世紀初頭のものであり、当地域の基準資料になりうる。</p> <p>15世紀～16世紀では、谷状落ち込みより青花や瓦質土器などの生活用具が多く出土しており、農村とは異なる様相を示すようになる。また、鑄造および鍛冶を遺跡内で行っている状況も確認できた。</p> <p>江の河原遺跡周辺は現在、居住地と耕作地が展開しているが、今回の調査は現在の居住地・農地の原型を確認できたことに大きな意義を見出せる。</p>
----	--



山口県埋蔵文化財センター調査報告 第89集

## 江の河原遺跡

2015年3月16日

編集・発行 公益財団法人山口県ひとつくり財団  
山口県埋蔵文化財センター  
〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号

印刷 児玉印刷株式会社  
〒755-0008 山口県宇部市明神町3丁目4番3号